出雲国田山古墳

昭和62年3月

教育委員会

出雲岡田山古墳

昭和62年3月

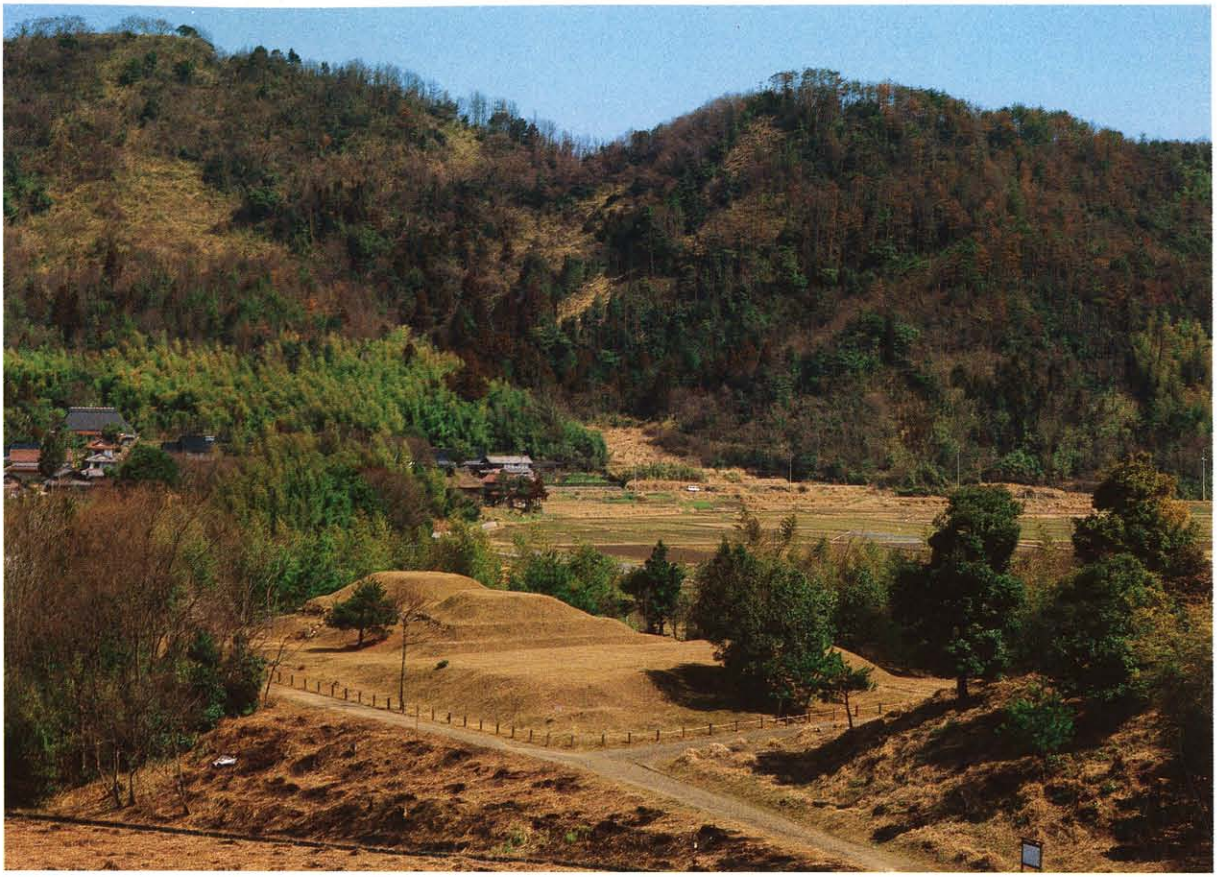
島根県教育委員会

鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀

銘文細部

金銅装三葉環頭大刀

銀金銅装円頭大刀



岡田山１号墳遠景

岡田山１号墳の横穴式石室

序

日本海に面した島根県は，原始・古代以来，幾多の歴史を育くんでまいりました。そして，特色ある貴重な文化財を数多く今日に伝えています。

埋蔵文化財については，近年の調査で数々の重要な学術成果を収めています。折しも，昭和58年12月，松江市岡田山１号墳出土の円頭大刀の一つから象嵌銘が発見されました。以来，この銘文及び岡田山古墳について，考古学・古代史学関係の種々の見解や研究が発表され，島根県の古代史に対する全国の関心が一段と高まることになりました。

発見された銘文は古代国家の形成過程に関わる文字も含まれており，他の出土品とともに貴重な文化財として昭和60年に重要文化財の指定を受けたところであります。

島根県では，これらの出土品を将来にわたって保存し，有効に活用していくために保存処理を施しましたが，象嵌銘入大刀については，専門の方がたの御指導を得て銘の表出をおこないました。そして，六所神社の協力で，岡田山古墳の所在する県立八雲立つ風土記の丘資料館で保管・展示しているところであります。

こうした中で，岡田山古墳についての報告書が関係者の御努力により刊行されることになりましたことは，誠に慶びにたえません。

島根県では，特色ある地域文化の振興を一つの施策としているところでありますが，本書が古代史の解明に寄与し，地域文化振興への一つの契機となることを心から期待するものであります。

終わりに，この事業を実施するにあたり御尽力いただきました関係各位に深く感謝の意を表します。

昭和62年3月

島根県知事　恒　松　制　治

発刊にあたって

島根県には，貴重な文化遺産が数多くのこされております。とりわけ，松江市の南郊，大庭・竹矢地区周辺は，県下でも有数の遺跡密集地であり，島根県では昭和47年に島根県立八雲立つ風土記の丘を開設し，文化財の保存・活用につとめてまいりました。

その風土記の丘地内に所在する岡田山１号墳の出土遺物について，錆化の進行等が認められたため，昭和57年度に財団法人元興寺文化財研究所に保存処理を委託したところ，Ｘ線調査により円頭大刀の刀身部に10数文字の銘文が発見されました。

島根県教育委員会では，発見された銘文が日本古代国家形成過程を解明する上できわめて貴重な資料であること，また岡田山古墳の基礎資料がこれまで十分に整備されていないことから，文化庁をはじめとする関係諸機関および多数の専門家の方がたによるご尽力をいただき，昭和59年以来岡田山古墳の保存整備計画を策定し，岡田山古墳の緊急調査・岡田山１号墳出土遺物の保存事業を計画的に進めてまいりました。

この間，昭和60年６月６日付けで岡田山１号墳出土遺物が一括国の重要文化財に指定される一方，県内では斐川町の荒神谷遺跡から銅剣と銅鐸・銅矛が大量出土するなど，貴重な発見が相次ぎ，全国的に大きな注目を集めたところであります。

県教育委員会では，文化財保護の重要性から，島根県新中長期計画において特色ある地方文化振興の重点施策として「八雲立つ風土記の丘整備」を計画し，その施策の推進につとめているところであります。

本書は，これまでに実施された岡田山古墳群の調査と岡田山１号墳出土遺物の保存処理の報告をまとめて発刊することにしたものであります。教育・学術資料として，いささかでもご活用いただければ幸いに存じます。

本書を刊行するにあたり，御執筆をいただいた方々に厚くお礼申しあげます。また，本書作成にあたり，多大の御指導・御協力を賜わりました六所神社・文化庁・奈良国立文化財研究所・東京国立文化財研究所・財団法人元興寺文化財研究所をはじめ関係各位に衷心よりお礼申しあげます。

昭和62年3月

島根県教育委員会教育長

栗　栖　理　知

例　言

1. 本書は，島根県松江市大草町字岡田884－3他に所在する岡田山古墳群に関する調査報告書である。
2. この遺跡は，昭和40年4月9日付けで「岡田山古墳」として国指定史跡となったものである。また，岡田山1号墳出土遺物は，昭和60年6月6日付けで「出雲岡田山古墳出土品」として重要文化財（考古資料）の指定を受けたものである。
3. 調査及び保存修理は下記の年度において実施した。なお，それぞれの調査関係者は調査・保存修理組織に記したとおりである。

   昭和45年度　墳丘整備前の発掘調査

   昭和57年度　出土品保存修理（国庫補助事業）

   昭和59年度　出土品調査等（国庫補助事業）

   昭和60年度　銘文表出等

   昭和61年度　報告書刊行等
4. 本書の執筆者は，調査・保存修理組織に記したとおりである。執筆分担は目次および各項末尾に記した。編集は，蓮岡法暲・勝部昭・宮沢明久・三宅博士の協力のもとに松本岩雄が行なった。
5. 英文要約は，片岡詩子・渡辺貞幸の協力のもとに森脇すみ・Sarah J. Taylor 両氏に翻訳していただいた。
6. 調査・保存修理から本書の刊行に至るまでの全期間を通じて，六所神社・文化庁・奈良国立文化財研究所・東京国立文化財研究所・財団法人元興寺文化財研究所をはじめ多くの方々から多大なる御指導・御協力を得た。深甚の謝意を表する次第である。
7. 表紙の題字は，恒松制治島根県知事による。

調査・保存修理組織

◆ 墳丘整備前の発掘調査（昭和45年度）

調査指導	山本　清（島根県文化財保護審議会委員）
	安原啓示（文化庁記念物課文化財調査官）
事務局	田部　勲（社会教育課長）
	石塚尊俊（社会教育課文化財係主幹）
	近藤　正（社会教育課文化財係文化財保護主事）
	長谷川　清（社会教育課文化財係主事）
	石橋逸郎（社会教育課研修員）
調査担当者	門脇俊彦（社会教育課文化財係研修員）
調査補助員	手島裕行（島根大学学生）
	本池啓子（島根大学学生）
	西尾克己（島根大学学生）
調査協力	井上狷介

◆ 出土品調査等（昭和59年度・岡田山古墳緊急調査）

調査指導	山本　清（島根県文化財保護審議会委員），町田　章（同），河原純之（文化庁記念物課主任文化財調査官），黒崎　直（文化庁記念物課文化財調査官），三輪嘉六（文化庁美術工芸課文化財調査官），安藤孝一（文化庁美術工芸課文化財調査官），前島己基（奈良国立博物館学芸課主任研究官），門脇俊彦（島根県文化財保護指導委員），西尾良一（同），勝部　昭（安来市立安来第一中学校教諭）
事務局	美多定秀（文化課長），永瀬忠治（文化課課長補佐），岩崎況一郎（文化係長），永塚太郎（埋蔵文化財第一係長），吉川　広（文化課主事），落部章二（財務課主事），田根裕美子（文化課嘱託）
調査担当者	蓮岡法暲（文化課課長補佐）松本岩雄（文化課主事）
調査員	宮沢明久（文化課文化財保護主事），川原和人（文化課文化財保護主事），卜部吉博（文化課主事），西尾克己（文化課主事），内田律雄（同），足立克己（同），三宅博士（八雲立つ風土記の丘学芸主事），平野芳英（同），柳浦俊一（八雲立つ風土記の丘文化財主事），広江耕史（同），長嶺康典（八雲立つ風土記の丘嘱託），大谷裕司（同），井上寛光（松江市立女子高校教諭），板垣　旭（文化課兼主事）
整理・実測	佐古和枝，林　健亮，瀬田明子，堀江五十鈴，青木紀子，浜田ヨシエ，島　澄子，三島千富美，原　俊二，柿田公子

◆ 銘文解読検討会（昭和58・59年度）

坪井清足	（奈良国立文化財研究所長）
田中　琢	（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）

狩野　久　（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮調査部長）
町田　章　（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長）
鬼頭清明　（奈良国立文化財研究所歴史研究室長）
岸　俊男　（京都大学教授）
山本　清　（島根県文化財保護審議会副会長）
小林行雄　（京都大学名誉教授）
藤沢一夫　（四天王寺国際仏教大学名誉教授）
水野正好　（奈良大学教授）
田代克己　（帝塚山短期大学教授）
浅野　清　（元興寺文化財研究所長）
巽　末治　（元興寺文化財研究所常務理事）
増澤文武　（元興寺文化財研究所保存科学研究室長）
西山要一　（元興寺文化財研究所主任研究員）
後藤貞成　（島根県教育委員会教育次長）
美多定秀　（島根県教育庁文化課長）
蓮岡法暐　（島根県教育庁文化課課長補佐）
勝部　昭　（島根県教育庁文化課埋蔵文化財第一係長――昭和58年度――）
永塚太郎　（島根県教育庁文化課埋蔵文化財第一係長――昭和59年度――）
松本岩雄　（島根県教育庁文化課主事）

◆ 遺物保存指導会・銘文表出指導会（昭和59年度）

坪井清足　（奈良国立文化財研究所長）
田中　琢　（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）
町田　章　（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長）
水野正好　（奈良大学教授）
勝部明生　（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館次長）
田代克己　（帝塚山短期大学教授）
馬淵久夫　（東京国立文化財研究所保存科学部化学研究室長）
中野政樹　（東京芸術大学教授）
狩野　久　（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長）
鬼頭清明　（奈良国立文化財研究所歴史研究室長）
藤沢一夫　（四天王寺国際仏教大学名誉教授）
岸　俊男　（奈良県立橿原考古学研究所長）
小林行雄　（京都大学名誉教授）
山本　清　（島根県文化財保護審議会副会長）
浅野　清　（元興寺文化財研究所長）
巽　末治　（元興寺文化財研究所常務理事）
増澤文武　（元興寺文化財研究所保存科学研究室長）

西　山　要　一　　（元興寺文化財研究所主任研究員）
安　井　幸　雄　　（元興寺文化財研究所研究員）
後　藤　貞　成　　（島根県教育委員会教育次長）
美　多　定　秀　　（島根県教育庁文化課長）
蓮　岡　法　暲　　（島根県教育庁文化課課長補佐）
永　塚　太　郎　　（島根県教育庁文化課埋蔵文化財第一係長）
松　本　岩　雄　　（島根県教育庁文化課主事）

◆　島根県立八雲立つ風土記の丘資料館収蔵・展示施設整備指導者（昭和59・60年度）

山　本　　清　　（島根県文化財保護審議会副会長）
町　田　　章　　（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長）
馬　淵　久　夫　　（東京国立文化財研究所保存科学部化学研究室長）
有　賀　祥　隆　　（奈良国立博物館資料管理研究室長）

◆　報告書刊行（昭和61年度）

事　務　局　　熊　谷　正　弘　　（島根県教育庁文化課長）
安　達　富　治　　（島根県教育庁文化課課長補佐）
矢　内　高太郎　　（島根県教育庁文化課文化係長）
石　井　　悠　　（島根県教育庁文化課埋蔵文化財第二係長）
吉　川　　広　　（島根県教育庁文化課主事）
白　根　敬　三　　（島根県教育庁財務課主事）
執　筆　者　　勝　部　　昭　　（安来市立安来第一中学校教諭）
平　野　芳　英　　（島根県立八雲立つ風土記の丘学芸主事）
蓮　岡　法　暲　　（島根県教育庁文化課課長補佐）
門　脇　俊　彦　　（松江市立津田小学校教諭）
永　塚　太　郎　　（島根県教育庁文化課埋蔵文化財第一係長）
川　原　和　人　　（島根県教育庁文化課文化財保護主事）
三　宅　博　士　　（島根県立八雲立つ風土記の丘学芸主事）
松　本　岩　雄　　（島根県教育庁文化課文化財保護主事）
西　尾　良　一　　（島根県文化財保護指導委員・出雲郵便局職員）
柳　浦　俊　一　　（島根県立八雲立つ風土記の丘文化財主事）
長　嶺　康　典　　（島根県立八雲立つ風土記の丘嘱託）
昌　子　寛　光　　（松江市立女子高等学校教諭）
鬼　頭　清　明　　（奈良国立文化財研究所歴史研究室長）
町　田　　章　　（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）
岸　　俊　男　　（奈良県立橿原考古学研究所長）
中　野　政　樹　　（東京芸術大学教授）
沢　田　正　昭　　（奈良国立文化財研究所保存化学研究室長）

馬　淵　久　夫	（東京国立文化財研究所保存科学部化学研究室長）
富　沢　　威	（慶応大学講師）
清　永　欣　吾	（日立金属株式会社安来工場冶金研究所長）
松　田　隆　嗣	（元興寺文化財研究所研究員）
見　城　敏　子	（東京国立文化財研究所物理研究室長）
横　山　　鼎	（島根大学教授）
飯　泉　　滋	（島根大学助教授）
渡　辺　暉　夫	（島根大学助教授）
山　本　　清	（島根県文化財保護審議会副会長）
増　沢　文　武	（元興寺文化財研究所保存科学研究室長）
安　井　幸　雄	（元興寺文化財研究所研究員）
西　山　要　一	（奈良大学助教授）

■ 指導・助言・協力

六所神社，文化庁，奈良国立文化財研究所，東京国立文化財研究所，東京国立博物館，奈良国立博物館，京都国立博物館，京都大学，東京芸術大学，立教大学，奈良県立橿原考古学研究所，倉吉市立博物館，和鋼記念館，元興寺文化財研究所，島根県立博物館，島根県立図書館，島根県立八雲立つ風土記の丘，松江市教育委員会，出雲市教育委員会，大田市教育委員会，安来市教育委員会，斐川町教育委員会，石見町教育委員会，吉岡光弘，吉岡弘行，岸　俊和，岸みさ子，末永雅雄，小野山節，岡内三真，小川忠博，河原純之，三輪嘉六，安藤孝一，菅谷文則，河上邦彦，須藤聖子，肥塚保隆，鍵谷純子，大橋泰夫，鋤柄俊夫，横倉興一，小田富士雄，大谷　猛，安藤鴻基，中山清隆，桐原　健，金井塚良一，梅沢太久夫，亀井正道，村井嵓雄，望月幹夫，森　郁夫，真田広幸，森下哲哉，根鈴輝雄，根鈴智津子，土井珠美，佐々木稔，速水保孝，名越　勉，曳野律夫，池田満雄，村上　勇，岡崎雄二郎，田辺武夫，東森市良，田中義昭，渡辺貞幸，平野邦雄，直木孝次郎，井上喜弘，井上治夫，北村久美子，内田文恵，石富　歩，藤間亨，近藤加代子，本間恵美子，菅井寿則，置田雅昭，加田恵康，渡部満明，金築　基，宍道年弘，瓊 唵 琥，Lucy van den Brul。

（敬称略・順不同）

出雲岡田山古墳

本文目次

第Ⅰ部　岡田山古墳群の調査

第1章　遺跡の位置と歴史的環境 ……（勝部　昭・平野芳英）…… 3

第1節　遺跡の位置…… 3

第2節　周辺の遺跡…… 5

第2章　調査と遺跡保護の経過……19

第1節　研究略史 ……（蓮岡法暲）……19

第2節　昭和45年度調査の経過……（門脇俊彦）……33

第3節　遺跡の保護と調査後の措置 ……（蓮岡法暲・永塚太郎）……33

1.　古墳発見後の経過 ……33

2.　昭和45年度の調査と古墳整備 ……34

3.　遺物発見後の経過と保存処理 ……35

第3章　岡田山1号墳の調査 ……37

第1節　古墳群の構成 ……（門脇俊彦）……37

第2節　1号墳の墳丘 ……（門脇俊彦）……37

第3節　1号墳の内部構造 ……（門脇俊彦・川原和人）……40

第4節　1号墳遺物出土状況 ……42

1.　石室内遺物出土状況の復元……（蓮岡法暲）……42

2.　墳丘上遺物出土状況……（門脇俊彦）……43

第5節　1号墳出土遺物 ……44

1.　武　器 ……（三宅博士・松本岩雄）……45

2.　鏡　鑑 ……（三宅博士・松本岩雄）……52

3.　装身具 ……（三宅博士・松本岩雄）……52

4.　馬　具……（西尾良一）……53

5.　須恵器……（柳浦俊一）……59

6.　埴　輪 ……（長嶺康典・昌子寛光）……67

7.　土師器・土製品……（松本岩雄）……72

第6節　銘文解読 ……（鬼頭清明）……72

第4章　岡田山2～7号墳の調査 ……76

第1節　岡田山2号墳……（三宅博士・松本岩雄）……76
第2節　岡田山3号墳 ……（門脇俊彦）……77
第3節　岡田山4号墳 ……（門脇俊彦）……77
第4節　岡田山5号墳 ……（門脇俊彦）……78
第5節　岡田山6号墳 ……（門脇俊彦）……78
第6節　岡田山7号墳 ……（門脇俊彦）……79

第5章　その他の遺構・遺物 ……80

第1節　遺　構 ……（松本岩雄）……80
第2節　出土遺物……81
1.　縄文土器……（松本岩雄）……81
2.　石　斧……（松本岩雄）……81
3.　墳裾埋納遺物……（三宅博士）……81

第6章　遺構・遺物・銘文の検討 ……84

第1節　岡田山1号墳の儀仗大刀についての検討……（町田　章）……84
1.　儀仗大刀の概観 ……84
2.　金銅装三葉環頭大刀と銀金銅装円頭大刀 ……86
3.　鉄地銀象嵌円頭大刀 ……90
4.　まとめ ……96
第2節　岡田山1号墳の石室構造と築造工程 ……（川原和人）……99
第3節　馬具の検討 ……（西尾良一）… 102
第4節　須恵器の検討 ……（柳浦俊一）… 112
第5節　円筒埴輪の検討 ……（長嶺康典・昌子寛光）… 114
第6節　日本古代史上における岡田山鉄刀銘文の意義
——「額田部臣」と倭屯田——……（岸　俊男）… 118

第7章　遺物の科学的調査 …… 131

第1節　象嵌について ……（中野政樹）… 131
第2節　馬鈴・金環・金銅丸玉等の材質調査 ……（沢田正昭）… 132
1.　分析方法 …… 132
2.　分析結果 …… 132
第3節　銀の材質調査 ……（馬淵久夫・富沢　威）… 135
第4節　島根県の古墳より出土した鉄器の化学分析とその金属学的調査……（清永欣吾）… 136
1.　資　料 …… 136

2. 化学組成 …… 136
3. 走査型電子顕微鏡および EPMA による組織調査 …… 140
4. 考　察 …… 142
第5節　鉛同位体比による原料産地推定 ……（馬淵久夫）… 167
1. はじめに …… 167
2. 実験法 …… 167
3. 結　果 …… 167
4. 考　察 …… 167
5. まとめ …… 171
第6節　鞘木の用材について ……（松田隆嗣）… 172
1. 樹種の同定方法 …… 172
2. 鞘木の用材について …… 172
3. 終りに …… 173
第7節　岡田山古墳出土大刀上の漆膜の同定 ……（見城敏子）… 176
第8節　葺石・石室石材について ……（横山　鼎・飯泉　滋・渡辺暉夫）… 178
1. デイサイト質～流紋岩質凝灰岩 …… 178
2. カンラン石玄武岩類 …… 178
3. 両輝石安山岩 …… 179
4. 優白色酸性岩 …… 179
附. 岩屋後古墳を構成する岩石 …… 179

第8章　総　　括 ……（山本　清・松本岩雄）… 183

第Ⅱ部　岡田山1号墳出土遺物の保存修理

第1章　遺物保存事業の経過と基本方針 ……（松本岩雄）… 191

第1節　遺物の保存修理経過 …… 191
第2節　遺物保存事業の基本方針と実施状況 …… 194

第2章　銘文入円頭大刀の保存処理と銘文表出 …… 198

第1節　X線透過試験 ……（増澤文武）… 198
1. はじめに …… 198
2. X線透過試験の条件 …… 198
3. X線透過試験の結果 …… 199
第2節　保存処理 ……（安井幸雄）… 201
1. はじめに …… 201
2. 保存処理前の状態 …… 201

3. 保存処理方針 …… 201
4. 保存処理工程 …… 202
5. おわりに …… 204
第3節 銘文の表出 …… (西山要一) … 205
1. 銘文表出の準備 …… 205
2. 第10字「大」の試験的表出 …… 206
3. 全銘文の表出 …… 207
4. 表出の仕上げと記録 …… 213
第4節 象嵌分析結果について …… (松田隆嗣) … 214
1. 分析方法 …… 214
2. 象嵌の分析位置 …… 214
3. 象嵌の分析結果 …… 217
第5節 文字表出後の処理 …… (安井幸雄) … 219
1. はじめに …… 219
2. 保存処理工程 …… 219
第6節 象嵌文字表出後のX線透過試験 …… (安井幸雄) … 219

第3章 その他の金属器保存処理 …… 220

第1節 保存処理 …… (安井幸雄) … 220
1. はじめに …… 220
2. 保存処理を行なった遺物 …… 220
3. 保存処理前の状態 …… 220
4. 保存処理の方針 …… 220
5. 保存処理の工程 …… 220
6. 結 果 …… 220
第2節 X線透過試験 …… (増澤文武) … 227

第4章 複製品の製作 …… (松本岩雄) … 228

第1節 原形複製品の製作 …… 228
第2節 在銘複製品の製作 …… 228

附 編

出雲国八束郡岡田山古墳調査報告(『中央史壇』第44・45号) …… (梅原末治) … 231

English Summary …… 237

図 版

原　色　図　版

巻首図版１　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀
巻首図版２　銘文細部
金銅装三葉環頭大刀
銀金銅装円頭大刀
巻首図版３　岡田山１号墳遠景
岡田山１号墳の横穴式石室

図　版　目　次

図版 1　岡田山古墳群周辺の地形図
図版 2　岡田山古墳群分布図
図版 3　岡田山１号墳墳丘実測図
図版 4　岡田山１号墳貼石および墳丘断面実測図
図版 5　岡田山１号墳石室実測図
図版 6　岡田山１号墳家形石棺実測図
図版 7　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀実測図および断面模式図
図版 8　金銅装三葉環頭大刀・銀金銅装円頭大刀実測図および断面模式図
図版 9　鉄鏃・弓飾金具実測図
図版10　金銅製丸玉・金環・刀子実測図
図版11　鞍金具実測図
図版12　轡・馬鈴実測図
図版13　雲珠・辻金具・環状繋絡金具実測図
図版14　内行花文鏡・須恵器実測図
図版15　須恵器実測図
図版16　須恵器実測図
図版17　須恵器・土師器・竈実測図
図版18　円筒埴輪実測図(1)
図版19　円筒埴輪実測図(2)
図版20　円筒埴輪実測図(3)
図版21　円筒埴輪実測図(4)
図版22　円筒埴輪実測図(5)
図版23　岡田山２号墳墳丘実測図
図版24　土師質土器・磁器皿・石鉢・腰刀実測図
図版25　土師質土器実測図
図版26　岡田山古墳群周辺空中写真
図版27　岡田山古墳群外形
27-1　茶臼山からみた岡田山古墳群（昭和45年撮影）
27-2　東からみた墳丘（昭和40年撮影）
図版28　岡田山１号墳の外形
28-1　北からみた１号墳の墳丘
28-2　発掘調査前の１号墳墳丘
図版29　遺跡からの遠望
29-1　１号墳墳頂から東方の大山を望む
29-2　１号墳墳頂から北方の茶臼山を望む
図版30　岡田山１号墳の後方部
30-1　１号墳後方部北側の貼石（北から）
30-2　１号墳後方部北側の貼石（東から）
図版31　岡田山１号墳の後方部
31-1　１号墳後方部北側の貼石（北西から）
31-2　１号墳後方部北側の貼石（西から）
図版32　岡田山１号墳のくびれ部・後方部
32-1　１号墳くびれ部西側の貼石・埴輪（南西から）
32-2　１号墳後方部西側の貼石（西から）
図版33　岡田山１号墳の後方部・くびれ部
33-1　１号墳後方部東側の貼石（南東から）
33-2　１号墳くびれ部東側の貼石・埴輪（南東から）
図版34　岡田山１号墳くびれ部東側
34-1　１号墳くびれ部東側の貼石と埴輪出土状況（南から）
34-2　１号墳くびれ部東側の埴輪出土状況細部

図版35　岡田山１号墳後方部下段
35-1　１号墳後方部東側下段
35-2　１号墳後方部東側下段の埴輪出土状況
図版36　岡田山１号墳の前方部
36-1　１号墳前方部西側の貼石と埴輪出土状況（北から）
36-2　１号墳前方部東側の貼石と埴輪出土状況（東から）
図版37　岡田山１号墳墳裾遺物出土状況
37-1　１号墳墳裾埴輪・須恵器出土状況細部
37-2　１号墳墳裾埴輪出土状況細部
図版38　岡田山１号墳石室閉塞石
38-1　１号墳石室の閉塞状況（南西から）
38-2　１号墳石室の閉塞状況（北西から）
図版39　岡田山１号墳の石室
39-1　１号墳玄室の奥壁（西から）
39-2　１号墳石室の天井石
図版40　岡田山１号墳の石室
40-1　１号墳石室の羨道部と玄室（西から）
40-2　玄室奥壁側から玄門部をみる（東から）
40-3　玄室奥壁側から玄門北西隅をみる（南東から）
図版41　岡田山１号墳の石室と家形石棺(西から)
図版42　岡田山１号墳玄室内細部
42-1　玄室の奥壁と北側壁のコーナー
42-2　玄室天井部見上状況
42-3　家形石棺と北側壁の隙間状況
42-4　家形石棺と南側壁の隙間状況
図版43　岡田山１号墳の家形石棺と箱式石棺様施設
43-1　箱式石棺様施設（東から）
43-2　家形石棺（西から）
43-3　家形石棺（天井部から）
図版44　整備後の岡田山１号墳
44-1　整備後の１号墳墳丘（昭和59年撮影）
44-2　整備後の１号墳墳丘（昭和46年撮影）
図版45　岡田山１号墳出土遺物
45-1　石室内出土遺物（『島根県史』大正14年刊より）
45-2　石室内出土遺物（『島根県史』編さんの折に撮影）
図版46　岡田山１号墳出土の大刀と刀子
46-1　１号墳石室内出土大刀（大正14年撮影――原板　京都大学所蔵――）
46-2　１号墳石室内出土刀子（大正14年撮影――原板　京都大学所蔵――）
図版47　岡田山１号墳出土遺物
47-1　１号墳石室内出土須恵器（大正14年撮影――原板　京都大学所蔵――）
47-2　１号墳石室内出土遺物（現存品――昭和60年撮影）
図版48　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀
図版49　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀
図版50　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀の柄頭と柄細部
図版51　岡田山１号墳出土大刀
51-1　金銅装三葉環頭大刀
51-2　銀金銅装円頭大刀
51-3　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀
図版52　岡田山１号墳出土大刀細部
52-1　金銅装三葉環頭大刀
52-2　銀金銅装円頭大刀
52-3　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀
図版53　岡田山１号墳出土大刀細部
53-1　金銅装三葉環頭大刀細部（左：柄部　中：鞘飾柄とＣ文字　右：鞘尻部
53-2　銀金銅装円頭大刀細部（左：柄部　中：鞘口金具，佩表側　右：鞘口金具，棟側）
図版54　岡田山１号墳出土鏡・金環・刀子
図版55　岡田山１号墳出土鉄鏃・弓飾金具
55-1　鉄鏃
55-2　鉄鏃茎部
55-3　弓飾金具
図版56　岡田山１号墳出土鞍金具・環状繋絡金具・金胴製丸玉

図版57　岡田山１号墳出土金銅鏡板付轡
図版58　岡田山１号墳出土雲珠・辻金具
図版59　岡田山１号墳出土須恵器(1)
図版60　岡田山１号墳出土須恵器(2)
図版61　岡田山１号墳出土須恵器(3)
図版62　岡田山１号墳出土須恵器(4)
図版63　岡田山１号墳出土須恵器(5)
図版64　岡田山１号墳出土須恵器(6)
64-1　須恵器外面
64-2　須恵器内面
図版65　岡田山１号墳出土須恵器(7)
図版66　岡田山１号墳出土埴輪(1)
図版67　岡田山１号墳出土埴輪(2)
図版68　岡田山１号墳出土埴輪(3)
図版69　岡田山１号墳出土埴輪(4)
図版70　岡田山１号墳出土埴輪(5)
図版71　岡田山３号墳の埋葬施設
71-1　３号墳箱式石棺の調査状況
71-2　３号墳箱式石棺蓋石
71-3　３号墳箱式石棺
図版72　岡田山４・５号墳の埋葬施設
72-1　４号墳箱式石棺
72-2　４号墳箱式石棺
72-3　５号墳直刀出土状況
72-4　１号墳前方部下の５号墳盛土状況
図版73　岡田山１号墳墳裾埋納遺物出土状況
73-1　墳裾埋納遺物出土状況全景
73-2　墳裾埋納遺物出土状況細部
図版74　岡田山１号墳周辺出土遺物
74-1　土師器甕（左上），竈（右上），縄文土器（左下），石斧（右下）
74-2　土師質土器皿
図版75　岡田山１号墳墳裾出土土師質土器皿・磁器皿
図版76　岡田山１号墳墳裾出土石鉢・腰刀
図版77　岡田山２号墳と１号墳出土大刀Ｘ線写真
77-1　２号墳の墳丘（西から）
77-2　１号墳出土大刀のＸ線写真（上：三葉環頭大刀鞘口部中：同鞘尻部下：円頭大刀鞘口部）
図版78　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀の刀身および破片Ｘ線写真
図版79　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀の柄部Ｘ線写真
79-1　棟部の象嵌の有無の確認
79-2　刃の部分のステレオ撮影
図版80　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀の柄部Ｘ線写真
図版81　鉄地銀象嵌「額田部臣」銘大刀の柄部Ｘ線写真

挿図目次

第１図　岡田山古墳群の位置…… 3
第２図　岡田山古墳群周辺微地形分類図…… 4
第３図　岡田山古墳群周辺の遺跡分布図……4・5
第４図　山代二子塚古墳実測図…… 7
第５図　山代方墳実測図…… 8
第６図　大庭鶏塚古墳実測図…… 9
第７図　井ノ奥４号墳実測図……10
第８図　石屋古墳実測図……11
第９図　御崎山古墳実測図……12
第10図　古天神古墳実測図……12
第11図　寺床１号墳実測図……13
第12図　意宇平野計画地割想定復原図……14
第13図　岡田山１号墳トレンチ配置図……33
第14図　岡田山古墳群および
　　その周辺の整備計画……34
第15図　岡田山１号墳の墳丘整備……35
第16図　岡田山古墳群分布図……37
第17図　玄門の閉塞に使用された石……41
第18図　羨道部閉塞状況実測図……42
第19図　石室内遺物出土位置……43
第20図　墳丘上遺物出土状況実測図……43
第21図　金銅装三葉環頭大刀・銀金銅装円頭
　　大刀復元模式図……46
第22図　亀甲繋鳳凰文展開図・区割図……47
第23図　亀甲繋鳳凰文展開写真……48
第24図　岡田山１号墳出土の馬具……54
第25図　鞍金具眉形鉄地金及び前輪裏面図……55
第26図　円筒埴輪各部名称・計測区分図……67
第27図　銘文実測図……78
第28図　藤原宮跡・平城宮跡出土木簡……74
第29図　３号墳石棺蓋石・
　　４号墳箱式石棺実測図……77
第30図　５号墳盛土状況土層断面図……78
第31図　６号墳墳丘実測図……78
第32図　A群小マウンド実測図……80
第33図　B群小マウンド実測図……80
第34図　縄文土器・石斧実測図……81
第35図　環頭大刀実測図……87
第36図　円頭大刀実測図(1)……89
第37図　円頭大刀実測図(2)……91
第38図　装飾大刀編年図……93
第39図　出雲地方横穴式石室実測図…… 100
第40図　上塩冶築山古墳石室実測図…… 101
第41図　岡田山古墳・護国神社古墳出土
　　鏡板実測図…… 103
第42図　馬鈴実測図…… 106
第43図　馬具の相対的前後関係模式図…… 107
第44図　須恵器子持壺・子壺付蓋…… 113
第45図　出雲地方出土の円筒埴輪…… 116
第46図　出雲庄復原図…… 125
第47図　Ni, Co 及び Cu 含有量の
　　古墳期別平均含有量の推移…… 139
第48図　鉛同位体比の模式図（ａ式図）…… 169
第49図　資料の鉛同位体比（ａ式図）…… 169
第50図　資料の鉛同位体比（ｂ式図）…… 170
第51図　鞘木の走査電子顕微鏡写真…… 173
第52図　シリカ――アルカリ図…… 180
第53図　柄内部の茎…… 200
第54図　鏃部分の文様…… 201
第55図　保存処理工程…… 202
第56図　銘文配置図…… 205
第57図　星塚２号墳出土金銀象嵌亀甲繋双鳳
　　文円頭柄頭のＸ線写真…… 206
第58図　星塚２号墳出土金銀象嵌亀甲繋双鳳
　　文円頭柄頭の銀象嵌部のＸ線マ
　　イクロアナライザー分析…… 206
第59図　第10字「大」の試験的表出結果と
　　象嵌断面模式図…… 207
第60図-1　Ｘ線フィルムからおこした文字と
　　表出後の文字…… 208

第60図-2　X線フィルムからおこした文字と表出後の文字…… 209
第60図-3　X線フィルムからおこした文字と表出後の文字…… 210
第60図-4　X線フィルムからおこした文字と表出後の文字…… 211
第61図　第8字「素」の電子顕微鏡像とX線マイクロアナライザー分析による銀の分布…… 213
第62図　第3字「ア」のX線マイクロアナライザーによる分析結果 …… 215
第63図　第5字「令」のX線マイクロアナライザーによる分析結果…… 215
第64図　第8字「素」のX線マイクロアナライザーによる分析結果…… 216
第65図　円頭部分の亀甲紋のX線マイクロアナライザーによる分析結果…… 216
第66図　第3文字「ア」の銀および塩素のX線像…… 217
第67図　第5文字「令」の銀および塩素のX線像…… 218
第68図　象嵌表出後のX線写真…… 219
第69図　環頭大刀と円頭大刀X線透過写真…… 227

表　目　次

第1表　岡田山古墳群周辺の古墳一覧表……16
第2表　1号墳石室内出土遺物一覧表……44
第3表　岡田山1号墳出土丸玉計測値表……53
第4表　岡田山1号墳出土金環計測値表……53
第5表　岡田山1号墳出土馬鈴計測値表……58
第6表　須恵器観察表……62
第7表　円筒埴輪計測値一覧表……69
第8表　円筒埴輪観察表……70
第9表　珠圏文鈴出土遺跡一覧表…… 105
第10表　『出雲国風土記』にみえる郡司…… 120
第11表　「出雲国大税賑給歴名帳」にみえる出雲郡・神門郡の氏姓…… 122
第12表　「興福寺雑役免坪付帳」にみえる出雲庄…… 124
第13表　馬鈴・金環の螢光X線分析…… 133
第14表　金銅丸玉の螢光X線分析…… 133
第15表　放射化分析の結果…… 135
第16表　鉄器資料の明細…… 136
第17表　ＩＣＰ分析条件…… 137
第18表　分析線の波長…… 137
第19表　資料の化学組成…… 138
第20表　資料分析成分の平均値と標準偏差…… 139
第21表　島根県と奈良県の古墳出土鉄器の化学組成の比較…… 139
第22表　資料No.6及び日本刀の非金属介在物の化学組成…… 143
第23表　鉄滓，鉄器中の非金属介在物などの化学組成例…… 144
第24表　資料中に見出された非金属介在物…… 144
第25表　鉛同位体比測定結果…… 168
第26表　刀剣類の木製装具の用材…… 174
第27表　岩石の主成分化学組成…… 179
第28表　岡田山古墳出土品保存事業費…… 191
第29表　岡田山1号墳出土品保存事業の経過… 192
第30表　銘文表出前の各部分の重量…… 204
第31表　X線フィルム上の文字と表出後文字の比較…… 212
第32表　保存処理前の状態…… 221

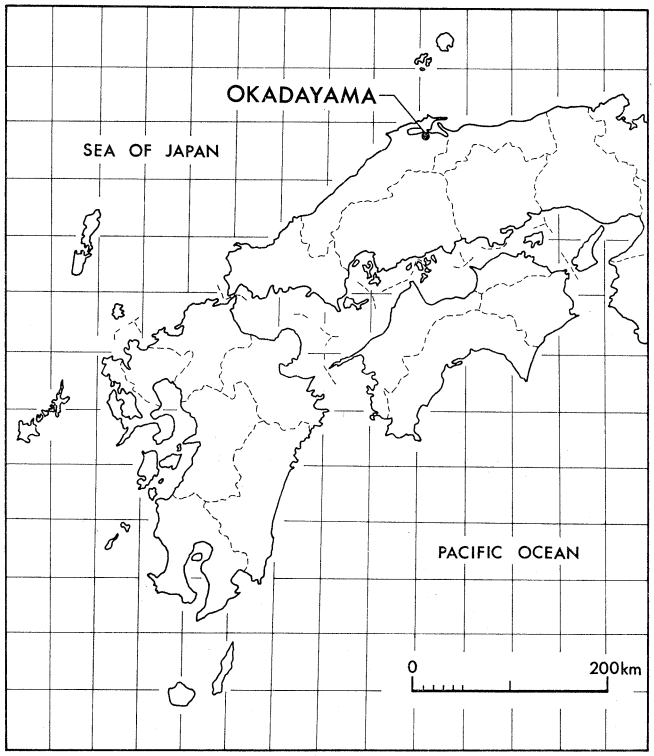
第Ⅰ部　岡田山古墳群の調査

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

第1節　遺 跡 の 位 置

1. 所　　在

岡田山古墳群は，島根県の東部，松江市の南郊に設置されている島根県立八雲立つ風土記の丘センター地内にあり，所在する地籍は松江市大草町字岡田 884-3 他である。資料館からは徒歩で100m 余りの場所にあり，八雲立つ風土記の丘の主要な史跡のひとつとして復元整備されている。現在は周囲の樹木に視野を遮られているが，低丘陵の先端になる古墳の営まれたその位置は扇形に広がる意宇平野の奥部にあたり，意宇平野全体はもとより東方遥かに伯耆富士といわれる大山を一望できる眺望のきく位置にある。



第１図　岡田山古墳群の位置

2. 地　　形

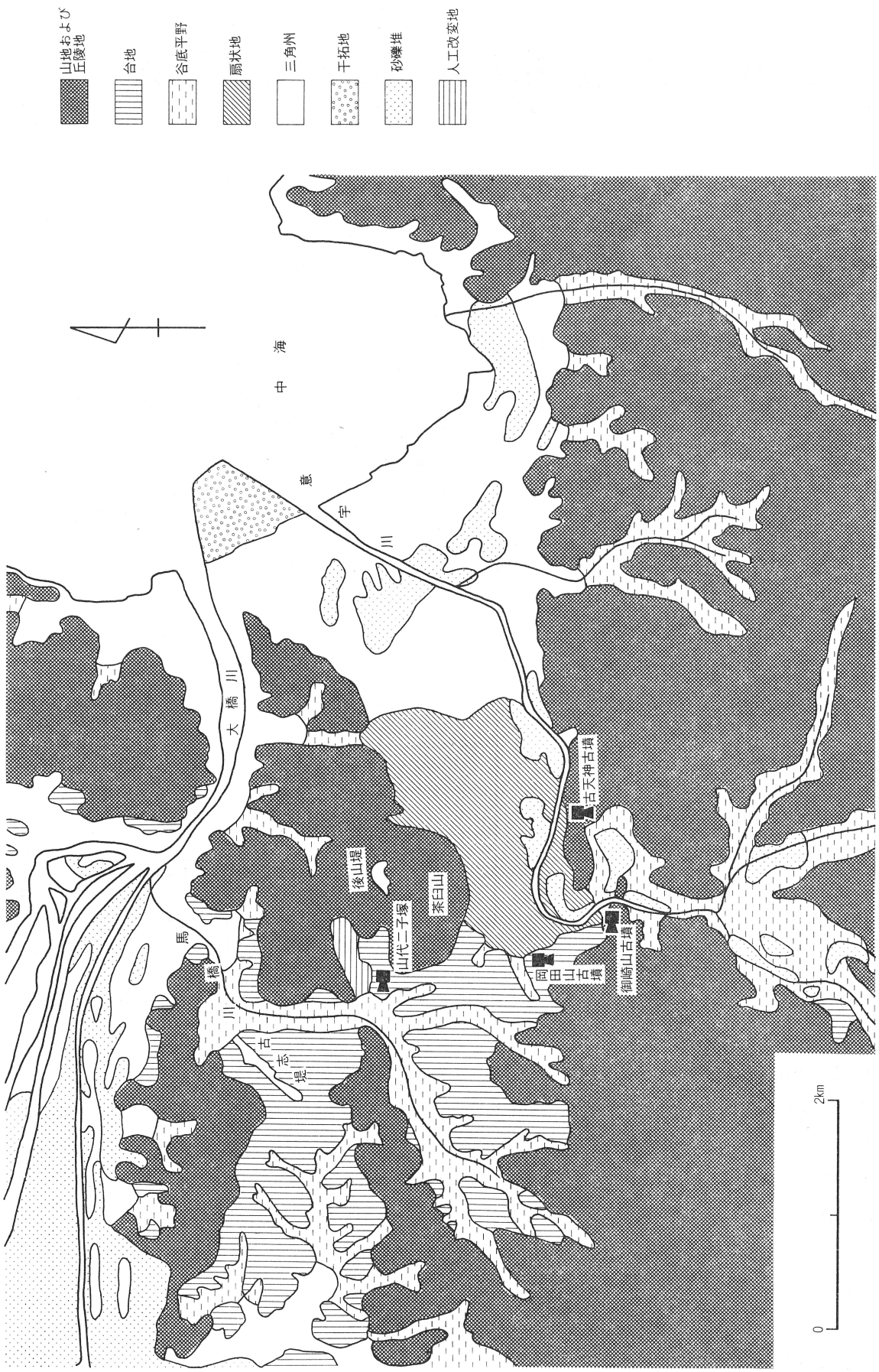
意宇平野は，東西約４km，南北 0.8～1.5km の平野で島根県内では有数の穀倉地である。この平野は，八雲村と広瀬町境の天狗山（標高 610m）を源にし，平野の南西から流れ込む意宇川の扇状地と三角洲によって形成されたもので，中海側に向かって大きく広がっている。この低地に拓かれた水田を囲むように，西・北・南の三方は小山地や丘陵がせまっている。

この周囲の小山地や丘陵は，中海と宍道湖に向かって階段状に低下する平坦面を形成している。

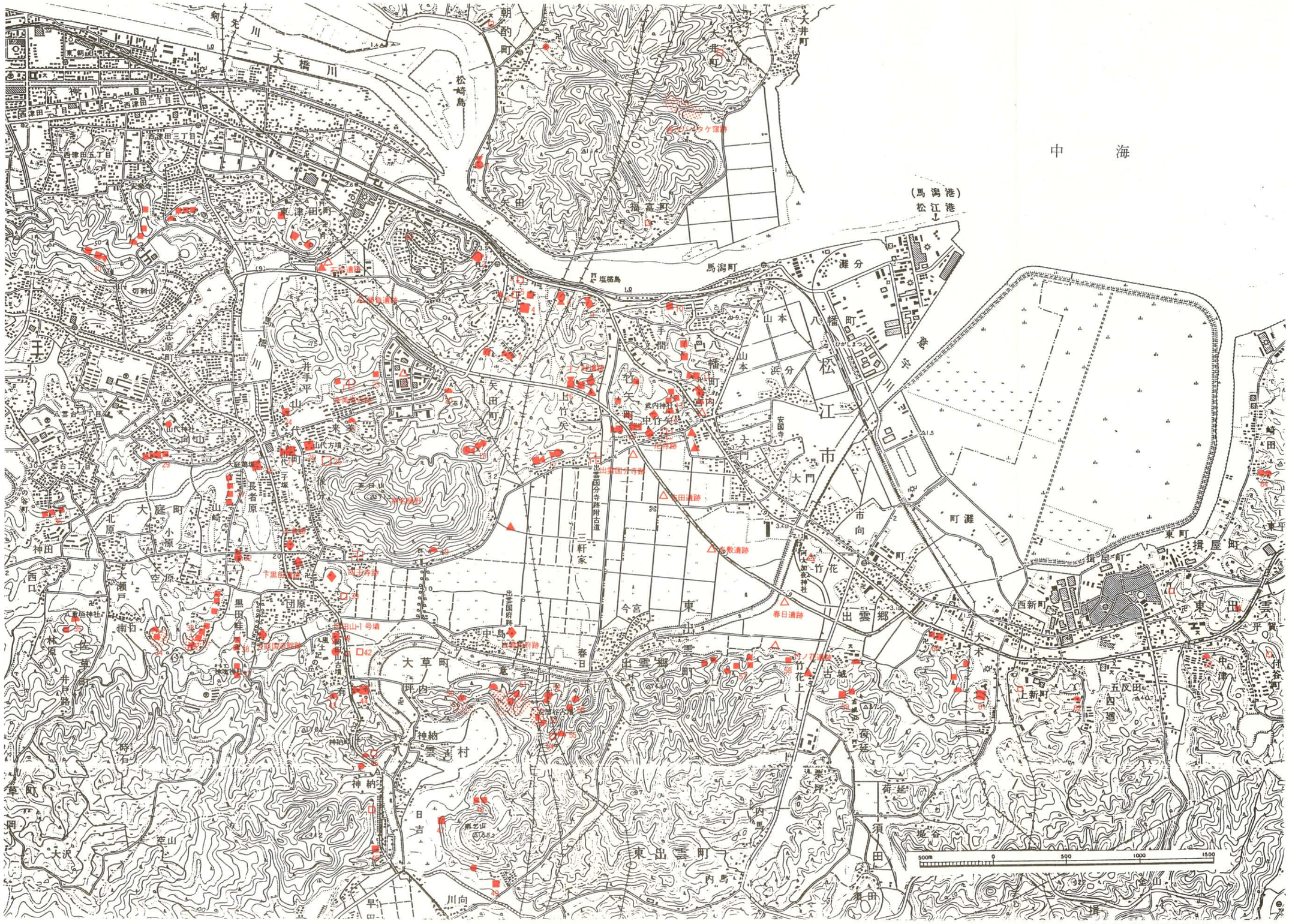
現在の集落は標高30mから数mの範囲内に集中して営まれている。意宇平野周辺の主な遺跡もこの面に営まれている。平野の西側は，八雲村の室山（約260m）をピークにそれから派生する丘陵が延びており，岡田山古墳群を含む島根県立八雲立つ風土記の丘資料館は30mから20mの丘陵面にのっている。この面は北側の茶臼山の山裾に広がる同レベルの丘陵面と一つの小谷をへだてているが，多数の遺跡が確認されている。

南側丘陵は標高およそ60mの低丘陵が連らなっており，この丘陵には横穴群や古墳群など遺跡の密集地帯となっている。

東側は中海につながるのであるが，近世以降の干拓で陸地が広がり，ほぼ現在の国道９号線沿いが旧渚線と考えられている。



第2図　岡田山古墳群周辺微地形分類図（『土地分類基本調査』松江1974より作成）



▲ 縄文　△ 弥生　● 円墳　■ 方墳　前方後方墳　前方後円墳　横穴　□ 墳形不明　◆ 奈良(官衙等)

第3図　岡田山古墳群周辺の遺跡分布図

平野内には意宇川の旧河道がある。最も古い河道は平野の北部を流れ，次いで平野中央部を流れ，最も新しい旧河道は南部を流れている。これらの旧河道にはさまれた微高地を利用して遺跡が営まれたことがわかっている〔成瀬1975〕。平野内ではこれまで大きな遺跡は知られていなかったが，国道9号線松江バイパス建設に伴う発掘調査で数々の遺跡が発見され，低地に営まれていた往時の生活の一端が明らかになりつつある。

（勝部　昭・平野芳英）

第2節　周辺の遺跡

岡田山古墳群周辺の遺跡について，縄文時代，弥生時代，古墳時代，奈良時代と順を追って主な遺跡の概略を記すこととする。

縄文時代

縄文時代遺跡は意宇平野の縁辺丘陵の丘麓付近に散在して分布する。

竹ノ花遺跡　意宇川の下流近くに注ぐ須田川の流域にあり，縄文早期・前期を中心とする遺跡で，出土土器から九州・山陽との交流がうかがえる遺跡である。才ノ峠遺跡の水田地帯から縄文土器数点が採集されているが，全体を知るにはいたらない。このほか，縄文遺跡は，才塚遺跡，旧竹矢小学校校庭遺跡，法華寺前遺跡などがある。しかし，意宇平野全体として縄文時代の生活内容を知るには資料が不足している〔山本・前島1975，足立1981〕。

弥生時代

弥生時代の遺跡は，国道9号線松江バイパス建設に伴う発掘調査で明らかにされた平野中のものがよく知られている。

中竹矢遺跡　出雲国分尼寺跡の南側丘麓の低湿地に位置し，192の土壙などが検出されている遺跡である。時期的には弥生時代前期後半から古墳時代前期までの遺構が含まれるが，弥生時代中期中葉と古墳時代前期の土壙が多い。土器は弥生時代中期中葉のものがほとんどを占めている。畿内V様式類似のもののほか，他地方との交流を考えさせる資料も含まれている。周辺に居住区域の遺構の存在が考えられる〔柳浦1983〕。

布田遺跡　中竹矢遺跡の南に位置する。平野北部と中央部を流れる旧河道に挟まれた古い三角洲上に営まれ，旧河道に沿って東西に長く広がる遺跡である。弥生前期末頃から営まれ，弥生時代以降も続く大規模な集落遺跡とみられる。遺構は弥生時代前期から中期にかけてのものと古墳時代中期，さらにそれ以降のものとに大別できる。弥生時代前期末頃のものには，土壙と溝状遺構がある。溝状遺構は，環濠状のものと推測されている。弥生時代中期中葉から後葉にかけての時期には，東西に溝が何本も走り，その間に土壙や住居跡状遺構が営まれる。この時期には管玉を製作していたことが明らかになっている。石器の出土も多く，打製石鎌，石包丁，大型石包丁などが含まれ，石器の組成が明らかになっている〔足立1983〕。

夫敷遺跡　布田遺跡の南方100mほどのところに広がる遺跡である。旧河道南側の微高地に沿って拓かれた水田遺跡である。プラント・オパール分析調査などに基づき，表土下第4層と第6層で水田跡を検出している。第4層の水田跡は，1区画の面積が22～39 m^2 程度のものである。畦畔の方向はほぼ東西・南北方向と一致している。第6層の水田跡は推定を含めて16枚検出されている。第4層の水田跡とは方向がいくらかずれている。1区画の面積は9 m^2，72m^2，94m^2 などである。第4層の水田跡は弥生後期前半頃，第6層のそれは

そう時期が隔たらない頃と考えられている〔広江1982〕。

その他，平野の東寄りに位置する竹矢町内から現存長26.5cmの細形銅剣が発見されており，その製品の質・形状から朝鮮半島製といわれる〔近藤1978〕。

以上のように，弥生時代の遺跡は平野中央部の微高地に弥生時代前期から継続して営まれて生成発展したことを明らかにしている。人々は意宇川の流れをうまく利用して生活を行なっていたと思われる。

古　墳　時　代

古墳時代になると遺跡はその数を増加し，出雲地方では顕著な古墳の分布地域を形成している。現在明らかになっている古墳は，意宇平野周辺の丘陵地に濃密に分布している。地区別にみていくと次のようである。

(1)　茶臼山の北西部，馬橋川流域沿いの地区

「山代・大庭古墳群」とグループの名称を与える考えも提起されている古墳のある地区を含んでいる〔渡辺1983・1985〕。

来美墳墓　茶臼山北麓の谷を隔てた丘陵上にあり，四隅突出型の墳丘墓である。

山代二子塚　低台地端の緩傾斜地に立地し，台地の低い側に前方部を向けている全長92m，後方部の一辺約55m，前方部端の幅約55m，後方部高さ6.5mの前方後方墳で，県内最大規模である。二段築成で空濠がある。未発掘のため内部主体等は不明である。採集資料として埴輪円筒片，須恵器などがあるが，この古墳の築造時期は中期とも6世紀後半頃とも考えられているが，後者が有力である。前方後方墳の名称をわが国で最初に付された古墳でもある〔山本1968・渡辺1983〕。

山代方墳　山代二子塚の東に隣接し山代二子塚ののる丘陵の根元部に築造されたもので，一辺約45m，高さは周溝底から6.8mある二段築成の方墳である。正方形の周溝と外堤土塁をもつ。内部主体は石棺式石室で，古くから開口しているために，出土品は不明であるが，墳丘から装飾付須恵器，埴輪片などが採集されている7世紀前葉頃の築造である。〔山本1968・岡崎1983・渡辺1985ほか〕。

大庭鶏塚　山代二子塚や山代方墳の築造されている丘陵の西にある丘陵の先端を切削加工して築造された一辺44×42m，高さ10m，二段築成の方墳である。南辺と西辺には幅約12～20m，奥行き8～12mの造出部があるのを特徴とする。内部主体は不明である。周溝がついている。6世紀前半頃の築造である〔山本1968〕。

永久宅後古墳　大庭鶏塚，山代二子塚や山代方墳よりやや東の高所に築かれている。石室は古くから開口しており，遺物の詳細は不明である。墳丘は半分消失しているが，主体部は丹念に作られた石棺式石室で奥室が残っている。規模は幅2.47m，奥行き2.24m，高さ1.96mある〔山本1968〕。

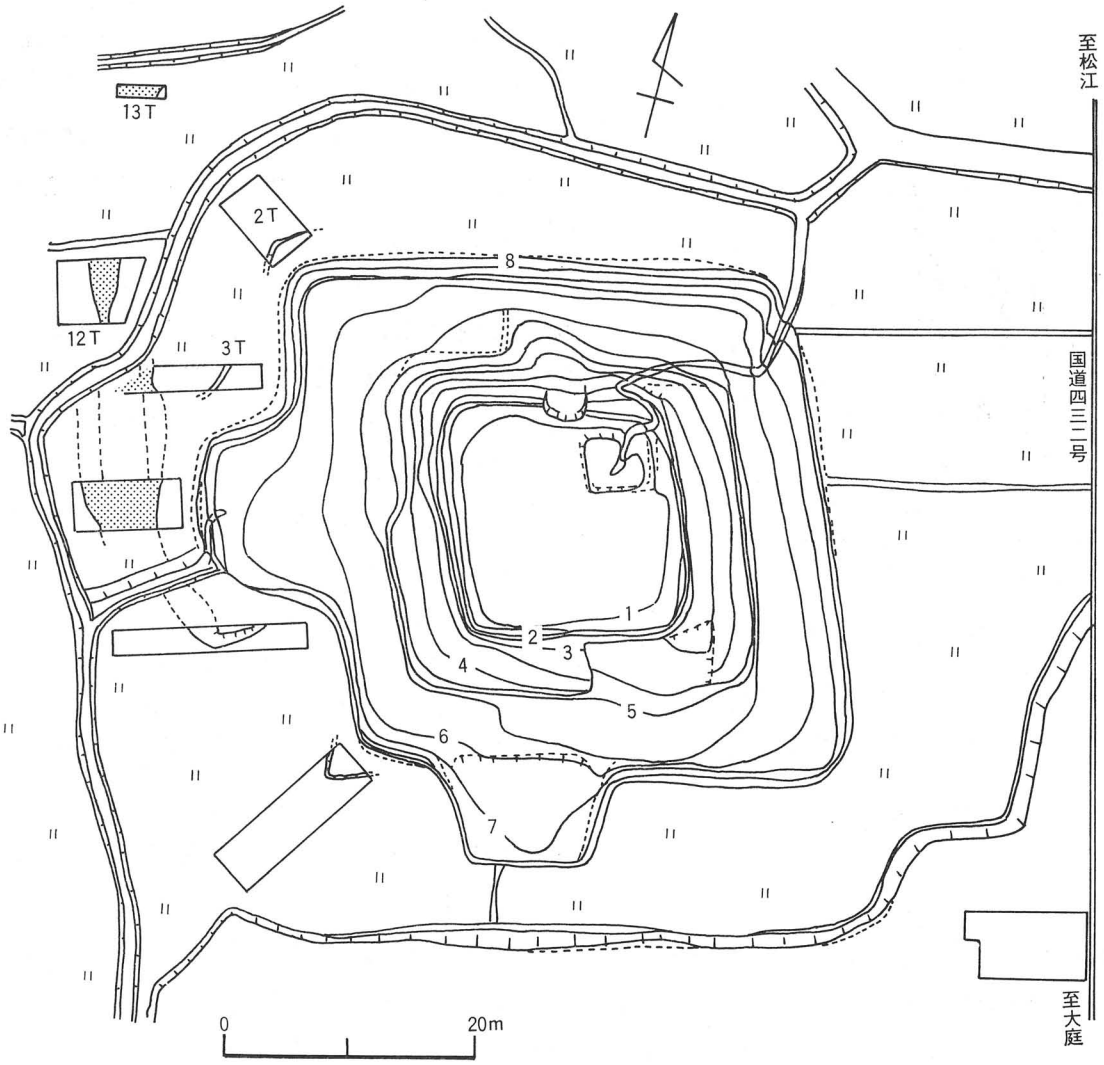
井出平山古墳群　山代二子塚や山代方墳などの北に位置する丘陵尾根の先端にあった古墳群で，その1つは直径約15mの円墳で，木棺直葬であった。須恵器出現時期の頃の土師器や須恵器が出土している〔山本1972〕。

向山西古墳群　馬橋川を挟んで，大庭鶏塚，山代二子塚や山代方墳などと向かい合う丘陵上に築造されていた古墳群である。方墳2基と前方後方墳1基から構成されており，いずれも主体部が失われていたため正確な時期決定はできないが，山陰須恵器編年のⅡ期頃の築造とされている〔門脇1978〕。

十王免横穴群　茶臼山の北東麓に位置する谷奥の南斜面に穿たれた横穴群で，37穴が確認されている。現在は27穴が保存されている。横穴の中には，弓矢を持った人物，船など壁画のあるもの，石室の中に石棺を内蔵するもの，複室構造のもの，積石施設を持つもの，玄室に須恵器破片を敷き詰めるものなど様々な形態の横穴がみられる。時期的には山陰須恵器編年のⅢ期からⅣ期の後半まで継続的に構築されたものと考えられる〔島

第４図　山代二子塚古墳実測図（渡辺1983より）　1：600

第５図　山代方墳実測図（渡辺1985より）　1：600



第６図　大庭鶏塚古墳実測図（岡崎1979より）　1：600

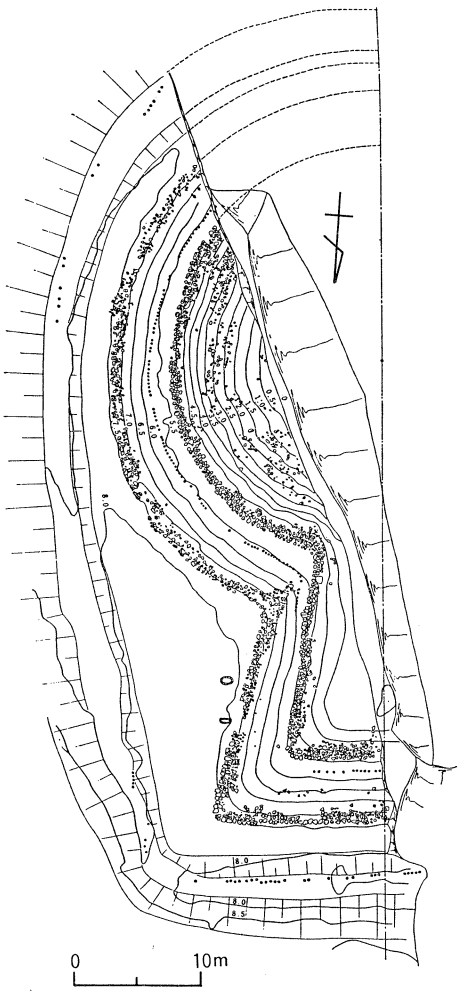
大考古研1968・岡崎1975〕。

狐谷横穴群　十王免横穴群の西約 400m の丘陵斜面にあった横穴群である。17穴が調査され未調査のものを含めると優に30穴は越える。この横穴群にも，壁画のあるもの，石棺を内蔵するものなどがあり，隣接の十王免横穴群と共に注目される。時期的には６世紀後半から８世紀後半まで継続的に構築されたものと考えられている〔横山1977〕。

⑵　茶臼山北東部，大橋川沿いの地区

井ノ奥１号墳　大橋川に大きく張り出す丘陵先端部近くにある方墳で，一辺35×40m，高さ 4.5mである。裾部には円筒埴輪がまわり，形象埴輪片も採集されている。中期の大型方墳である〔岡崎1976〕。

井ノ奥４号墳　１号墳の南，標高45mの丘陵尾根上に構築された前方後円墳である。墳丘の約半分は破壊消失していたが，全長約58m，後円部の直径約42.5m，前方部長さ15.5m，高さ7.5mある。墳丘は二段築成で，



第7図　井ノ奥4号墳実測図（岡崎1976より）

葺石があり，形象埴輪，円筒埴輪，朝顔形円筒埴輪などが多数出土している。主体部は失われているが，5世紀後半から6世紀前半の築造と考えられている〔岡崎1976〕。

平所遺跡　井ノ奥古墳群のある丘陵の南の一隅に所在する。標高20～30mの傾斜面にあり，住居跡，埴輪窯跡，玉作工房跡などが発見されている。6世紀初め頃とみられる埴輪窯跡からは，馬3，鹿1，家2，人物顔面3など写実に富む形象埴輪が大量に発見されている。これらと共通する表現の埴輪は県内では今のところみられない。玉作工房跡から発見された原材料は，水晶がほとんどを占め，碧玉やめのうを中心とする出雲の玉作の中にあっては特異な存在である〔前島ほか1977〕。

石屋古墳　井ノ奥古墳群と谷を挟んで西に位置する丘陵上にある。墳丘規模は一辺42×40m，高さ7.5mある。南西と北東辺には長方形の造出部を設け，二段築成の大型方墳である。北東辺の造出部からは人物，馬などの形象埴輪片など多数が発見されている〔岡崎1985〕。

魚見塚　石屋古墳とは大橋川を隔てた対岸の丘陵地にある。前方後円墳で全長約62mあり，整美な中期古墳的様相をもつ。墳丘から子持壺等の須恵器片が採集されている〔渡辺1982a〕。

手間古墳　井ノ奥古墳群と谷を挟んだ東の標高約25mの丘陵先端部に位置する。前方部が北北西を向き，前方部の発達した整った前方後円墳である。全長は約70mあり，県内でも有数の大型古墳である。未発掘のため内部主体などは不明で，埴輪片などが採集されている。中期古墳に属すると考えられている〔山本1968〕。

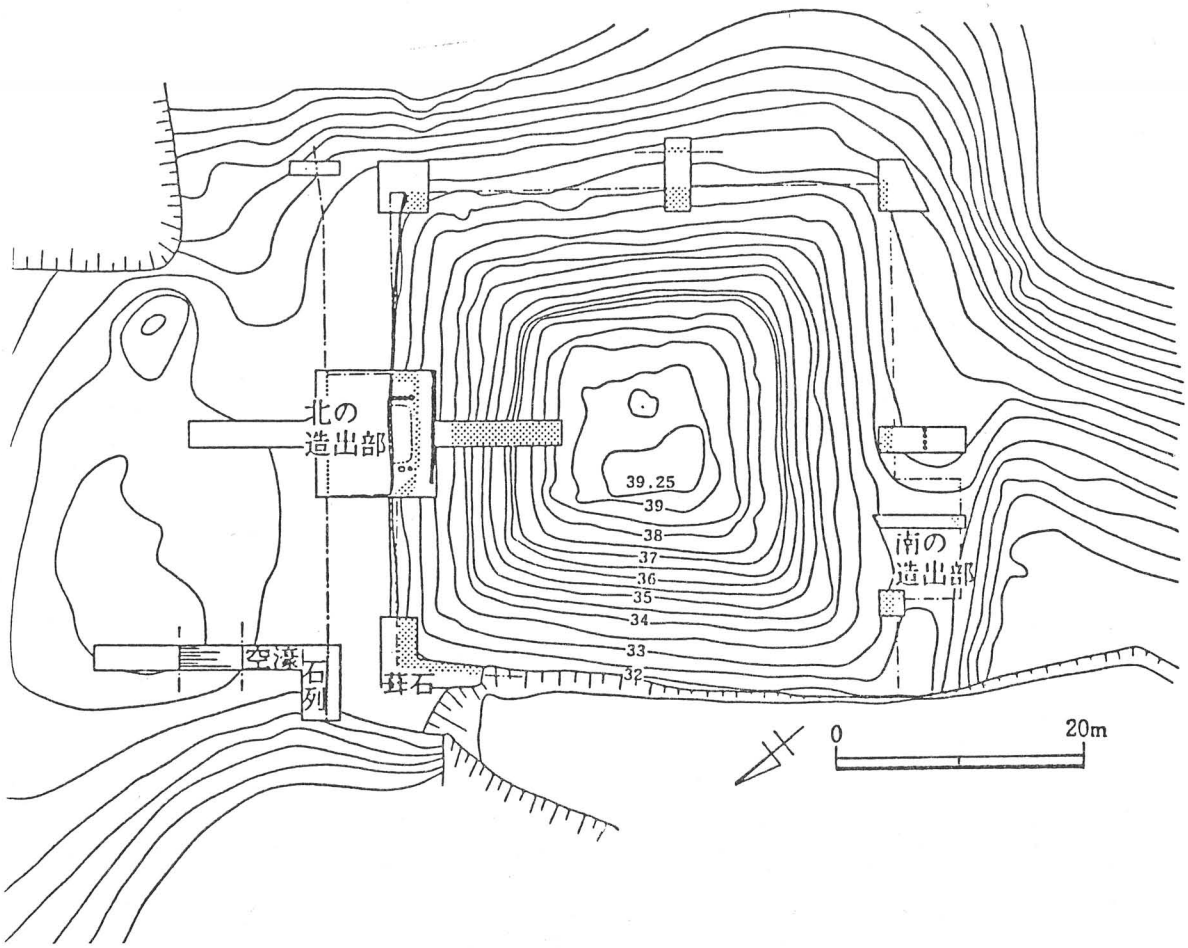
竹矢岩船古墳　手間古墳と谷を挟んだ東の標高約10mの丘陵先端に位置する前方後方墳である。北北西に前方部を向け，全長約47mある。後方部頂上に船形石棺があり，長辺に縄掛突起が3個ずつ設けられている。副葬品などは不明であるが，埴輪片が採集されており，中期古墳と考えられている〔山本1968〕。

才ノ峠古墳群　茶臼山から東北へ派生する多くの小丘のひとつ，西から東へ延びる標高約30mの丘陵上にある。方墳1基，前方後方墳1基などが調査されている〔松本1976〕。

(3)　意宇平野東北部の竹矢丘陵の地区

廻田古墳群　茶臼山の東，後山堤の東端丘陵上にある。前方後円墳1基，円墳8基からなる。前方後円墳は全長約52m，後円部の直径29～36m，前方部幅23m，後円部高さ4mほどある。円墳は径10～16m，高さ1～2m内外のものである。周溝を持つものもある。

中竹矢古墳群　茶臼山から東へ派生する丘陵は意宇平野と大橋川を結ぶ谷で途切れている。この谷の東，出雲国分寺跡の北東丘陵上にある。この丘陵上には，全長22mの中竹矢古墳（前方後方墳）や方墳2基などが存在する。国道9号線松江バイパス建設に伴う発掘調査で，新たに全長14mの前方後方形のマウンドを持つ横穴



第8図　石屋古墳実測図（岡崎1985より）　1：600

や礫床のある土壙墓，方形周溝墓の可能性のある土壙墓などが検出され，丘陵全体が奥津城とも考えられる様相を示している〔広江ほか1983〕。

この他，国道9号線の東側の丘陵上には，的場遺跡（土壙墓），的場横穴群，迎接寺古墳群（前方後方墳，方墳）などが知られる。

(4)　大庭から佐草にかけての丘陵地区

神魂神社から八重垣神社あたりにかけての丘陵から，馬橋川の方向に延びるいくつかの丘陵地には，神魂神社裏山古墳群，大石古墳群，大石横穴群，後谷・荒神谷古墳群，八重垣神社奥の鏡の池裏山古墳群，横穴群があり，分布密度は高い。

東淵寺古墳　大庭鶏塚の南方600mに所在する全長62mの前方後円墳である。墳丘上から埴輪円筒片が採集されている〔松本1982〕。

(5)　大庭町有の丘陵を中心にする地区

団原古墳　岡田山古墳の北方300mほどの丘陵上にある。石棺式石室を内部主体とする古墳で，現状では墳形は不明瞭である〔梅原1918〕。石室は現在愛知県の名古屋城内にある。

岩屋後古墳　岡田山丘陵の東麓の水田中にあるもので，石棺式石室を内部主体とする。墳丘は半分以上が消

第9図　御崎山古墳実測図（三宅・松本1982より）　1：600

第10図　古天神古墳実測図（松本1983より）　1：600

失しており，墳丘の詳細は不明である。諸手を上げる人物などの形象埴輪が出土している〔横山ほか1978〕。

御崎山古墳　意宇川が丘陵地から平野にでるあたりの丘陵先端に築造されている。全長40mで，横穴式石室には大小2基の横口式の家形石棺が納められている。出土遺物には，獅噛環頭大刀，珠文鏡，金銅鈴，馬具類，須恵器，埴輪円筒などが出土している。6世紀後半頃の築造である〔勝部1975・三宅，松本1982〕。

神納の丘陵地には中小古墳や横穴が分布する。

(6)　大草丘陵の地区

古天神古墳　意宇平野の南側東西に連なる大草丘陵から北東方向に派生する標高40～50mの支丘斜面に築造されている。全長27mの前方後方墳である。内部主体は石棺式石室で，変形五獣鏡，円頭大刀，馬具，須恵器などが出土している〔山本1968・松本1983〕。

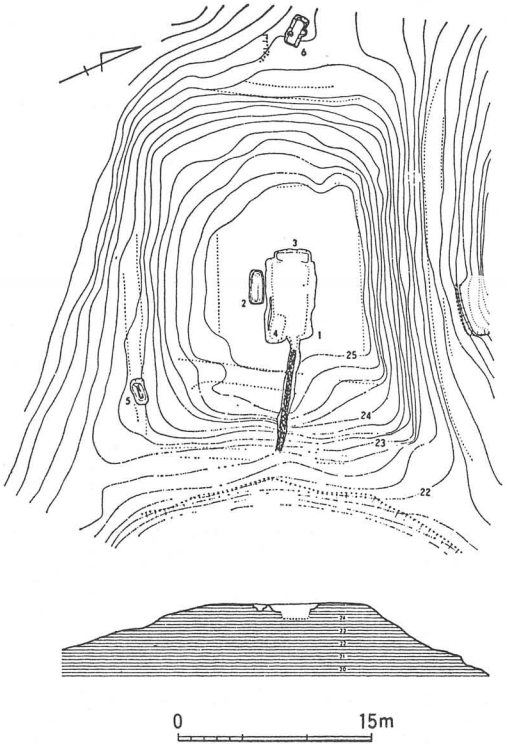
大草岩船古墳　古天神古墳のある丘陵の最頂部にあたる位置にある。凝灰岩の露頭を加工した船形石棺がある。墳丘の形は不明であるが，墳裾で埴輪円筒が認められている〔山本1975〕。

安部谷横穴群　標高88.6mを頂点とする丘陵の谷斜面の凝灰岩に穿たれた横穴である。3群10穴以上が知ら

れる。1群の5穴については，第5穴が未完成であるが，他はすべて整正家形のもので丹念に作られている。山陰須恵器編年のⅢ期からⅣ期頃の須恵器が出土している。これら横穴の営まれた丘陵の尾根には小型の墳丘を持つ安部谷古墳群がみられる。そして，南方の丘陵南斜面には湯谷横穴群がある〔山本1968〕。

東・西百塚山古墳群　大草丘陵の中程にあって小谷を境にして東西に分かれる古墳群である。東百塚山古墳群は方墳を中心とする64基以上が群集している。尾根を境にして古墳の規模や出土遺物に違いがみられ2つのグループが考えられる。5世紀後半から6世紀前半にかけての築造とされる。一方，西百塚山古墳群は42基以上からなり，東百塚山古墳群の西斜面のグループと共通する要素がみられる〔門脇1982〕。

西百塚山古墳群の西方の字才光寺などにも尾根上に古墳，斜面に横穴が分布している。一方，大草丘陵に続く東出雲町今宮の丘陵には姫津古墳群など方墳で構成される古墳が分布している。



第11図　寺床1号墳実測図（松本1983より）　1：600

(7)　意宇平野東端・東出雲の丘陵の地区

出雲地方でも古い様相を持つ古墳がいくつか知られている。「位至三公」銘の内行花文鏡を出土した古城山古墳，大木権現山古墳群，二神二獣鏡・大刀・勾玉を副葬し，礫床を内部構造とする寺床1号墳を含む寺床遺跡群などである。付近には小規模の古墳も散在する〔石井1978・松本ほか1983〕。

(8)　意宇川中流域の丘陵地区

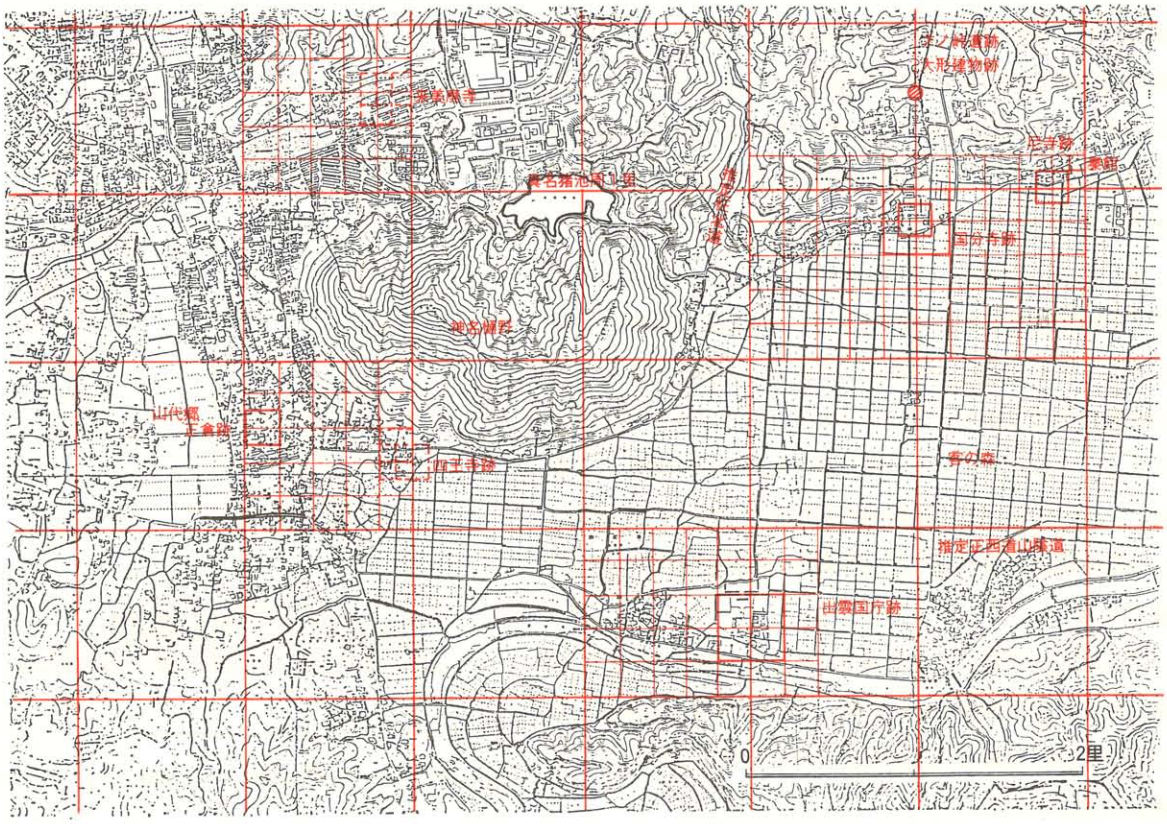
八雲村の意宇川と岩坂川が合流する付近の丘陵地には，増福寺古墳群，虺龍文鏡出土の小屋谷3号墳，石棺式石室を内部主体とする雨乞山古墳，勝負谷古墳など，中期から後期にかけての古墳が多く分布している。

こうした埋葬遺跡を営んだ人たちの集落跡についてはほとんど調査されていないが，平野部周辺の低丘陵などには住居跡の断面が露出している。また，平所遺跡，才ノ峠遺跡，布田遺跡，出雲国庁跡，黒田畦遺跡の各調査などで，古墳時代の住居跡を検出している。

奈　良　時　代

この地域は『出雲国風土記』にいう意宇郡大草郷，山代郷，出雲神戸の集落があり，出雲国を統括する出雲国庁が置かれていた出雲国の中心地域である。また，『出雲国風土記』によって，当時の官衙・寺社等の状況を推測することもできる地域でもある。

来美廃寺跡　茶臼山北麓の狐谷横穴群に相対する丘陵の南斜面に造営されていたものと考えられている。現在山林となっている斜面を2～3段に加工し，寺域を作っている。礎石を抜き取った跡などがあるものの，伽藍配置などは不明である。あたりには平瓦が散在している。この寺跡は『出雲国風土記』記載の日置君目烈が



第12図　意宇平野計画地割想定復原図

建立した新造院に比定されている。出土瓦は，風土記の丘地内の四王寺跡や安来市の教昊寺跡から出土したものと類似していることが注目される〔近藤1968〕。

出雲国分寺跡　茶臼山から派生するなだらかな丘陵と平野の変換点に造営されたもので，出雲国庁から北北東の方向，1250mにある。部分的に発掘調査された結果，この寺は南門，中門，金堂，講堂，僧坊が一直線に並び，中門からは回廊が講堂に取り付いていたとみられている。塔は南門と中門を結ぶ中軸線から東に45m離れている。南門から南へ三軒家まで幅20尺の石敷きの道が伸びている。寺域は明らかではないが，方500尺が考えられている。出土品の中に「西寺」と書かれた墨書土器があり，東に位置する尼寺との関係から西寺と呼ばれていたようである〔前島1975〕。

出雲国分尼寺　出雲国庁から北東の方向に1600m離れており，出雲国分寺の中軸線と尼寺の中軸線の距離は4町離れている。出雲国分尼寺跡は竹矢町中竹矢の集落の中にあり，背後には低丘陵，正面は意宇平野の水田が広がる。発掘調査は部分的に行なわれているが，礎石建物跡，築地状遺構などが検出されている。寺域は1町四方と考えられている。出雲国分寺，同尼寺，出雲国庁にはある時期同種の瓦が葺かれていたことが型破れ痕のある瓦から知られている。瓦窯跡は竹矢町中竹矢で発見されている。前記3つの公的建物に葺かれた瓦の量からすれば周辺には相当数の瓦窯跡があったと考えられる〔前島1975〕。

四王寺跡　茶臼山の南側山裾の見晴らしの良い高台にある。この寺跡は，『出雲国風土記』記載の出雲臣弟山が建立した新造院にあてられており，1984年に推定地の一部の発掘調査が行なわれた。調査では掘立柱建物跡，溝状遺構や地山加工段などが検出され，平瓦，丸瓦などが出土した。これまでの調査で，軒丸瓦は4種類，軒平瓦は5種類のものが使用されていたことが分かり，時期的にも8世紀の前半頃には建造されていたと

考えられ，『出雲国風土記』記載の新造院の可能性を色濃く示唆している〔松本1985〕。

山代郷正倉跡　茶臼山の南西裾台地上に所在している。発掘調査により真北方向に一直線に並ぶ3棟の3間×4間の総柱建物跡を検出している。またそのうちの2棟からは炭化米も大量に出土し，『出雲国風土記』の記述にある里程とほぼ合致することから山代郷中の正倉跡と理解されている〔松本・三宅1981〕。

下黒田遺跡　山代郷正倉跡とは道路を挟んだ南側にある。1986年の調査で，東西の大溝，南北小溝，陸橋，掘立柱建物などが検出された。大溝や，建物跡は真の東西・南北方向に沿い，柱跡の掘形も正倉跡に類似する。陸橋は他地方でも官・寺院跡などで検出されていることから，この遺跡は，山代郷正倉跡に関連するものと考えられている〔岡崎・昌子1986〕。

出雲国庁跡　周囲よりも1.5m程度高い海抜9.6mの微高地（自然堤防）上に位置する。この地は慶長年間の大草村検地帳に残る「こくてう」という字名を手がかりに1968～1970年に発掘調査されたものである。国庁跡全体が調査されたわけではなく，建物配置や広がりなどさらに当時の実体を把握する必要がある。現在は環境整備されて，奈良時代末期の国庁外郭の大溝や，政庁跡，後方官衙建物，小溝などを模式的に示している〔町田・近藤1975〕。

奈良時代の出雲国庁跡，出雲国分寺跡，新造院跡（来美廃寺，四王寺跡）山代郷正倉跡は五町一里を単位とする計画的な地割にそって配置された可能性を示唆している〔勝部1986〕。

奈良時代の遺跡については，今後『出雲国風土記』にのる集落跡，駅路，官衙関係遺跡をはじめ官窯などの生産遺跡等をも明らかにする必要がある。　（勝部　昭・平野芳英）

出雲国風土記（加藤義成著『校注出雲国風土記』による関係部分抄）

意宇郡

合はせて郷一十一。里三十三。餘戸一。驛家三。神戸三。里六。

大草郷。郡家の南西二里一百二十歩なり。須佐乎命の御子，青幡佐久佐丁壮命坐せり。故，大草と云ふ。

山代郷。郡家の西北三里一百二十歩なり。所造天下大神大穴持命の御子，山代日子命坐せり。故，山代と云ふ。即ち正倉あり。

黒田驛。郡家と同じ處なり。郡家の西北二里に黒田村あり。土體の色黒し。故，黒田と云ふ。舊，此處に是の驛あり。即ち號けて黒田驛と曰ふ。今は東，郡に属けり。今猶舊の黒田の號を追へるのみ。

出雲神戸。郡家の南西二里二十歩なり。伊弉奈枳の麻奈子に坐す熊野加武呂乃命と，五百津鉏鉏猶取らしに取らして所造天下大穴持命との二所の大神等に依さし奉る。故，神戸と云ふ。他の郡等の神戸も，且之の如し。

新造院一所。山代郷の中にあり。郡家の西北四里二百歩なり。厳堂を建立つ。僧なし。日置君日烈が造りし所なり。出雲神戸の日置君鹿麻呂が祖なり。

新造院一所。山代郷の中にあり。郡家の西北二里なり。厳堂を建立つ。住める僧，一軀有り。飯石郡の少領，出雲臣弟山が造りし所なり。

真名井社　伊布夜神社　佐久佐社　多加比社　山代社　阿太加夜社　末那為社　加和羅社

神名樋野。郡家の西北三里一百二十九歩なり。高さ八十丈，周り六里三十二歩あり。東に松あり，三方は並びに茅あり。……（略）

意宇川。源は郡家の正南一十八里なる熊野山より出でて北に流れ，東に折れ，流れて入海に入る。年魚・伊具比あり。

真名猪池。周り一里あり。北は入海なり。塩楯島。蓼螺子・水蓼あり。

道度

国の東の堺より，西に去くこと二十里一百八十歩にして，野城橋に至る。長さ三十丈七尺，廣さ二丈六尺あり。飯梨河なり。又西二十一里にして國廳，意宇郡家の北なる十字街に至り，即ち分かれて二つの道となる。一つは正西道，一つは枉北道なり。

第1表　岡田山古墳群周辺の古墳一覧表　　分布図（第3図）の番号と一致する

番号	古墳名	所在	墳形	規模 m	主体	出土遺物
1	魚見塚古墳	松江市朝酌町矢田	方円	62		須恵器，円筒埴輪
2	石屋古墳	松江市東津田町石屋他	方	42×40		形象埴輪，須恵器
3	荒神畑古墳	松江市矢田町井ノ奥				埴輪有孔円板
4	井ノ奥1号墳	松江市矢田町井ノ奥	方	33×29		埴輪
5	井ノ奥2号墳	松江市矢田町井ノ奥	方	13×15		土師器，鉄剣
6	井ノ奥3号墳	松江市矢田町井ノ奥	方か	10		
7	井ノ奥4号墳	松江市矢田町井ノ奥	方円	58		直刀,須恵器,埴輪
8	手間古墳	松江市竹矢町手間	方円	70		須恵器，埴輪
9	竹矢岩船古墳	松江市竹矢町手間	方方	50	船形石棺	
10	灘山古墳	松江市馬潟町	方			土師器
11	迎接寺古墳群	松江市八幡町寺ノ後	方円,方方,方	6基		
12	的場横穴群	松江市八幡町		3穴		須恵器，埴輪
13	武内神社裏山古墳群	松江市竹矢町	方3			
14	代宮家後横穴群	松江市八幡町宮内				須恵器
15	中竹矢古墳群	松江市中竹矢町中竹矢	方方など	3基以上		須恵器
16	才ノ峠古墳群	松江市竹矢町才ノ峠	方方など	2基		須恵器，鉄剣
17	上竹矢古墳群	松江市竹矢町上竹矢	方円など			
18	廻田古墳群	松江市竹矢町間内	方円，円			土師器
19	真名井横穴群	松江市竹矢町間内		1穴以上		須恵器
20	十王免横穴群	松江市矢田町十王免		37穴		須恵器,大刀,玉,鏃
21	狐谷横穴群	松江市矢田町狐谷		17穴以上	四注式妻入	須恵器
22	来美墳墓	松江市矢田町来美	四隅突出			
23	来美1号墳	松江市矢田町来美	方			
24	井出平山古墳群	松江市山代町井出平	方，円	14・10	木棺直葬	須恵器，円筒埴輪
25	永久宅後古墳	松江市山代町二子塚			石棺式石室	
26	山代方墳	松江市山代町二子塚	方	45×45	石棺式石室	須恵器，円筒埴輪
27	山代二子塚古墳	松江市山代町二子塚	方方	92		須恵器，円筒埴輪
28	大庭鶏塚古墳	松江市大庭町茶臼	方	44×42		須恵器，円筒埴輪
29	向山西古墳群	松江市大庭町向山	方2，方方1		木棺直葬	須恵器，円筒埴輪
30	室藤古墳群	松江市西津田町室藤	方方1，方1			
31	下ノ原古墳群	松江市大庭町下ノ原	方	4基		
32	東淵寺古墳	松江市大庭町東淵寺	方円	62		須恵器，円筒埴輪
33	大石古墳群	松江市大庭町大石	方	8基		
			横穴	1穴開口		
34	後谷・荒神谷古墳群	松江市佐草町後谷	方	20基以上		須恵器
35	鏡池裏山古墳群	松江市佐草町後谷	方	3基		須恵器
36	神田古墳群	松江市大庭町神田	方	10～8		
37	神魂神社裏古墳群	松江市大庭町宮山	方			
38	正林寺裏山古墳群	松江市大庭町宮内	方			
39	団原古墳	松江市山代町団原			石棺式石室	
40	岡田山1号墳	松江市大草町有	方方	24	横穴式石室	大刀，馬具，銅鏡
41	岡田山2号墳	松江市大草町有	円	44		
42	岩屋後古墳	松江市大草町有	不明		石棺式石室	形象・円筒埴輪

43	小谷横穴	松江市大草町小谷			四注式平入	
44	御崎山古墳	松江市大草町御崎	方方	40	横穴式石室	大刀，馬具，銅鏡
45	神納古墳群	八束郡八雲村日吉神納		4基以上		
46	勝負谷古墳群	八束郡八雲村日吉勝負谷	方	3基以上		
47	小屋谷古墳	八束郡八雲村日吉	方			鏡，土師器
48	大谷古墳群	八束郡八雲村日吉	方	2基		
49	雨乞山古墳	八束郡八雲村東岩坂	方		石棺式石室	須恵器
50	才光寺横穴群	松江市大草町才光寺		2穴以上		須恵器
51	西百塚山古墳群	松江市大草町安部谷	方，円	40基以上		須恵器
52	古天神古墳	松江市大草町杉谷	方方	27	石棺式石室	大刀，銅鏡，須恵器
53	東百塚山古墳群	松江市大草町杉谷	方，円	60基以上		
54	大草岩船古墳	松江市大草町岩船			船形石棺	円筒埴輪
55	湯谷横穴群	八束郡東出雲町春日湯谷		3穴以上		須恵器
56	安部谷横穴群	松江市大草町安部谷		3群10基以上		須恵器
57	姫津古墳群	八束郡東出雲町今宮	方			
58	馬越古墳	八束郡東出雲町今宮				
59	古城山古墳	八束郡東出雲町出雲郷	方	20×20	割竹形木棺	銅鏡，土師器
60	大木権現山古墳群	八束郡東出雲町出雲郷	方	5基	木棺，箱式石棺	土師器，家形埴輪
61	寺床1号墳	八束郡東出雲町揖屋	方	28×22	礫床	鉄剣，勾玉，銅鏡
62	小廻横穴	八束郡東出雲町揖屋				
63	五反田横穴	八束郡東出雲町揖屋				
64	崎田古墳群	八束郡東出雲町揖屋	円			

参考文献

著者名	発行年	論文名	書名	発行者
足立克己	1981	「出雲の前期縄文土器」	『えとのす』16号	新日本教育図書
足立克己	1983	「才ノ峠遺跡」	『9号線バイパス発掘報告』Ⅳ	島根県教委
足立克己	1983	「布田遺跡」	『9号線バイパス発掘報告』Ⅳ	島根県教委
石井　悠	1978	「東出雲町の遺跡調査」	『東出雲町誌』	東出雲町
石井　悠	1979		『大木権現山古墳群』	東出雲町教委
梅原末治	1918	「出雲に於ける特殊古墳」	『考古学雑誌』9-3	日本考古学会
内田律雄	1981	「出雲国風土記所載の正倉について」	『えとのす』16号	新日本教育図書
内田律雄	1983	「才ノ峠遺跡」	『9号線バイパス発掘報告』Ⅳ	島根県教委
岡崎雄二郎	1975	「十王免横穴群」	『風土記の丘周辺の文化財』	島根県教委
岡崎雄二郎	1976	「松江市井ノ奥第4号墳の調査」	『考古学ジャーナル』 120	ニューサイエンス社
岡崎雄二郎	1979		『史跡大庭鶏塚発掘調査報告』	松江市教委
岡崎雄二郎	1982	「井ノ奥古墳群」	『島根県大百科事典』	山陰中央新報社
岡崎雄二郎	1983	「松江・山代方墳採集の須恵器について」	『松江考古』第5号	松江考古学談話会
岡崎雄二郎	1985		『史跡石屋古墳』	松江市教委
岡崎雄二郎 昌子寛光	1986	「下黒田遺跡」	『図説発掘が語る日本史』別巻	新人物往来社
小田富士雄	1986	「島根県の九州系初期横穴式石室再考」	『山陰考古学の諸問題』	山本清先生喜寿記念論集刊行会
勝部　昭	1975	「御崎山古墳」	『風土記の丘周辺の文化財』	島根県教委
勝部　昭	1986	「出雲国庁周辺の計画地割私考」	『風土記論叢』第2号	出雲国風土記研究会
門脇俊彦	1975	「岡田山古墳群」	『風土記の丘周辺の文化財』	島根県教委
門脇俊彦	1978	「向山西古墳群調査概報」	『松江考古』創刊号	松江考古学談話会
門脇俊彦	1982	「百塚山古墳群」	『島根県大百科事典』	山陰中央新報社
近藤　正	1968	「来美廃寺跡」	『県文化財調査報告書』第5集	島根県教委
近藤　正	1978	「島根県下の青銅器について」	『山陰古代文化の研究』	近藤正遺稿集刊行会

山本義人 佐古和枝	1983	「岡田山1号墳の横穴式石室とその内部施設について」	『松江考古』第5号	松江考古学談話会
島大考古学研究会	1968	「十王免横穴群発掘調査報告」	『菅田考古』第10号	島大考古学研究会
成瀬敏郎	1975	「意宇平野―その形成について―」	『風土記の丘周辺の文化財』	島根県教委
曳野律夫	1986	「古墳時代後・終末期の墳丘基壇について」	『山陰考古学の諸問題』	山本清先生喜寿記念論集刊行会
広江耕史	1983	「夫敷遺跡」	『9号線バイパス発掘報告』Ⅳ	島根県教委
広江・内田・宮沢	1983	「中竹矢遺跡」	『9号線バイパス発掘報告』Ⅳ	島根県教委
前島己基	1975	「出雲国分寺跡」	『風土記の丘周辺の文化財』	島根県教委
前島己基	1975	「出雲国分尼寺」	『風土記の丘周辺の文化財』	島根県教委
前島己基 松本岩雄	1977	「平所遺跡」	『9号線バイパス発掘報告』Ⅱ	島根県教委
町田章 近藤正	1975	「古代官衙跡」	『風土記の丘周辺の文化財』	島根県教委
松本岩雄	1976	「才ノ峠古墳群」	『9号線バイパス発掘報告』Ⅰ	島根県教委
松本岩雄	1982	「東淵寺古墳」	『島根県大百科事典』	山陰中央新報社
松本岩雄ほか	1983		『寺床遺跡調査概報』	東出雲町教委
松本岩雄	1983	「寺床1号墳関連資料一覧」	『松江考古』第5号	松江考古学談話会
松本岩雄	1983	「付載・古天神古墳測量調査」	『風土記の丘地内調査報告』Ⅱ	島根県教委
松本岩雄	1985	「島根県松江市山代町所在・四王寺跡」	『風土記の丘地内調査報告』Ⅳ	島根県教委
松本岩雄	1986	「墳丘出土の大形土器」	『山陰考古学の諸問題』	山本清先生喜寿記念論集刊行会
三宅博士	1977	「夫敷遺跡」	『9号線バイパス発掘報告』Ⅱ	島根県教委
三宅博士 松本岩雄	1981		『史跡出雲国山代郷正倉跡』	島根県教委
三宅博士 松本岩雄	1982	「付載・御崎山古墳測量調査」	『風土記の丘地内調査報告』Ⅰ	島根県教委
三宅博士	1984	「『出雲国風土記』記載の「意宇杜」の再検討」	『島根考古学会誌』第1集	島根考古学会
宮本徳昭	1985	「八束郡八雲村出土の舶載鏡雑感」	『島根考古学会誌』第2集	島根考古学会
柳浦俊一	1983	「中竹矢遺跡」	『9号線バイパス発掘報告』Ⅳ	島根県教委
山本清	1968	「古墳」	『県文化財調査報告書』第5集	島根県教委
山本清	1972	「松江・井出平山古墳群」	『県埋文調査報告書』Ⅳ	島根県教委
横山純夫	1977	「狐谷横穴群」	『県埋文調査報告書』Ⅶ	島根県教委
横山・卜部・平野	1978		『岩屋後古墳発掘調査概報』	島根県教委
渡辺貞幸	1982	「魚見塚」	『島根県大百科事典』	山陰中央新報社
渡辺貞幸	1983	「松江市山代二子塚をめぐる諸問題」	『山陰文化研究紀要』23	島根大学
渡辺貞幸	1985	「松江市山代方墳の諸問題」	『山陰地域研究』1	島根大学
渡辺貞幸	1986	「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」	『山陰考古学の諸問題』	山本清先生喜寿記念論集刊行会

第２章　調査と遺跡保護の経過

第１節　研　究　略　史

岡田山古墳の発見は，実に大正４年（1915年）にさかのぼる。この節では，発見以後，昭和45・46年の調査をはさんで，現在にいたるまでの岡田山古墳に係わる調査報告，研究論考等について要約してみたい。その際，注目される考察，見解などを中心に取り上げることにする。

岡田山古墳は，大正４年４月12日に発見された。当時の新聞が，ドラマチックにその経緯を伝えている。

新聞記事を要約すると，現松江市大草町有（当時八束郡大庭村大字大草字有）の伊藤萬之助氏が夢告をもとに，同氏所有の松林で石棺を掘り当て，その内部及び周囲より副葬品多数を発見したというものである。この古墳は現在の岡田山１号墳である。なお，２号墳については，この時点では確認されていない。

山陰新聞　大正四年四月十五日

○松林の中から古墳

―掘つてくれとの夢は正夢

八束郡大庭村大字大庭字坪の内伊藤萬之助の所有林なる仝人居宅より北へ一丁程離れたる松林にて古墳発見せられたり。萬之助は近年に至り精神衰弱となり居れるが或夜熟眠中何者か枕元に立ちお前の持つて居る松林に古墳があるから掘つて呉れ必ず疑ふ事勿れと告げゆつと姿を消したといふので仝人は夢覚めて不思議がる事一しかりしがそれでも之を眞に受けて松林の中に鍬を入れようといふ念なく其儘打過ぎて居ると其後仝じ夢を見る事毎度なるより之は愈よ不思議だ、物は試めし一番掘て見ようと去十一日鍬を揮いて件の松林中に入り此處か彼處かと首を捻りつゝ序に恭謝しをする程の親切があるならば所在を知らして呉れてもよかりさうなものだアこれが枕辺に立つた白髪頭は成る程已れよりは年を取つて居るので其處までは氣が付かなかつたらうと半信半疑で呟きながら其處此處と鍬を打込み數尺掘下ゆし處にてカチリ鍬先きに當るものありさてこそ人骨でも瓦石でもなからうと手に唾し腕に力をかけて掘り下ぐると長さ五尺、横一尺四方の石棺を發見せるより驚きと喜びの色を漲らしつゝ早速石棺の蓋三尺余のものを取除きて見ると大小の刀劍二本目を射るばかりにきらづきて横はるを發見し更に其邊一間餘を掘り立てしに又もや酒壺と思はしきもの鈴二個轡二個、槍凡數百個鏡一面、花輪の如き飾物一個、直徑五六分位の玉廿個を發見したり尚金物類には総て金箔様あり萬之助も意外の事に打ち驚きつゝ夢は正しく正夢であつた今の世に不思議の事もあるものだと直に此旨を駐在所へ届出でたれば警官出張一應取調べたる後松江署へ報告し松江署よりは吉木警部以下昨日出張調査せり尚委しき事は斯道に通ずる者の手によりて調査するとならん

1.　梅原末治「出雲国八束郡岡田山古墳調査報告」（国史講習会刊『中央史壇第7巻第5・6号合冊（通巻第44・45号）』1923年11月1日）

この調査は，岡田山1号墳発見後2年4か月を経過した大正6年8月におこなわれたもので，岡田山古墳について最初の調査である。2号墳については「南方にある大なる円墳」として注意されている。文末の附記によると，筆者この地旅行のおり調査したもので，副葬品については不十分であり，他日の補訂を期したいと述べている。（この報告の全文は巻末に掲載する。）

内容の構成は，標題はないが，一で位置と墳丘，二で石室，三で石棺，四で遺物の総括と配置状況，五で遺物の解説と結語となっている。

(1)　墳丘について

①　**墳形**　この古墳は，丘陵上部に築かれた「瓢形墳」（前方後円墳）と判断しているが，前方部丸味を帯び，後方部の境は一段と低くなり，瓢を半分伏せたような形で，整美なものではないとしている。なお葺石，埴輪については予想されているが，この時点では発見されていない。

②　**法量**　法量については，歩測で，全長約36歩（1歩約2尺6寸）＝約28.4m，後円部径22歩＝17.3m，目測で，前方部高さ約10尺＝約3m，後円部高さ約14尺＝約4.2mと計測しているが，墳丘の崩壊等による範囲不分明のことを勘案するとほぼ妥当な数値と言うことができる。

(2)　石室について

石室については，羨道部が閉塞されており，玄室についてのみ観察がおこなわれている。床面の礫についての記述はなく，図をみても土砂が入っているようであるが，ごくわずかで室内の観察は十分できる状態であったことがわかる。

①　**石室の平面構成**　平面形については，奥行が長く，前方が狭くなっていることに注意して，装飾古墳である久留米市浦山古墳の横穴式石室と近似していることを指摘している。

また，玄室床面が，立石で東，中，西に3区分されているという見方が示されている。奥の「東区」には石棺がおかれているが，次の「中区」については，「透道部」にあたるとしている「西区」との界に「両壁より挺出せし二石の間に一石を置き」（東区との界の石棺の西端両側の立石のことは，石棺についての記述の中で説明されている），その上に蓋石を置いており，あたかも石棺の前室の観があるとし，横穴式石室の一種ではあるが異趣のものであると述べられている。

②　**石室の築造技法**　立面構成についても注意がなされており，側壁の石積みについては，最下部の石材は大石を用いているが，それより上方は割石を持ち送りに小口積みし，四隅上方では斜めに石材をわたして三角持ち送りにしていること（「一種のボールドを作れる」と表現している），天井が高く，総高7尺（2.12m）に近いことなどをあげ，この石室は立面構成においては精巧の部類に入るとしている。

(3)　石棺について

①　**石棺の形式**　棺身の西端の側石が取りはずされ，附近に放置されていて，あたかも横口式のような形状を示すと述べている。

型式については，身の両側の側石の内側に切り込みをつくり，前後石をはめ込む式の組合せ式家形石棺であるとしている。

②　**石棺の使用法**　棺身の法量が，内法幅わずかに1尺1寸（33cm），長さ4尺（1.21m）未満の小形のものであることに注意している。後の遺物についての記述の中で，火葬骨もしくは洗骨でなかったら，その大きさからして成人の遺骸は収納し得ないとしながら，遺物に武具，馬具等の豊富なことから被葬者は成年男子であ

るとするのが穏当であるとし，火葬骨あるいは洗骨を納めたとは考えられないことから，この解釈について，一つの可能性のある推論として，次のような場合を示している。即ち，この古墳は当初小児のために造営されたが，後事情があって熟年男子を葬ることになったものであるとする。その証拠として，中区（「中室」とも）に大刀，鏡があり，棺内部から中区にかけて玉（金銅空玉）が出土していることをあげ，成人の遺骸が棺内から中区にまで及んでいたとすれば，この遺物の配置は理に合うとしている。ただこのような推論をするにあたっては，棺身西端が本来横口として開いていたかどうか確かめられないことから，このような見方は一つの想像であると断わっている。

(4)　遺物について

発見された遺物は，すべて発掘者伊藤氏の許にあったと記されていて，その配置状況についても実地について伊藤氏の説明を受けている。その種類，数量について，筆者の区分に従って装身具，武具，馬具，土器に分類して示すと，表のとおりである。

装身具	(1)　金銅製丸玉	18　個	馬具	(11)　銅鈴	3　個
	(2)　金環	2　個		(12)　雲珠	4種6個
	(3)　内行花紋鏡	1　面		(13)　鞍金具残玦	1　具分
武具	(4)　環頭拵大刀	1　口		(14)　轡鏡板	1　個
	(5)　円頭拵大刀	1　口		(15)　各種金具残玦	若　干
	(6)　圭頭拵大刀	1　口	土器	(16)　陶質提瓶	2　個
	(7)　直刀（完形ノモノ）	1　口		(17)　陶質高杯	1　個
	(8)　刀子（完形ノモノ）	1　口		(18)　陶質横甕残玦	1　個
	(9)　小刀残玦	数口分		(19)　陶質蓋付壺	1　個
	(10)　鉄鏃	一　括		(20)　陶質瑯	1　個

以上20種であるが，このうち筆者が注意すべきものとして解説を加えたもののうちいくつかを取り上げてみる。

①　**鏡**　長冝子孫内行花紋鏡で，舶載鏡であるが，錫分の含有が高いと推測している。

②　**大刀**　4口のうち3口は柄頭から環頭，円頭，圭頭に分類でき，いずれも拵が遺存するのは珍しいと記されていることから，いずれもほぼ完存していたことが考えられる。

このうち環頭大刀（三葉環頭大刀）は，全長2尺5寸（75.8cm）とあり，現在とほとんどかわらない。

円頭大刀は，3尺余（91cm以上）とあり，現在柄頭と鞘尻金具が失われているものである。柄頭は長さ1寸8分（5.4cm）で金銅製，腕貫緒孔の周囲は花文で飾られており，鞘尻金具も金銅製で長さ約2寸（約6cm）とある。

圭頭大刀とされているのが，象嵌銘が発見された円頭大刀である。柄頭長2寸6分（7.9cm），柄部長7寸5分(22.7cm)とあり，現長とほぼ一致する。刀身は現在中途から失われているが，刀身長1尺9寸(57.6cm)とあり，これによると全長80cm以上であったことがわかる。当時すでに刀身は破損し，鞘尻金具も失われていたことがわかる。

他の1口は，古く失われたもので現存しない。当時すでに4片に破損していたが，接合して全長2尺2寸（66.7cm）で，拵に特徴はないと記されており，他の3口に比して小ぶりで，おそらく特別な柄頭金具を付

けない簡略な外装のものであったと思われる。

③ **馬具**　馬具類では，鞍金具のなかの鉄地金銅張の磯金具に注意している。本古墳の出土品では，後輪の磯金具だけに鞍(しおで)がつけられているが，国内の古墳から出土する鞍では，前，後輪共に鞍があるのが普通であるとし，滋賀県鴨稲荷山古墳の出土品と共に異例のもので，朝鮮半島方面との関連が考えられるとしている。

この報告の価値は，何といっても発掘2年後の未だ出土遺物が散逸あるいは破損しない時点で，かつ発掘者の記憶が正確なうちにおこなわれた調査の報告，もちろん最初の調査報告であるという点である。現在のわれわれが岡田山古墳について調べる時，この報告に期待すること大なるものがある。短時間の調査であったと思われるが，要を得た図によって，発掘後間もない時期の石室の実態を知ることができる。

なお，文末附記の中で，筆者は遺物の調査が不十分で，他日再査の機会を持ちたいと述べているが，大正14年1月に浜田耕作氏，島田貞彦氏，写真部員鈴木増太郎氏等と共に訪れ，再度調査している。

2.　野津左馬之助「八束郡大庭村大字大草岡田山古墳」(『島根県史第4巻』1924年4月)

筆者は，島根県史第4巻の中で，「島根県内の著しき古墳」において，墳形により円墳系，方基円墳系，前方後円墳系，前方後方墳系，方墳系，墳穴系，自然地形利用古墳の7種に分類しているが，岡田山古墳（1号墳）は前方後円墳として紹介している。

内容の構成は，文は段節に区分されていないが，はじめ墳丘，内部構造に簡単にふれたあと遺物について紹介している。

(1)　墳丘，石室について

1号墳は「瓢型式」であるとし，南側の2号墳「南塚」に対し「北塚」と称し，「南北連塚なり」としている。

1号墳は，2号墳に比して小形であることもあり，前方部は「形式的」な存在で，後円部の土取場と思われるほどであると述べている。

また石室については，大正4年の発掘の際開けられた穴から土砂が流入し，内部は計測も困難な状態であって，石室の構造についての詳細な記述はなされていない。石棺についての記述はない。

(2)　遺物について

「発掘品全部」について記されているが，それをまとめれば表のとおりである。

1	提壺	2個	9	鉄製鏃	数多あれど腐蝕して別ち難し
2	高杯　腰に三角形の透彫あり	1個	10	鉄製環	2個
3	瑾	同	11	鈴	2個
4	埦破片（以上祝部土器）	2個	12	雲珠	大形1個 小形3個
5	壺	1個	13	耳環	2個
6	壺残玦（以上渦紋土器）	同	14	円球	19個
7	紐鏡	1個	15	轡	1個
8	直劒	4振	16	鞍具	大小5個

① **鏡**　「紐鏡」については，「四鳥文字鏡」で，鳥の間に「王子祝寿」の4字を配置していると説明されているが，鳥というのは鈕座の四葉文が発達していわゆる蝙蝠形を示すのに対するものと考えられ，その間の銘文は梅原報告でも示されている通り「長宜子孫」である。

② **大刀**　「其一」は，環頭大刀で「花弁式環頭」，鞘は金銅製と記されており，「其二」は，原寸法不明だが現長95cmで柄頭の紐孔（腕貫紐孔）に「小形蓮花紋の鳩目」があるということから，現在柄頭金具を失っている円頭大刀であることがわかる。「其三」は，全長約82cmで，「鞘銀線巻なり」とあり，これが象嵌銘を有する円頭大刀である。

③ **土器他**　土器で，埦破片2個は，梅原報告と照合したとき，壺の蓋と思われる。また雲珠は大形1個，小形3個とあるが，辻金具も含めて扱われていると考えられる。

3. 岩佐文子「岡田山古墳」（島根考古学会刊『島根考古学第1号』1947年）

「島根考古学」は，戦後間もなく結成された島根考古学会の機関紙で，1号はガリ版刷である。岡田山古墳（1号墳）は，他の古墳とともに，略測図等を附して，簡潔に紹介されている。

内容は，a）位置，b）墳丘，c）石室，d）出土品の順で記述されている。

(1)　墳丘について

この時点では，高さ約3.5m，長さ約27mの前方後円墳とされており，葺石，埴輪については墳丘上草木密生のため調査されていない。

(2)　石室について

① **石室**　石室内には，土砂が流入し「羨道の構造を覗うには困難であるが石室の構造は実測し得る」とあり，石室の略測図が示されているが，これによると片袖型の横穴式石室として認識されていたことがわかる。

② **石棺**　石棺については，蓋だけが露れており，身の「破片と思われる切込のある石片が石室内に散乱」していると記されているが，これは前掲梅原報告にある，取りはずされて放置されていた棺身西端の側石であろうか。石棺の型式については，切妻式で当地方に類例を見ないものであることを注意している。

(3)　出土品について

当時六所神社に保管されていた出土品と県史記載のそれが一致しないことに注意したうえ，大刀のうちの環頭大刀，円頭大刀及び鏡について実物と照合したときの県史の説明の不備を指摘している。環頭大刀については，鞘が金銅製とあるのはあやまりであり，また花弁式とある柄頭は三葉環式に属することを指摘している。鏡について，鈕座の四葉文を四鳥とみた「四鳥文字鏡」の名称は不審であるとしている。

4. 池田満雄「出雲地方における古代文化の展開」（河出書房刊『日本考古学の諸問題』1964年6月）

縄文時代から律令時代にいたる出雲地方の特徴ある文化の展開の様相を論述したものであり，内容は，一．古代文化の形成，二．古墳文化の展開，三．律令体制と地方文化，となっている。

「二．古墳文化の展開」の中で，墳形についてみた場合，出雲では前方後円墳の数より前方後方墳が多いことが注目されるとし，各期の前方後方墳があげられているが，後期の例として岡田山1号墳も取り上げられ，「主軸長27m，周庭帯を加えると約50m，片袖型横穴式石室に家形石棺を置く」と紹介されている。

① **内行花文鏡**　遺物の中で，後漢代に比定される長宜子孫内行花文鏡については，長く伝世された珍しい例として注意している。

② **被葬者の位置付け**　岡田山1号墳や山代二子塚古墳等顕著な古墳の密集する意宇川下流域は，律令時代出雲国庁，意宇郡家の設置された地域で，出雲国造の根拠地であったことを明らかにし，このような中・後期様相の古墳の分布する出雲中部の松江周辺地域と，荒島造山古墳群や大成古墳など前期の古墳の集中する出雲東部安来地域を対比してみた時，そこにはヘゲモニーの移動が想定されるとする。5世紀以降意宇川流域には，

大きな政治的勢力が成長し，出雲のかなり広い範囲をその支配下におさめるようになったと考え，この勢力と後に出雲臣として登場する豪族層との関係を推定している。岡田山1号墳などの被葬者を，律令時代の出雲最大の雄族出雲氏の系譜の中に位置付けたことが注目される。

5.　山本清「岡田山古墳」（島根県教育委員会刊『島根県文化財調査報告書第4集』1968年3月20日）

本書は，松江市南郊の意宇平野周辺の古墳についての調査報告であり，岡田山古墳については㈠所在，㈡経歴，㈢位置と環境，㈣岡田山1号墳（1.墳丘，2.内部構造，3.遺物，4.小結），㈤岡田山2号墳，の順で記述されている。ここでは，1号墳を中心に取り上げてみる。

「㈣岡田山1号墳」で

(1)　墳丘について

前方部上面が「まんじゅう形」で，明瞭な平面がなく，前方部自身が一つの古墳に似た形を示していることに注意して，前方後方墳としては便化したものと判断している。また前方部前面の幅22m，長さ15mの前方に開く台状の平地については，意義は不明ながら明らかに意図的に加工したもので，古墳の「前庭」にあたるものであると述べている。

(2)　内部構造について

家形石棺を置く片袖形横穴式石室であることは確認されているが，実測図をみると土砂が流入していて，石棺の蓋だけが露れており，詳細な観察は不可能な状態であったと思われる。

築造方法については，下部はかなり大形の石を用いているが，これより上は小形になり，上部ほど小形化すること，積み方は小口積みで，中途以上はかなり強い持ち送りがみられ，天井に近い隅角では石材を2壁面に斜めに架け，天井面は楕円形に近い形になっていることなどに注意し，近似の例として松江市薄井原古墳の石室をあげ，九州方面との関連を指摘している。

(3)　遺物について

かつての筆者実見のものを含め，表の通りの遺物があげられている。

①		長宜子孫内行花文鏡	1		㈤	鞍金具（磯金具）	1個体分
②		大刀			㈥	雲珠	2
	㈠	環頭大刀	1		㈦	辻金具	4
	㈡	円頭大刀	1		㈧	鉄環	2
	㈢	圭頭大刀	1		㈨	鈴	7
③		刀子	3	⑦		須恵器	
④		金銅丸玉	16		㈠	壺	1
⑤		鍍銀環	2		㈡	瑯	1
⑥		馬具			㈢	高杯	1
	㈠	鏡板	一対		㈣	提瓶	1

このうち，⑦の㈥，㈦は現存せず，㈦は島根県史では2個となっているものである。

①　**長宜子孫内行花文鏡**　小形ながら重厚な整った品で，後漢代の舶載鏡とみられるが，後期古墳の出土例としては珍例で，伝世鏡の特殊な場合として注目に価するとしている。

② **大刀**　この時点では，3振になっている。円頭大刀は，柄頭と身の一部（鞘尻部分）を失って，現長約73cmとある。圭頭大刀は，身の中ば以上を欠失している。柄頭は圭頭といっても実は円頭に近い形態のものであると記されており，これが象嵌銘のある円頭大刀である。

③ **須恵器**　⑦の㈠，㈡は，昭和22～23年ごろまでは現存していたとあり，㈠高杯については実測図が示されているが，京都大学写真（図版47-1）や島根県史写真（図版45-1）にみえるものとは異る。須恵器の年代については，当地方の須恵器第Ⅲ期の典型的なもので，この古墳が，松江市薄井原古墳，古天神古墳，安部谷第一横穴群などとほぼ同じく，後期型古墳盛行期に属するものであることを明らかにしている。

6.　門脇俊彦「岡田山古墳群」（島根県教育委員会刊『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975年3月31日）

島根県立八雲立つ風土記の丘の設置に伴い，島根県では岡田山古墳群の整備をおこなうことになり，実態を把握するための調査がおこなわれたことは，前に述べたところである。

この調査は，昭和45年6月～7月と45年12月～46年3月の2回にわたっておこなわれたが，いずれも筆者が担当したものであり，この報告はその内容をもとにしたものである。この調査の詳しい内容については第Ⅰ部第3章・第4章で述べられる。

この調査は，岡田山古墳群についてのはじめての本格的調査であり，これまで不分明であったことがらが明らかになり，実態がより詳細に把握されることになった。

内容は，㈠位置と環境，㈡経歴，㈢岡田山1号墳の概要（1.墳丘，2.内部構造，3.遺物）㈣その他の古墳（1.二号墳，2.三号墳，3.四号墳，4.五号墳，5.六号墳，6.七号墳），㈤結語の順で記述されている。

(1)　墳丘について

「㈢岡田山1号墳の概要」の「1.墳丘」で

① **墳丘の法量**　従来全長約27mとされていたが，全長約24m，後方部幅約14m，前方部幅約14m，前方部前面のテラス状部分（「造り出し部」ともいっている）は長さ約23m，幅28～29m，高さ約1.6mであることが明らかになった。

② **墳丘の構造**　前方にテラス状部分を持つ長方形の地山部分の上に2段築成の前方後方墳をのせた形の3段築成で，中段が最も整った前方後方形を示し，その斜面（高さ約1m）には，葺石があり，その外側には円筒埴輪を配置することが判明した。（上段は前方部，後方部別々の土盛りで，あたかも2基の方墳が並存するような形態を示す。）

また前方部の下には，古墳（5号墳）がほぼ原形のままで埋められていることがわかった。

③ **墳丘の築造手順**　次のような順序で築成されたと考えている。

1)　テラス状部分と墳丘下段部の整形

大部分は自然地形を利用し，盛土によって形を整える。周辺部の盛土は黒褐色土を用いる。

2)　横穴式石室の築造

石室の掘り方は，下段上面から設ける。下段表面上より上に出る天井石などの部分については，粘土で入念な目詰めをする。

3)　墳丘中段及び上段の構築

後方部全域に黄褐色土を盛土する⟶黒褐色土を盛土する⟶暗黄褐色土を盛土する⟶前方部に薄く黄褐色土を敷く。

4)　仕上げ

墳丘上面全体に暗褐色土を覆う（化粧土）。

④ **古墳の築造**　墳丘断面からみて，当初南北に長い長方形であった後方部を，築造の終りの段階になって，南側を約2.5m削って正方形につくりかえ，その削り取った土を前方部に盛り上げたため，今日みる2方墳が並存するような高い前方部ができあがったと推測する。

⑤ **円筒埴輪，子持壺**　円筒埴輪と子持壺の存在は，この調査ではじめて明らかになった。

円筒埴輪は，後方部周囲の下段上面端の数か所に2本ずつ配置されていたと思われるが，後方部の後側裾中央部にはかなり多数置かれ，また両側のくびれ部にはそれぞれ6～7本づつ集中的に置かれていたと推定する。前方部の周囲にも置かれていたと思われるが，破片の量からしてきわめて少量であったと推測している。

後方部後側裾では，円筒埴輪に混じって子持壺も並べられていたと推定している。

⑥ **前方部前面のテラス状部分**　前方部裾中央地点で，かまどの上に土師器甕が載ったものがつぶれた状態で出土し，周辺から灰が検出された。このことからテラス状部分が埋葬儀礼にかかわる祭場として用いられた可能性が考えられるとしている。

(2)　内部構造について

① **石室の法量**　「2.内部構造」で全長5.6m，玄室は，長さ2.8m，奥部幅1.8m，前部幅1.3m，高さ2.2m，羨道は，長さ2.4m，奥部幅1.1m，高さ1.4mの計測値が示されている。

② **壁面の石の積み方**　野石あるいは割石の小口積みで，中途以上で強い持ち送り手法がみられることはこれまでも指摘されていたところであるが，石の積み方については，石室内面に厚い方をみせ，裏側には薄い方を置き，奥の方でこの上に別の石を2個以上にかかるように横にのせており，壁の内部で表面から見えない石が壁石と直交する形で積み上げられていて，壁石を固定していると説明している。

③ **家形石棺**　前掲の梅原報文では，全形が図示されているが，その後，埋没していたものである。棺身は小形で，内側で長さ1.15m，幅0.35m，深さ0.4m，前後左右の側石及び床とも各1枚の切石で，床石の周囲，側石の下端に刳り込みがあって，相互にかみ合せながら組み立てる精巧な構造のものであることを明らかにしている。蓋石は，長さ1.4m，幅0.65mであり，切妻の屋根形で，左右と前後に計8個の突起があることはこれまでも指摘されていた。

なお，床石は玄室のベースにくい込んでいて，上面は，玄室床面とほぼ同レベルであることを注意している。

④ **箱式石棺**　梅原報文では中室として扱われたものであるが，その後玄室内に流入した土砂で埋没して観察できなかった。

本報告では，家形石棺の前に，石室主軸と直交するように設けられた「箱式棺」としている。その構造については，長辺で奥側の側石の1枚は家形石棺の前側の側石をそのまま利用し，その前後（家形石棺の左右）に1枚ずつの石を立て，前側の側石は4枚の板状の野石を用い，短辺は玄室の側壁を代用したものであり，また蓋石は4枚の野石を用い，床には特別の施設は設けられていないと説明している。またこの箱式棺と家形石棺との関係は不明であるとしている。なお，蓋石は現実には3枚しか存在しない。法量は，内側で長さ約1.8m，幅約0.6m，深さ0.6mと計測している。

(3)　遺物について

「㈢遺物」で説明されているようにこの度の調査で，玄室最奥部の両隅に約20×40cm，深さ約30cmのポケット状の穴があって，その南側の穴から腐蝕した鉄鏃片が多数出土している。（大正4年の発掘の際の出土品については，島根県文化財調査報告書第4集の山本報文をそのまま掲載している。）

(4)　その他の古墳について

「㈣その他の古墳」で

① **2号墳**　2号墳については，これまで明らかになっているとおり，径約43m，高さ約6.5mの円墳で，県下で現在2位の規模をもつ古墳であるが，未調査で詳細は不明である。

本報告では，墳丘下方は地山の加工壇の可能性があり，また中腹で葺石，円筒埴輪の存在が確められ，1号墳と共通した様相をもつ古墳であると考えている。

② **3号墳～7号墳**　3号墳～7号墳の大部分は，今度の調査ではじめて実態が確認されたものである。

3号墳は，テラス部の南側に設けられた全長2.8mの箱式石棺を主体にもつもので，副葬品はない。墳丘については，不明である。

4号墳は，テラス部南西隅につくられた全長2mの箱式石棺を主体とするものであるが，テラス部造成に際し破壊されたと思われ，墳丘については不明である。

5号墳は，前述したとおり1号墳前方部の下方に埋没している古墳で，一辺12mの方墳と考えられ，木棺直葬で，大刀1口が副葬されていた。

6号墳は，1号墳後方部北東隅につくられた一辺約10mの方墳で，墳丘斜面には葺石があり，木棺直葬と考えられる。

7号墳は，岡田山丘陵の北西隅に設けられたもので，一時箱式石棺が露出していて確認されたものであるが，詳細は不明である。

したがって，岡田山古墳群は，1・2号墳を中心とする大小7基の古墳からなる古墳群であることが明らかになった。

(5)　築造時期について

出土した須恵器がⅢ期のものであり，ほぼ6世紀後半にあたるとしている。

なお，勝部昭氏は，出土した鈴（馬鈴）が奈良県高市郡明日香村の飛鳥寺出土のものと類似していることを注意し，飛鳥寺創建の時期をもとに，岡田山1号墳築造の時期をほぼ6世紀末～7世紀初頭におく考えを示している。[1]

註(1)　勝部　昭「御崎山古墳」（『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』所収）

7.　川原和人「島根県・岡田山1号墳の横穴式石室の構造について」（九州古文化研究会刊『古文化談叢第7集』1980年4月25日）

本論考は，横穴式石室が後期古墳の主要な主体として用いられていることから，後期古墳を知る上で重要な施設であるとし，岡田山1号墳の横穴式石室について，昭和45年度の調査で明らかになった内容をもとに，構造，石積み技法，築造工程などについて論じたものである。

内容構成は，Ⅰ.はじめに，Ⅱ.岡田山1号墳の概要（(1)位置と環境，(2)墳丘，(3)出土遺物，(4)横穴式石室），Ⅲ.石室の築造方法について，Ⅳ.まとめ，となっている。

(1)　横穴式石室について

「Ⅱ.岡田山1号墳の概要」の，「(4)横穴式石室」で

① **両袖型とみることについて**　この石室は，これまで片袖型に属するものとして扱われてきた[1]が，左右の側壁にしっかりした柱石があり，また羨道部の境で段をなしていることから，両袖型に属するものとしてさしつかえないとしている。

② **家形石棺両側の埋葬施設**　家形石棺と玄室側壁の間には，両側とも前後に扁平な石が横に置かれ（前の方の石は箱式石棺の構造の側石），一つの空間が形づくられているが，これは埋葬施設に用いられた可能性が強

いとしている。

(2)　石室の築造方法について

「Ⅲ.石室の築造方法について」の中で，石室の築造技法について次のような点を確認している。

1)　横穴式石室に伴なう掘り方の上端は，ほぼ羨道部側壁上端とレベルが一致する。

2)　奥壁と側壁のコーナーには左右共3ヶ所力石が存在し，その力石から側壁面にそれぞれ横目地線が派生しているが，玄室部の天井部下10～20cmを通る横目地線及び羨道部の天井部下約30cmに通る横目地線は左右壁ともほぼ同一レベルに存在する。

3)　側壁の横目地がよく通っている部分は石室の横断面の線の変換部分と一致する。

4)　羨道部上の天井石の上に存在する壁は，3段の石積みからなっているが，上下2か所に力石が存在する。

5)　右側の柱石の前方で，羨道部上端に存在する石は，羨道部の天井石の重みを羨道部の側壁に分散している。

6)　玄室部の前方柱石と接する部分は一部小さな石を用い，重箱積みになっている。

上記のような観察から，石室築造の工程が推定できるとし，次のような順序を考えている。

1)　旧地表面に土を盛り，前方後方形墳形を整え，基礎の墳丘を築造する。

2)　後方部のほぼ中央から主軸に直交して土壙を掘る。

3)　横穴式石室の平面プランを形成する。

4)　柱石の高さまで，玄室と羨道部の壁面を持ち送り技法で積み上げる（第Ⅰ横目地線が形成される）。

5)　羨門から羨道部にかけての側壁の上端を扁平な石によって高さをそろえる。

6)　羨門から前方に3枚の天井石をのせる。

7)　玄室の壁を持ち送り式に約70cm積み上げる（第Ⅱ横目地線が形成される）。

8)　この高さまで墳丘に盛土する。

9)　扁平な石，小さな石をもって壁の高さをそろえる。

10)　玄室の天井石3枚をのせ，石のすきまに粘土で目詰めを行う。

11)　露呈していた天井石を土で覆い，その上に盛土し墳丘を築造する。

註(1)　門脇報文（『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』所収「岡田山古墳群」）では，次のように述べている。「石室の構造はいわゆる片袖形式に属してはいるが，玄門部は左右ともに細長い石を柱状に立てて造り，玄室と羨道のあいだには仕切り石を置いて両者を区別している。」

8.　土生田純之「横穴式石室にみる古代出雲の一側面」（関西大学刊『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論集』1983年3月31日）

筆者は，これまで出雲の，特に後期古墳と北部九州のそれが密接な関係を有することを説いているが，ここではこのことについて具体例をもとに詳しく述べると共に，その歴史的意義についても触れている。

論考の構成は，はじめに，一．意宇の初期横穴式石室（1.意宇における初期横穴式石室，2.意宇における初期横穴式石室の源流），二．杵築の横穴式石室（1.杵築の古墳，2.杵築の横穴式石室，3.壁面構成からみた石室の形式分類と変遷，4.杵築における横穴式石室の系譜），三．横穴式石室にみる古代出雲の一側面，となっている。

(1)　石室の構成と築造時期

「一．意宇の初期横穴式石室」の「1.意宇における初期横穴式石室」の中で，岡田山1号墳については位置，

墳丘，内部構造等について述べている。その中で

① **家形石棺と奥壁との間の区画について**　家形石棺後端の位置で，左右側壁との間に仕切石を置いて設けられた石室奥壁との間の区画については，屍床ないし遺物副葬施設として利用されたものと推定している。

② **家形石棺等の設置と石室築造工程**　家形石棺の底石（床石）の上面が，玄室に敷かれた川石の上面とほぼ等しいことはこれまでの調査で指摘されているが，このことは家形石棺などが玄室床面形成前に所定の位置に安置されたことを示すものと考えられるとし，また石棺が玄室奥壁に近接して置かれていること，狭い石室内に多数の石材が整然と配置されていることから，床面の形成は壁面築成のごく早い段階におこなわれたと推定している。

⑵　1号墳の石室の系統について

「2.意宇における初期横穴式石室の源流」で，岡田山1号墳の石室の特徴を検討し，その源流について，次のように論考している。

① **家形石棺とその前方に設けられた箱式棺等について**　出雲では横口式家形石棺が多いが，そのほとんどが平入式であるのに対して，岡田山1号墳の家形石棺は小口に開口した妻入式であること，この石棺は石室構築前に玄室所定位置に安置されたものであること，石棺前方に箱式棺がありまた奥壁側にも仕切石があるが，いずれも石室構築前に設けられたものであることなどを特徴として指摘している。

これらのことについて，妻入横口式家形石棺を石室構築前に安置した例としては，福岡県石人山古墳，浦山古墳，佐賀県西隈古墳があり，家形石棺の前方に接続して箱式棺を置くことに関連する例としては熊本県船山古墳があり，仕切石については出雲，伯耆にその例が多いが伯耆の場合中・北部九州に源流を求めることができるとしている。

なお，本古墳の家形石棺の西側小口の開口部については，前掲梅原報文の指摘にもあるとおり，側石がとりのぞかれた状態のものであり，左右側石及び床石にも刳り込みがあることから，本来ここには側石がはめ込まれていたと考えられ，口をもたない組合せ式の石棺であったと推定されるが，ただ玄室内に設置された後西側小口の側石をとり去った形で使用されたことも可能性としては考えられるとしている。

② **石室の築造技法**　壁体は，基底部に大形の石を用いて腰石としていること，隅角の上部では南壁にまたがるように石材をわたし，天井みあげ面が丸くなっていることを注意している。

天井みあげ面を丸くする手法は，島根県内ではほかに松江市薄井原古墳，御崎山古墳があり，鳥取県では倉吉市大宮古墳の石室にも認められるが，いずれも山本清氏の編年による古墳時代須恵器Ⅲ期に属し，近接した時期に築造されたものとしている。

この手法の石室は，地域的には肥後を中心とした中・北部九州と畿内に顕著であるが，このうち畿内のものについては，平面が矩形を呈し，基底部から小石材を積み上げて壁体を築成する初期のものにしか認められず，これと比較すると，先に挙げた島根県内の岡田山1号墳など3古墳については，薄井原古墳2号石室をのぞくものでは腰石がみられ，また御崎山古墳以外の石室は玄室平面がたてに長い長方形を示すことから，畿内の石室にその源流を求めることはできないとしている。このような点を総合的に判断して，岡田山1号墳の石室は，中・北部九州のそれとの類似性が強いと結論している。

「三．横穴式石室にみる古代出雲の一側面」の中で，「記紀」の中の出雲と九州の交渉を想起させる記事として，「日本書紀」崇神天皇60年条にみえる，いわゆる出雲の神宝献上説話をとりあげている。

これは，神宝を奉持していた出雲振根が留守の間に，弟の飯入根がかわって神宝を献上してしまったというものであるが，出雲振根は「是往筑紫国而不遇矣」とあり，振根が筑紫国に行ったというこの説話には，横穴

式石室にみられた両地方の交渉という歴史事実が関与しているのではないかと推測している。

このような推測の上に立って，両地方における横穴式石室の相似という現象については，そこに石室を構築する工人の移動が考えられねばならないとし，この説話はこれらの工人を使役する首長が両地間を往来したことを示すものと考えている。したがって，横穴式石室の技法・手法の伝播には，工人の移動が伴うことはもちろん，首長の交流がベースになる場合も考えられるのであって，技法などの文化的側面にとどまらず，政治的な関係にも留意する必要があると論じている。

9.　山本義人・佐古和枝「岡田山1号墳の横穴式石室とその内部施設について」（松江考古学談話会刊『松江考古第5号』1983年4月30日）

この論考は，1982年10月，筆者等がおこなった石室内の箱式石棺を中心とする実測とその際判明した事実をもとに，内部構造，内部施設について考察したものである。

内容の構成は，1.はじめに，2.家形石棺と箱式石棺について（(1)家形石棺，(2)箱式石棺，(3)家形石棺と「箱式石棺」の関係），3.横穴式石室の平面企画と築造過程（(1)平面企画について，(2)横穴式石室の築造過程），4.まとめ，となっている。

ここでは，家形石棺，箱式石棺を中心とした内容について取り上げてみる。

(1)　家形石棺と箱式石棺について

「2.家形石棺と箱式石棺について」の中の「(1)家形石棺」で，この家形石棺は通常のそれとやや趣を異にしており，長持形石棺との関連が考えられるとし，その根拠として

1)　全体が6枚の石材で構成されていること。

2)　棺身四周の側石が底石の上に組み立てられていること。

3)　段削りによって底石が結合していること。

4)　長側石と小口側の短側石はそれぞれ内側の段削りによって組合わされているが，短側石が長側石によってはさまれる形になっていること。

などの点を挙げている。

また石棺と石室の左右側壁との間の床面に置かれた石材については，石棺の崩壊を防ぐための支え石の可能性が強いとしている。

「(2)箱式石棺」で

①　**構造**　通常の箱式石棺と異なる様相を示すとして

1)　側石上端の高さが不ぞろいで，また側石材間が不整合であること。

2)　現存する3個の蓋石は，一部加工を施した形跡があるが，厚さ，形状などがそれぞれ異なること。

などの点を指摘している。

②　**側石と蓋石の関係**　石室の主軸に直交する方向に設けられた箱式石棺の南側（羨道部から向って右側）の前後2枚の板石（側石）の高さは同じで，その上に1枚の蓋石が架されており，また北側の前後2枚のそれも高さが等しく，2枚の蓋石が置かれているが，しかし南と北では高さが異なること，蓋石の置かれている部分の床面には河原石が敷かれているが，蓋石のない中央部分（家形石棺の前方部分）の床面には敷石がないことなどから，これまで全体を把えて箱式石棺と称していたこの石組みは，南側と北側それぞれ独立した施設であると結論している。

「(3)家形石棺と「箱式石棺」の関係」では

③ **「箱式石棺」と称している石組（以下「石組施設」という）の性格**　この石組施設が，家形石棺の前方を利用して設けられていることから，家形石棺の附属施設と考えられるとし，家形石棺の内部が極めて狭いことからすると，副葬品を収納するための施設であった可能性があると考えている。

④ **家形石棺と石組施設の設置時期について**　側壁と石組施設との関係をみると，石組施設の側石部の小立石や蓋石の上に側壁の石がのったりあるいはかぶさったりしていることから，この石組施設が石室構築の初期の段階につくられたことがわかるとしている。

また家形石棺と石組施設はその配置からして，家形石棺が先に設置されたことがわかるが，石組施設が石室構築と同時につくられたものなら，家形石棺も石室構築にあわせて設置されたことが考えられ，両者はほぼ時を同じくしてつくられたものと考察している。

(2)　石室の平面企画について

「3.横穴式石室の平面企画と築造過程」の中の「(1)平面企画について」で，岡田山1号墳の横穴式石室が，片袖式か両袖式か種々論じられていることについて次のように述べている。

羨道部から玄室方向をみた場合，柱状立石の存在から両袖式にみえるが，逆に玄室内から羨道方向をみると南側壁と柱状立石がつながって片袖式のようにみえる。これは玄室と羨道部が異なった企画にもとづいてつくられたためであるとしている。即ち，玄室中央に安置された家形石棺の身と蓋がずれていることから考えて，羨道部は玄室奥壁と玄門部幅の中点を結ぶ線＝石室主軸をもとに企画されているが，玄室はこれとずれた玄室主軸をもとにつくられた結果このようになったと解釈している。

(3)　九州との関連について

「4.まとめ」の中では，岡田山1号墳の横穴式石室は九州色の強いものであることが指摘されているが，家形石棺や「箱式石棺」についても，九州との関連が想定できると述べている。即ち，家形石棺と玄室側壁との間に置かれている石を支え石とみると，大分県下山古墳にその類例を求めることができ，また「箱式石棺」を南側と北側においてそれぞれ独立した施設とすると，蓋石が屋根形を示していることから九州に多い石屋形を思わせ，石組の間にさらに板石を立てる仕様は石障系石室との関連も連想させるとしている。

10.　小田富士雄「島根県の九州系初期横穴式石室再考」（山本清先生喜寿記念論集刊行会刊『山本清先生喜寿記念論集・山陰考古学の諸問題』1986年10月10日）

筆者は，かつてわが国における横穴式石室古墳導入期の様相を地域的に検討したが，その中で山陰地方における初期横穴式石室の一類型として岡田山1号墳の石室も取り上げている。その後種々重要な発見があったりして新知見が蓄積されたので，この際九州との対比において山陰の古墳文化を再考しようとするものである。

内容の構成は，1.岡田山1号墳の石室構造，2.御崎山古墳の石室構造，3.めんぐろ古墳の石室構造，4.九州における古期横穴式石室の構造，5.島根県の九州系横穴式石室，となっている。

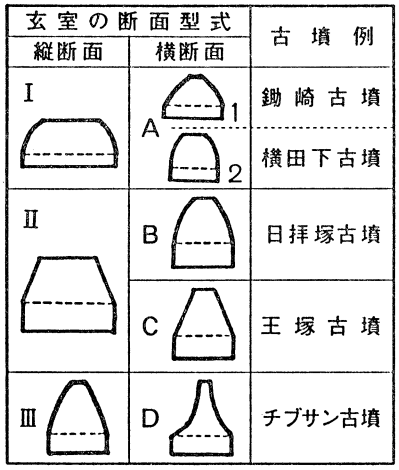
(1)　石室構造の特徴について

「1.岡田山1号墳の石室構造」の中で，この石室を九州型と判定した構造上の理由として次の2点をあげている。

① **石室の断面形態について**　玄室の横断面（奥壁）と縦断面（側壁）についてみると，基礎には玄室中央に据えられた家形石棺の身高に相当する高さの2段積腰石を置き，この上から割石を持ち送り式にゆるやかな外彎カーブを描くように積み上げてゆき，奥壁はそのままのカーブで天井に到るが，左右側壁は天井下約1mのあたりから鉛直気味に立ち直って天井に及ぶという構築技法がとられていることに注意している。このカーブ

変換位置には，それぞれ周壁をめぐる横目地が形成されているが，これを壁面構築作業工程の区切りを示すものとして，腰石の設置までを第一工程，天井下1mあたりのカーブ変換点までを第二工程，それ以後天井までを第三工程とみている。

② **石材の使用法について**[1]　壁面構築にあたって，基礎に大形の腰石が使用されていること，第二工程以後はこれより小形の石を小口積みにしているが，第三工程の石材はさらに小形のものが使用されていること，石積み技法では縦目地を通さない煉火積技法が基本であるが，一部に縦目地の通る重箱積技法がみられること，奥壁と側壁の交わる隅角部には両壁に架けわたした力石が使用されていること，玄門部左右には柱状袖石を立て玄室と羨道を区別しているが，この高さと壁面築工とは密接な関係がみられること，また玄室の形状からは片袖式ともみられるが羨道部右側面の様相からすると両袖式と判断されること，両袖石の上に架けられた楣石下底の高さは羨道部天井のそれと等しくそろえられていること，などに注意している。そしてこのような諸特徴は，九州地方で6世紀中ごろまでに流行した横穴式石室に通じるところがあると述べている。



(2)　九州の横穴式石室との対比

「4.九州における古期横穴式石室の構造」では，代表的な5石室について，玄室の縦，横断面の型式によって，図表のように5段階に分類，編年しているが，「5.島根県の九州系横穴式石室」で，岡田山1号墳の石室をこの分類に対比した場合Ⅱ—B型式に相当するとしている。ちなみに御崎山古墳の石室はⅡ—C型式にあたるとしている。そしてこれらの石室は，九州で6世紀前半～中ごろに盛行した型式を継承したもので，これらの石室の上限は6世紀中ごろと考えるのが穏当であるとしている。

註(1)　石室の構築については，川原和人氏が「島根県・岡田山1号墳の横穴式石室の構造について」(『古文化談叢』第7集所収)で述べている。

11.　渡辺貞幸「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」(山本清先生喜寿記念論集刊行会刊『山本清先生喜寿記念論集・山陰考古学の諸問題』1986年10月10日)

出雲地方には大形古墳が集中している地域がいくつかあるが，中でも松江市山代・大庭古墳群と出雲市今市・塩冶の古墳群は，それぞれ出雲最大の前方後方墳，前方後円墳を含み，古墳時代後期の出雲の政治状況を究明する上で特に重要である。本論考は，このうちの山代・大庭古墳群のあり方から，古墳時代出雲地方の有力首長の動向をさぐろうとするものである。

内容構成は，一．はじめに，二．大橋川の谷の諸古墳の編年と性格，三．山代・大庭古墳群の形成と周辺の諸古墳，四．山代・大庭古墳群と六世紀の出雲，五．おわりに，となっている。

「三．山代・大庭古墳群の形成と周辺の諸古墳」の中で，岡田山1号墳，同2号墳その他の周辺の岩屋後古墳，御崎山古墳などは，地名をとって「有古墳群」として総括されている。そして筆者は出土した須恵器の形式，その他から，これらの古墳については，岡田山2号墳→岩屋後古墳→御崎山古墳→岡田山1号墳の編年試案をすでに発表している。[1]

山代・大庭古墳群は，この有古墳群と低丘陵状の台地を置いて約1.3km北側にあり，出雲最大の前方後方墳である復元全長92mの山代二子塚古墳や大庭鶏塚古墳，山代方墳，永久宅後古墳（山代円墳）などの大形古墳からなるもので，時期については6世紀から7世紀にかけて形成されたものとみている。

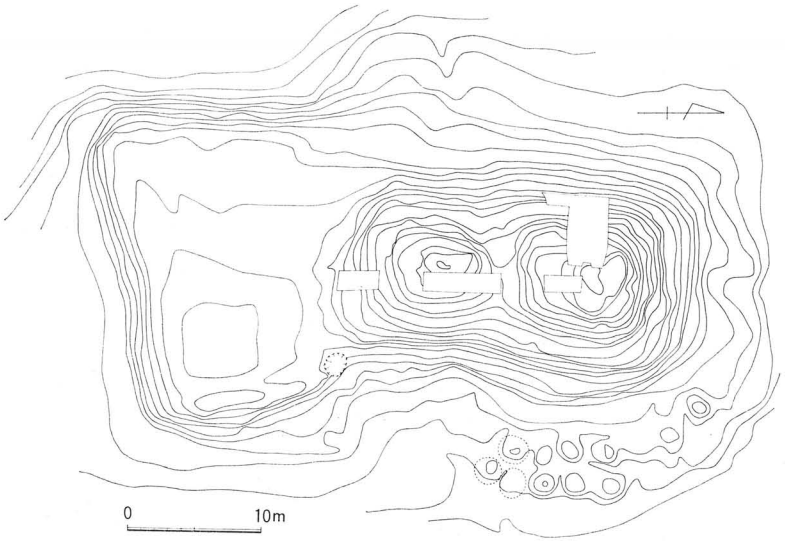
有古墳群の性格については，「岡田山２号墳以外は，基本的に山代・大庭古墳群に従属する形で，併行した時期に造営された」もので，「この古墳群の造営者一族は，おそらく最も古く位置づけられる岡田山２号墳のあと，山代・大庭古墳群を営んだ大首長を盟主とする地域政権の構成員となっていた」と推測している。

註(1)　渡辺貞幸「岡田山１号墳研究の現状と問題点」（島根考古学会刊『島根考古学会誌第１集』1984年４月15日）

（蓮岡法暲）

第２節　昭和45年度調査の経過

島根県では，八雲立つ風土記の丘を設置するにあたり，その一環としてこの岡田山古墳も昭和45年から46年にかけて整備することとなった。整備の方針としては，２号墳は樹木の間伐のみを実施して原状の保存を図り，１号墳は墳丘の復原整備と石室内の流入土を除去して内部の公開を図るというものであった。ところが，この古墳はそれまで精査されたことがなかったので，その具体的内容が不明であり，そのため具体的な整備計画を立案することがきわめて困難であった。そこで，島根県教育委員会では昭和45年６月25日から７月７日までの13日間，整備計画策定のための事前調査を実施した。その結果，１号墳では，1.墳丘は三段築成で，中段の斜面には前方後方形に貼石が廻らされていること，2.石室は片袖形式の横穴式石室で，羨門部は栗石によって閉鎖されていること，3.円筒埴輪や子持壺が墳丘の周囲に配置されていることなど，多くの新事実が判明した。



第13図　岡田山１号墳トレンチ配置図

この調査結果をもとに墳丘の整備は調査と併行して行なうこととし，実際の調査は昭和45年12月11日から46年３月９日までの間，門脇俊彦が担当して実施した。

（門脇俊彦）

第３節　遺跡の保護と調査後の措置

1.　古墳発見後の経過

1915年（大正４年）の岡田山古墳発見の経緯については，第１節で述べたところである。

その後，長い間この古墳に関る目立った動きはなかったが，昭和30年代になって，丘陵の樹木が伐採され，

墳丘の全容が観察可能になり，さらに墳丘の測量がおこなわれた結果[1]，1号墳が前方後方墳であること，前方部の前方に台状の平坦地があることなどが明らかになった。

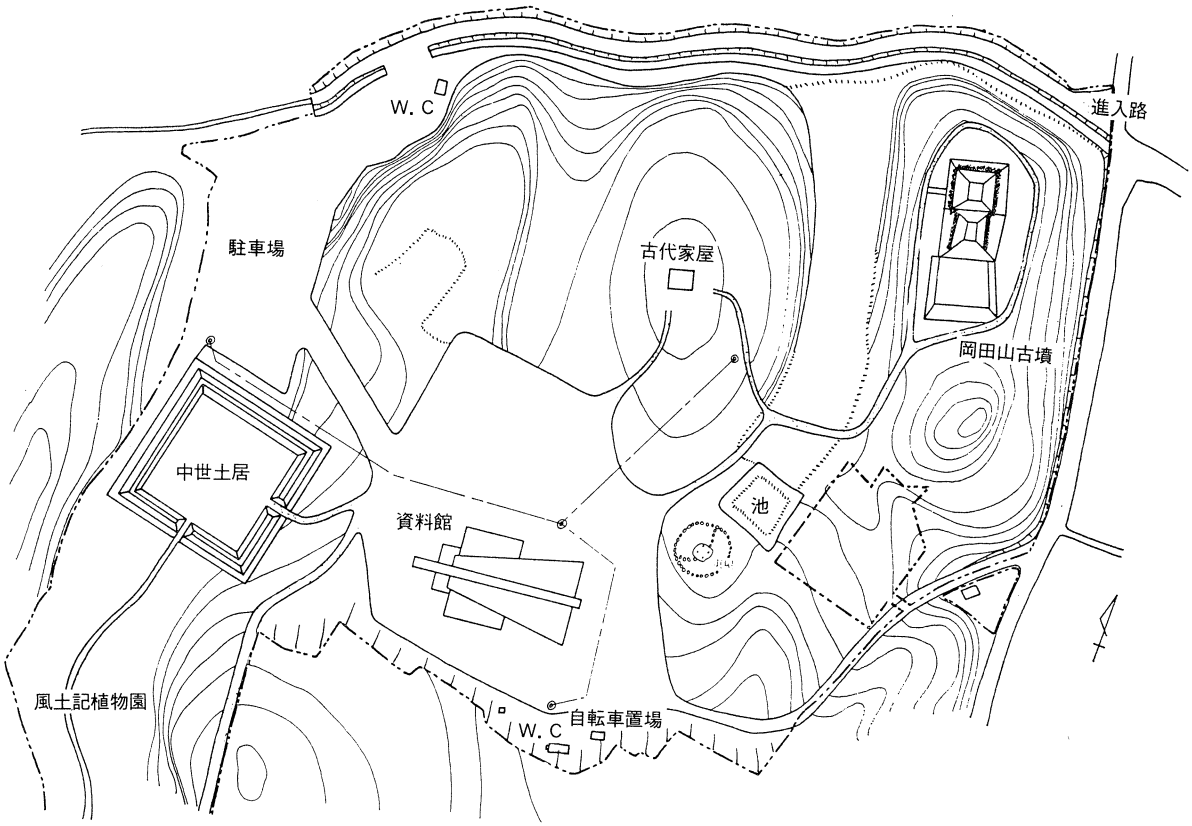
昭和38年，この古墳を含む丘陵一帯で，民間の宅地造成が計画されたが，これに対し市民の間から保存を要望する運動が起き，県教育委員会などに保存要望書が提出された。このような状況のもとで，県教育委員会，松江市教育委員会では，国史跡指定，土地買上げをおこなって保存を図る方針を決定，文化財保護委員会（現文化庁）と協議した。そして昭和40年3月，松江市から史跡指定の申請書が提出され，昭和40年4月9日付けで1号墳と2号墳を包括する区域約8500m²が「岡田山古墳」として国史跡に指定され，翌41年12月には，指定区域のほぼ全域を松江市が買収し，公有地化した。

しかし，整備がなされる前の，昭和40年段階においては，2号墳は未掘のままで保存されてきたが，1号墳は墳丘もかなり崩壊しており，また石室は大正4年の発掘で天井石が1枚取り除かれたままになっていて，そこから多量の土砂が流入して玄室内を埋めていたし，羨道部は閉塞されたままであった。

2.　昭和45年度の調査と整備

島根県では，県立八雲立つ風土記の丘を設置するにあたり，昭和45度に風土記の丘センター地内に所在するこの古墳の整備をおこなうことになった[2]。

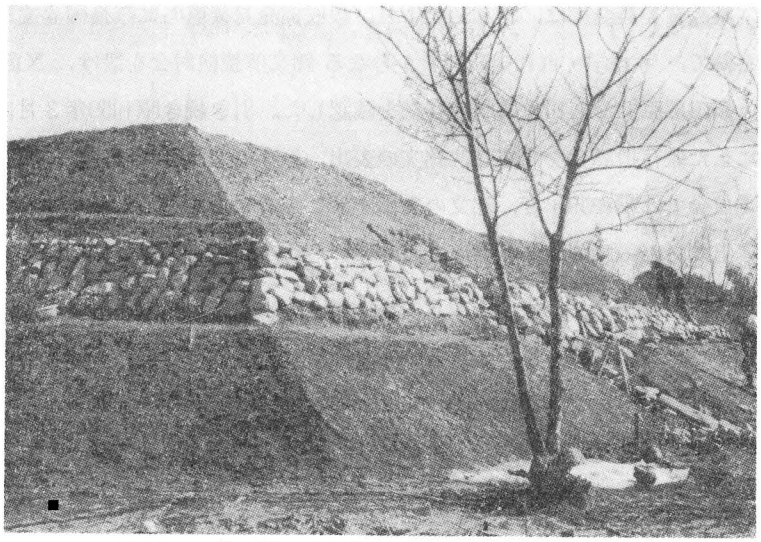
整備の方針については，2号墳は未掘であり，墳丘もほとんど損なわれていないので，墳丘の樹木を間伐するのみで現状保存することとし，1号墳は墳丘，石室の損壊があるので，発掘調査をおこない実態を把握した上で，これをもとに修復・整備を実施することとした。調査の内容，成果については，第Ⅰ部第3章で述べるところであるが，これをもとに次のような整備がおこなわれた。



第14図　岡田山古墳群およびその周辺の整備計画

まず，墳丘及び周辺の繁茂していた樹木等を伐開し，古墳の全体が眺望できるようにした。

墳丘については，前方部と後方部が分離したような形で，各々別個の古墳であるかのような感じを与える特異な形状であるが，これが本来の形態であると判断し，崩壊部分を修復し，また中段をめぐる葺石を露出させ，欠落した石を補修して原形に復し，他の部分は全面的に張芝をした。



第15図　岡田山１号墳の墳丘整備

前方部下方に埋れていた古墳や周辺に点在する４基の小古墳及び後方部東北辺の中世墳墓群（小規模マウンド）については，いずれも現状のままで保存することとした。

石室については，羨道は原状のままで完全に閉塞されていて，石室内への出入りは大正４年の発掘で開けられた穴からおこなっていた。そこで，石室内に流入した土砂を除去し，一部崩壊した個所を補修すると共に，羨門の閉塞施設を取り除き，羨道を開いた。羨門を閉じていた小石は，入口附近に積み上げ保存することにした。

また全方向から見学してもらうため，１号墳の周囲をめぐる遊歩道を設置した。

なお古墳群の西側に接して，ススキの生い茂る原野が保存されているが，特に秋ともなれば，ススキの銀色の穂と古墳の造形が調和して一種独得の風情をかもし出す。

3.　遺物発見後の経過と保存処理

大正４年の発掘では，後述するように鑑鏡，大刀を含む武具類，馬具類，須恵器，その他多数の副葬品が出土した。この出土品は，昭和７年になって発見者の伊藤氏から松江市大草町の六所神社に奉納されて同神社の所有になり，以後同神社で保管されてきた。その後，昭和20年代になって県立図書館で一時展示されたこともあるが，昭和34年からは県立博物館で寄託・展示され，さらに昭和47年からは県立八雲立つ風土記の丘開設に伴い，風土記の丘資料館において寄託・展示されることになり，現在に至っているが，この間，昭和37年６月12日付けで，一括して「岡田山古墳出土品」として県有形文化財（考古資料）の指定を受けた。

また昭和45年度の発掘調査では，墳丘から多数の円筒埴輪と子持壺，かまどの上にのった土師器甕のセットなどが発見されており，玄室からは鉄鏃多数が出土した。

大正４年の出土品の品数については，報告，論文等で相異があることは第１節で触れたところであり，長年月の間に失われたものもあるが，それでも全体的にはよく保存されてきたということができる。

しかし発見後約70年が経過し，鉄の腐蝕が進行して分解のおそれも出てきたので，昭和57年度に元興寺文化財研究所（奈良県）に委託して，保存処理をおこなった。

第Ⅱ部で述べるように，この処理に関連してＸ線検査を実施したところ，昭和58年12月，円頭大刀の一つで刀身に象嵌銘のあることが発見されたのである。

県教育委員会では，昭和59年1月，象嵌銘発見後直ちに奈良国立文化財研究所・元興寺文化財研究所の協力を得て，考古学・古代史研究者からなる銘文解読検討会を設け，X線写真をもとに銘文の解読をおこない，「額田部臣」など10数文字の存在を確認した。引き続き昭和59年3月には，銘文解読検討会のメンバーを中心にした保存指導会を開催し，銘文の表出，保存の方法等について指導・助言を受けた。これをもとに，県教育委員会では昭和59年度，銘文の表出をおこなうことにし，この事業を元興寺文化財研究所に委託した。銘文の表出にあたっては，保存指導会のメンバーに金属分析の研究者等を加えた銘文表出指導会を設け，この指導のもとにおこなった。

銘文の表出が完了した昭和60年2月には，再度銘文解読検討会を開催し，表出された銘文を詳細に解察，検討した。

また，昭和59年，60年度の2か年をかけて，専門業者に委託して，銘文表出前，表出後のレプリカを作成した。これも銘文解読検討会，銘文表出指導会が業者を指導して作成した。

大正4年の出土品は，昭和60年6月6日付けで「出雲岡田山古墳出土品」として，重要文化財（考古資料）の指定を受けた。その内訳は次のとおりである。

出雲岡田山古墳出土品

1. 銀錯銘銀装円頭大刀　額田部臣在銘		1　口
1. 金銀装環頭大刀		1　口
1. 金銀装円頭大刀		1　口
1. 内行花文鏡		1　面
1. 金　環		2　箇
1. 金銅空玉　残欠共		16　箇
1. 馬具類		
金銅鞍金具残欠	1背分	
金銅雲珠	6　箇	
金銅鏡板	1　具	
銅鈴　残欠共	7　箇	
鉄環	2　箇	
1. 刀子等残欠		3　箇
1. 須恵器		2　箇

所有者　六所神社　島根県松江市大草町496[(3)]

註(1)　1964年（昭和39年）1月～3月，島根大学学生諸氏によって，墳丘の実測がおこなわれた。（『菅田考古No.4』1964年3月）

(2)　島根県教育委員会「八雲立つ風土記の丘設置事業報告」（昭和48年3月）36～37頁参照。

(3)　昭和60年6月6日付け官報（号外第66号）6頁。

（蓮岡法暲・永塚太郎）

第3章　岡田山1号墳の調査

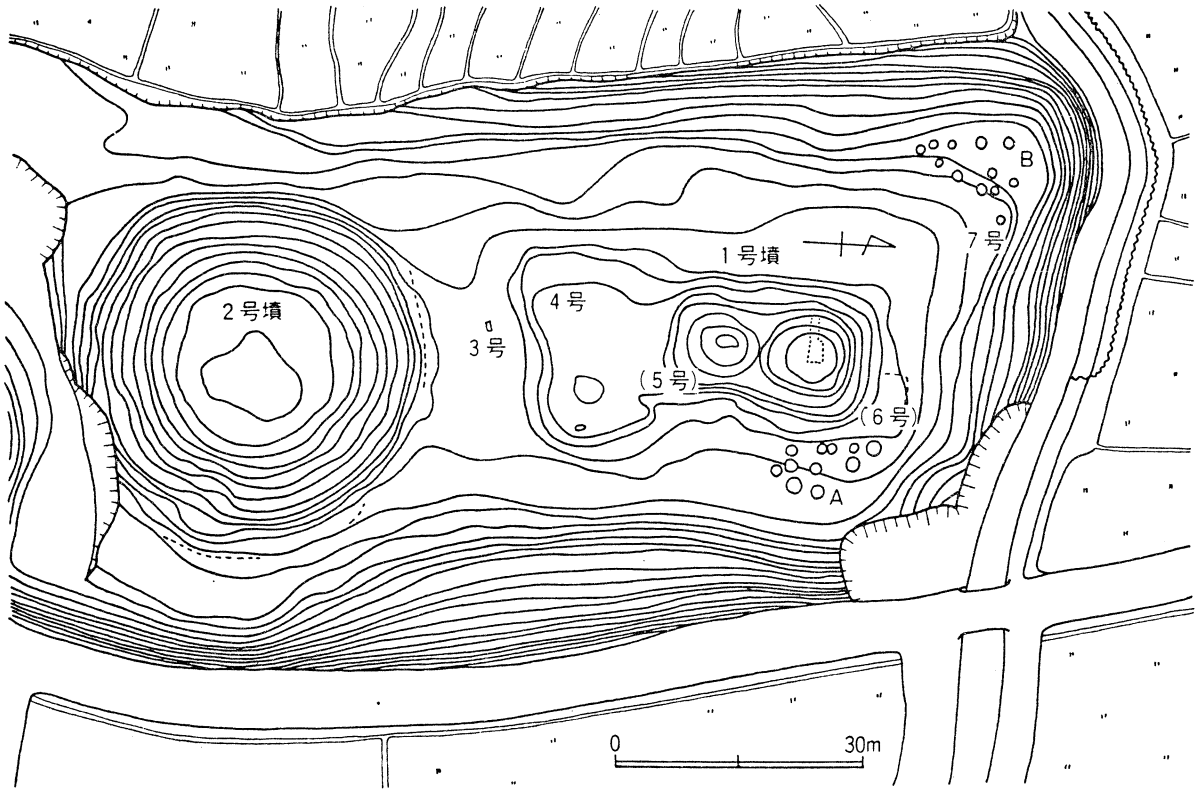
第1節　古墳群の構成

岡田山古墳群は，標高約 260m の室山から北方に派生した小支丘の先端部に位置する。標高 22m あまりの丘陵上に築造された古墳群で，墳丘を有するもの4基と箱式石棺3基から構成されているが，現状では2つのマウンドが顕著にみられる。このうち北側に位置するものが全長約 24m の前方後方墳で，1号墳と称している。1号墳は前方部の前部（南側）に長さ約 23m，幅 28～29m，高さ 1.6m のいびつな長方形のテラスを備えている。2号墳はその南側に位置する径 44m の大形円墳である。3号墳としているものは1号墳の長方形テラスの裾にある箱式石棺である。4号墳と称しているものは1号墳の長方形テラス上にある箱式石棺である。5号墳は，1号墳前方部の墳丘下にあるもので，墳形は不明であるがさし渡し 12m あまりのものである。6号墳は，1号墳後方部の墳丘下にある一辺 10m の方墳である。7号墳としているものは1号墳の北西側にあった箱式石棺である（第16図）。

（門脇俊彦）

第2節　1号墳の墳丘

岡田山1号墳の墳丘は，築造時の全長約 24m，後方部幅約 14m，前方部先端幅約 14m を測り，その前部に長さ約 23m，幅 28～29m，高さ約 1.6m のいびつな長方形を呈するテラス状の造り出しを備えた特異な形



第16図　岡田山古墳群分布図

態をもつ三段築成の前方後方墳である。この古墳の造り出し部には盛土は見られず，地山を整形したのみの構造であり，また墳丘部の下段も基本的には地山によるものである。しかもこの墳丘下段部においては地山を加工した痕跡はほとんど認められず，前方後方墳でありながらこの段は長方形を呈しており，丘陵頂の自然地形を巧みに利用したものと思われる。つまり，この古墳は三段築成とはいっても，先端にテラス状の部分を備えた長方形の地山の上に二段築成の前方後方墳を載せたものであるとみることもでき，造り出し部を含めて全長約47ｍの規模をもつ古墳としては，その割りに労力を節約して築造されたものであるということができよう。そうはいっても，この地山には全く手が加えられていないというのではない。造り出し部の周囲の斜面はある程度整形された跡を留めているし，その上面もいくらかは削って平坦面を形成したものらしく，この部分の旧表土は削り取られている。また墳丘下段部にしても自然地形そのままではない。特に後方部の下段斜面は，ゆるやかな自然傾斜の上に土盛りして墳丘らしく整えているし（図版4断面図），前方部の下段部は若干地山を削って整形した跡を留めている。しかし，墳丘部の地山上面にはほとんど整形痕が認められず，大部分の旧表土を残しているし，また前方部の下にはこの古墳の築造以前から存在していたと思われる別の古墳がほとんど原状のままで埋められている。この古墳については後述するところであるが，岡田山1号墳は一辺約12ｍの既成古墳（墳形については明らかではないが，この地方の岡田山1号墳以前の時期の古墳のほとんどが方墳であるので，この古墳もおそらく方墳であろうと推測される）の上に築造された古墳なのである。しかも，築造に当たっては，この既成古墳上の表土も大部分をそのままにして，その上に土を覆っているのであり，墳丘部においては地山上の凹凸すらならすこともなく，ただ原状のまま上に土を載せていったもののようである。またこの岡田山1号墳は，後方部がいびつであって，後側の辺は中程で折れたような形をしているが，これも自然地形にあまり多くの手を加えなかった結果によるものと理解することができるのであり，この古墳の墳丘の造りはかなり粗雑であるということができよう。

この古墳の墳丘でもっとも丁寧に造られている部分は高さ約1ｍの中段である。いびつな下段の影響を受けて，後方部後側の辺は不整形であるが，他の部分は前方後方形によく整った形を呈し，全長約21.5ｍ，後方部幅約11.5ｍ，くびれ部幅約7.6ｍ，前方部先端幅約11.5ｍを測るくびれ部のよくしまった優麗な形を示している。斜面には丸味を帯びた自然石を貼り廻らして斜面の土止めとし（図版4），その外側には円筒埴輪を配していた。この古墳の保存状態はあまり良好とはいえず，上段の土が多量に流れ落ちたために貼石列も各所で乱れてはいたが，それでも前方部の東側や後方部後側の東半分，それに両くびれ部の貼石は原状をよく留めていて，この古墳中段の造り方を知ることができた。なお前方部先端は十分な調査を実施しなかったので，貼石列の様子など，その詳細については明らかではない。

上段は封土の流失がひどく，また後方部頂は大正4年の密掘の際に天井部から侵入していることから，かなり変形していて，築造当時の高さは不明であるが，現存の状況では後方部は約2ｍ，前方部は約1.5ｍを測り，この古墳の現存高は，後方部後方麓を起点にすると，後方部約4ｍ，前方部約3.5ｍとなる。またこの古墳の上段は前方後方形を呈してはおらず，それぞれ別々に土盛りしているので，あたかも2基の方墳が併存しているような様相を示していて，前方部の特異な前方後方墳であるといえる。このような形態の前方後方墳の類例は，近くでは松江市西川津町所在の国指定史跡金崎1号墳に求めることができるが，これらの古墳の前方部は，祭壇状の広い平坦面を有するものではなく，またあの独特な優美さを示す前方部でもない。それはまったく形式的としかいいようのないものであり，この時期の前方後方墳の形式的一面を示すものとして注目される。

このようにみてくると，この岡田山1号墳は前方後方墳であるとはいっても，真に前方後方形を呈しているのは中段のみであり，それだけに中段に築造の主力が注がれているとみることができようし，またこの中段が

この古墳の基調をなしているともいえるわけである。その中段の平面形は，後方部は後側の一辺がややいびつであるほかは約 11.5m 方の正方形を呈し，前方部は外開きして，その先端は後方部とほぼ同じ幅に拡がり，後期の前方部の様相を如実に示しているということができよう。しかしその形態はよく整っていて，くびれ部から前方部に延びる貼石列の線は見事な弧を描き，後方部の方形も規画的であり，全体的には歪んだ形のこの古墳も，中段のみについてみるときわめて整然とした形態を備えているといえる。下段と上段の造りはあまり手の込んだものではなく，どちらにも貼石の存在は認められていない。上段は盛土であるにもかかわらず，貼石等の土止め工事が行われていないために造りが弱かったものらしく，封土の流失がいちじるしい。そのために中段や下段および墳麓部にはかなり多量の流土の堆積がみられた。

次にこの古墳の築造順序について触れておこう。この古墳の築造に当たっては，まず造り出し部と墳丘下段部の整形から始められたことは当然であるが，その際に造り出し部および墳丘先端部は周辺を若干削り落して急斜面を造り，上面を削平して地山加工壇を造ったもののようであり，墳丘部の大部分は丘陵のゆるやかな斜面を削ることなく，土を盛りたすことによって急斜面を造り，形を整えたようである。これはおそらく，丘陵頂の地形が造り出し部の位置する丘陵中央部において広い高所をもっていたためであろうと推測される。この作業の過程で，最初は前述した前方部下の既成古墳を削り取るつもりであったらしく，造り出し部に近い部分では若干既成古墳の墳丘を削平しかけている様が断面にうかがわれるが（図版4断面図），この作業は何らかの事情で中途で断念し，そのまま上に土を覆って中段の構築作業に移ったもののようである。また墳丘部周辺の大部分の場所でみられる地山に土を盛りたす整地作業には，一気に黒褐色を呈する土を用いたもののようで，各所の断面にみられるこの部分の土は，すべて同様の土の単純層になっている。このようにして造り出し部および墳丘下段部の構築を終えると，次には内部主体である横穴式石室の築造を行ったもののようで，石室の掘り型は下段上面から認められた。次は墳丘の中段および上段の構築作業であるが，この作業は後方部から始めたもののようで，後方部の封土の上に前方部の土が載っている（図版4断面図）。封土は元来主体部を覆うことを目的としたものであるから，石室の造られている後方部に先に盛り土するのは当然のことであろうが，それにしてもこの古墳の断面はその築造過程をよく表わしている。作業は石室を構築していくのと併行して，黄褐色土を順次盛り上げたものと思われ[(1)]，この黄褐色土はほぼ玄室壁上端レベルまで盛られている。なお，石室の石材間のすきまにはかなり念入りな粘土による目詰めを施して石室内への土や雨水の侵入を防いでいる。ここまでの作業を終えると，次にはその上に上面がほぼ水平になるように黒褐色を呈する土を盛り，後方部の封土の基礎作りを終えている。次にはその上に暗黄褐色の土を盛って天井石も覆い，後方部の封土を盛る目的を一応達成し，次に前方部の上面をならすために薄く黄褐色の土を敷いている。この黄褐色土は前方部の封土としては最下層のものであるが，この土は後方部の二番目の封土である黒褐色土層の上に載っていることから，これまでに述べた築造順序を知ることができる。ここまで造ると，後は封土の上を化粧土で覆って形を整えることになるが，この古墳では暗黒褐色を呈する土を墳丘上面一帯に覆って盛土の一応の完成をみたものと推測される。後は墳丘周囲の形を整え，斜面の補強作業を残すのみであるが，この古墳のこの時点までの築造プランは，今日みる岡田山1号墳とはかなり様相を異にしていたものと考えられるのである。

図版4に示す墳丘縦断面図をみると，明らかに後方部の封土の南端とみられる位置は，今日後方部のそれと考えている鞍部の位置より約3m南側に寄っている。つまり，今日いう後方部の長さよりも当初は約3m長く，逆に前方部はそれだけ短いことになる。しかもこの古墳の化粧土と考えられる暗黒褐色土の上面は，後方部の方がはるかに高く，前方部のそれは後方部南端から盛り上がることなしにほぼ水平に拡がっている。そうして今日みられる墳頂の鞍部は，明らかに最初の盛土作業後においてえぐり取られた様子を断面図は示している。

つまり，今日みられる墳頂の鞍部は二次的な作為によって造られたものなのであり，当初のこの古墳のプランは今日みるような方墳併存のような姿のものではなく，一般的な優美な前方部を備えたものであったということができる。ところが，中段の斜面を廻る貼石列でみると，後方部と前方部との界をなすくびれ部は，今日の後方部南端の位置と一致していて，当初の盛土の示す後方部南端とはずれている。つまりどちらも原初的なものと考えられる貼石列と盛土のあいだに構造上の矛盾があることになる。この事実は一体何を物語っているのであろうか。今日みられるこの古墳の平面プランは，後方部が下段との関係で若干いびつであるとはいえ，基本的には整った正方形プランである。つまり平面プランでいえば今日いう後方部南端も，また中段斜面の貼石列も当然の位置にあるわけで，盛土の断面のみが不自然な姿を示していることになる。そこで考えられることは，盛土が完成していよいよ最後の整形作業に入ろうとした時点で，後方部が縦長の長方形になることに気づき，急挙築造プランを変更せねばならなくなったのではなかろうかということである。つまり，後方部の南側を約3m削り取ることによって正方形の後方部を造ることとし，削り取った黒褐色の土は前方部上に盛ることにしたために，当初は予想もしなかった高い前方部ができ上がってしまったのではないかと考えられるのである。このように，プランの変更をして，その変更プランによって最後の斜面補強作業をし，古墳を完成させたものであろうと考えるのが妥当ではあるまいか。このように考えると，くびれ部において下段上面が不自然に広くなっており，またその面が斜面になっていて，いかにも不整形な今日の姿を横たえている事情も自ずと理解することができるのである。この推測を肯定するならば，当時の前方後方墳における前方部はきわめて軽視されていることになる。主体部のある後方部は途中で築造プランを変更してまでも整った方形に造ろうとするのに対し，前方部はいうなれば余った土の捨て場に使われているようなものであり，当時の人々の前方部に対する考え方を示すものとして興味深い。　（門脇俊彦）

註(1)　後方部の築造順序については，石室の周囲にみられた黄褐色土が比較的単純な層であったため，石室を構築したのちに一気に盛り上げたものと考えていた（門脇俊彦「岡田山古墳群」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会昭和50年3月P52)。ところが，実際の築造にあたってまず石室のみを構築していくことはきわめて不可能に近い作業であるうえ，最近の横穴式石室墳の調査例（出雲市・大念寺古墳，玉湯町・林43号墳，仁摩町・明神古墳など）をみると石室を構築する作業と併行して盛土を順次施していることが明らかになったので，岡田山1号墳の場合もそのようにして築造されたものと推測した。したがって，黄褐色土とした層もそうした築造順序を念頭に入れて仔細に観察すれば幾層かに分けて盛られている状況が把握できたのではないかと思われる。

第3節　1号墳の内部構造

岡田山1号墳の内部構造は横穴式石室である。横穴式石室は，後方部のほぼ中央から西側に開口している全長5.6mあまりの石室で，玄室長2.8m，同奥部幅1.8m，同前部幅1.3m，同高2.2m，玄門部長0.4m，同幅0.8m，同高1.2m，羨道部長2.4m，同奥部幅1.1m，同高1.2mを測る（図版5・38～42)。

石室の平面形は，玄門右側に存在する柱石が玄室南壁最下部の延長線上にあるため片袖形とも両袖形ともいえる形態となっている。玄室は奥が広く，前がやや狭い不整な長方形を呈し，羨道部は左右壁がほぼ並行して築かれている。また，玄室と羨道部の間には仕切石を置いて両者を区別しており，玄室の床面には扁平な石を敷きつめている。

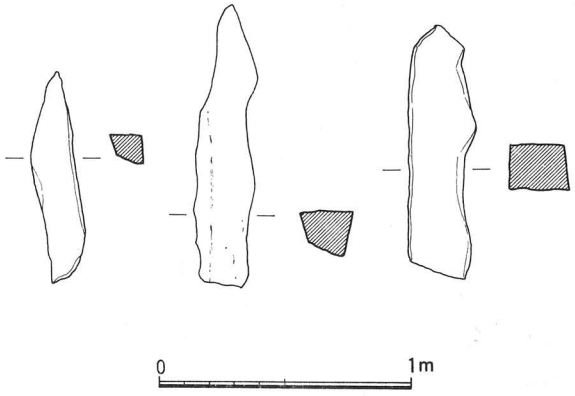
玄室内には家形石棺と箱式石棺状の施設が存在する。家形石棺は玄室のほぼ中央に石室の主軸に沿って置かれ，棺身は，前後左右床各1枚づつの切り石を刳り込みによって相互に石を嚙み合わせた精巧な組合せ式のもので，内法での長さ1.15m，幅0.35m，深さ0.4mを測る。蓋石は，長さ1.4m，幅0.65mあまりの切妻の屋根形を呈し，外面には長さ10～15cm，直径10～15cmの円形の縄懸け突起が左右に各3個，前後に各1個存在する（図版6・41・43）。

家形石棺の前方には，長さ約1.6m，幅約0.6m，深さ約0.6mを測る箱式石棺状の施設が石室の主軸に直交する方向に付設されているが，これは家形石棺の前壁や玄室の側壁をそのまま利用したもので，蓋石は4枚からなる（図版43-1）。また，家形石棺の左側には扁平な石を35～15cm間隔に3枚置き，右側奥壁よりのところには石が1枚置かれている（図版42-3・4）。

玄室の奥壁は，持ち送り式に積み上げられているため，内湾し，上方に行くにしたがって幅が狭くなっている。壁の最下部には高さ60cmあまりの腰石をすえ，2段目は中央に高さ30cmの石を横積みし，その左右にやや小さな石を2～3重に積み上げている。この2段目上方の両端には力石が存在する。3段目は，やや大きな石を2個横積みし，その上の2つの扁平な石は平面形が「へ」の字形になるように両端が前方に突き出ている。このあたりから比較的小形の石が使われ壁面の幅が急に狭まり，壁の平面は弧状を呈し，側壁との区別がはっきりしなくなる。しかし，天井石から20cm下がった所には側壁にも重力が分散するように1枚の扁平な石を平積みし，奥壁と側壁との区別をはっきりさせた後，20cm大の石を2重に積み重ねて天井にいたっている。この部分に力石があるが，それは右側のものは下の段に，左側のものは上の段にそれぞれ存在し，奥壁上端と天井石の接する部分の平面形は半円形を呈する。

玄室の側壁は最下部に，両壁とも長さ2m近い石を据えているが，左側壁は一部に10～20cmの小さな石を用いており，右側の壁と比べ少し雑である。左側壁は，奥壁との境に3つの力石が存在し，奥壁から派生する横目地線は3本通る。下方の横目地は柱石の上方に伸び，この部分までは比較的大きな石を用いて内湾ぎみに小口積みしている。中ほどの横目地線は羨道部上の天井石にぶつかり，下方の横目地からこの部分にかけてはほぼ垂直に積み上げ，上方の横目地線までは外湾ぎみに積み上げて天井にいたっている。

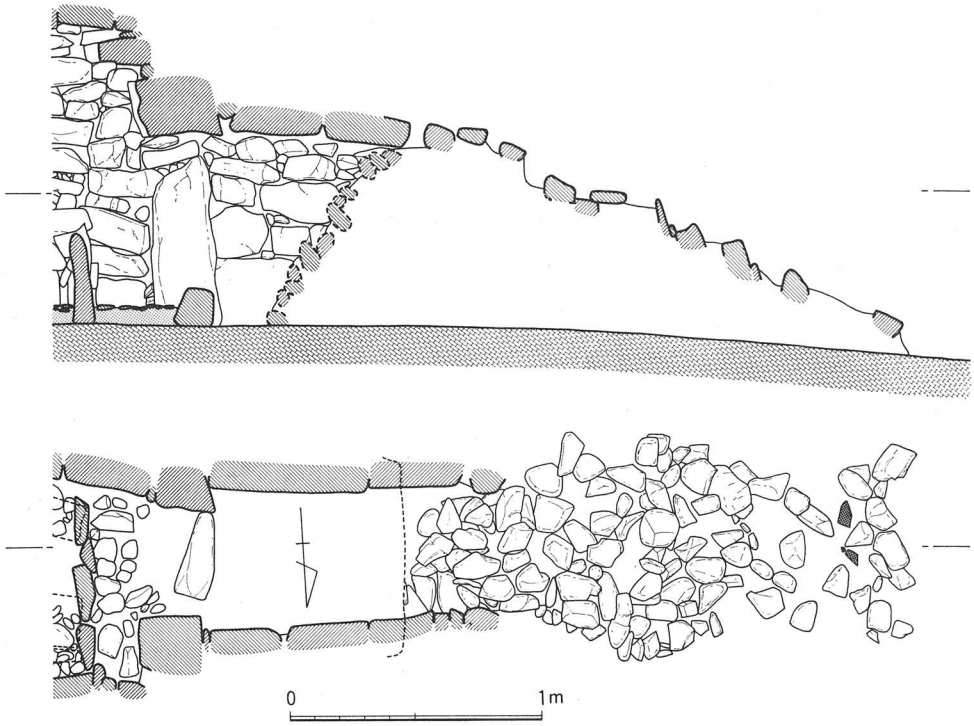
一方右側壁は，奥壁との境に5つの力石が存在する。最下方の力石から派生する横目地線は石棺の蓋石と同一レベルに続き，下から3番目の力石から派生する横目地線は，やや下がりぎみに前方にのび柱石のほぼ上端にいたっている。この部分までは内湾ぎみに持ち送り式に積み上げられ，最上部の力石から派生する横目地までの間は，比較的小さな石を用い，外湾ぎみに石積みしている。このように左右壁共に3本横目地が通っているが，それらの横目地線は，左右壁ほぼ同一レベルで，中ほどの横目地線は横断面の変換点と一致する。



第17図　玄門の閉塞に使用された石

また，床面から天井石に接するまでの側壁内傾度は，左壁11度，右壁16度を測り，壁面は，石の上下がジグザグになるようなレンガ積みされた所が多く，玄門付近には一部重箱積みがみられる。

羨門部天井石の上には，三重に積まれた小さな前壁が存在するが，上端の幅は約15cmできわめて狭く，玄室の左側壁と接する部分に上下2つの力石が存在する。羨道部の側壁は，天井石のある部分までは比較的大き



第18図　羨道部閉塞状況実測図

な石を持って壁面を構成しているのに対し，入口付近ではやや小さめの石を用い雑な積み方になっている。天井石は玄室部3枚，羨門部1枚，羨道部2枚の計6枚から成り，羨門部と羨道部の天井石は段がみられず一直線にならぶ。

なお，玄門の閉塞は，調査で細長い石が床面近くから3個検出されていることから，これらの石を使用したものと思われ（第17図），羨道部は小さな石をぎっしり詰めて閉塞していた（第18図）。（門脇俊彦・川原和人）

第4節　1号墳遺物出土状況

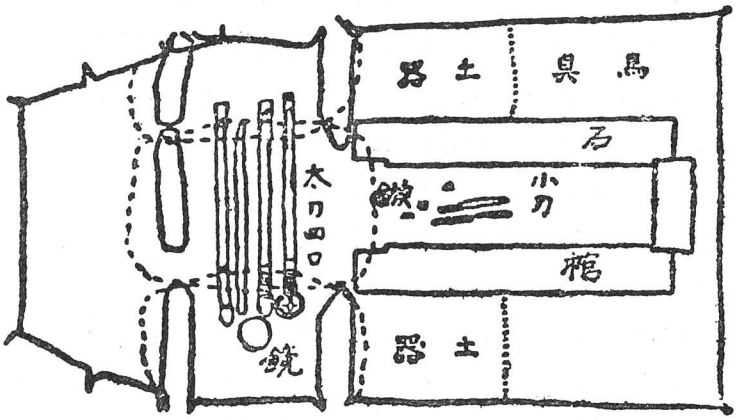
1.　石室内遺物出土状況の復元

石室内に副葬されていた遺物のほとんどは大正4年の発掘の際取り出されたと考えられ，昭和45年度の調査で発見されたのは腐蝕した鉄鏃，弓飾金具，雲珠片などで，これらは玄室最奥部南側隅に設けられた約20×40 cm，深さ約30 cmのポケット状の穴から出土した。

大正4年の発掘の際の遺物の出土状況については，巻末に掲載されている梅原報告によってその概要を知ることができる。この報告は，岡田山1号墳が，伊藤萬之助氏によって，大正4年4月12日に発掘されてから2年4か月後の大正6年8月の調査によるものであるが，調査の際伊藤氏は「発見当初の遺物の状況を写せる略図を提供して更に実地に就いての説明」をしたというもので，「その概要を髣髴するを得たり」とあり，細部についての不正確な点はあるにしても，概略については誤りないものと思われる。報告書によるとその状況は

次のとおりである。（梅原報告96Pの第3図岡田山古墳内遺物埋葬状態図参照）

まず，家形石棺前方の箱式棺様施設の中には4口の大刀が，柄部を南にして主軸方向に平行に並べて置かれていた。第19図をみると，環頭大刀が最も奥に置かれていたと思われる。そして大刀類の柄部に近い南側に内行花文鏡が置かれていた。



第19図　石室内遺物出土位置（『中央史壇』第7巻5・6号より）

家形石棺内部には，刀子と鉄鏃があり，また石棺西端の側石がとりのぞかれて家形石棺と箱式棺様施設とは通じているが，石棺内部から箱式棺様施設にかけて金銅丸玉が散布していた。

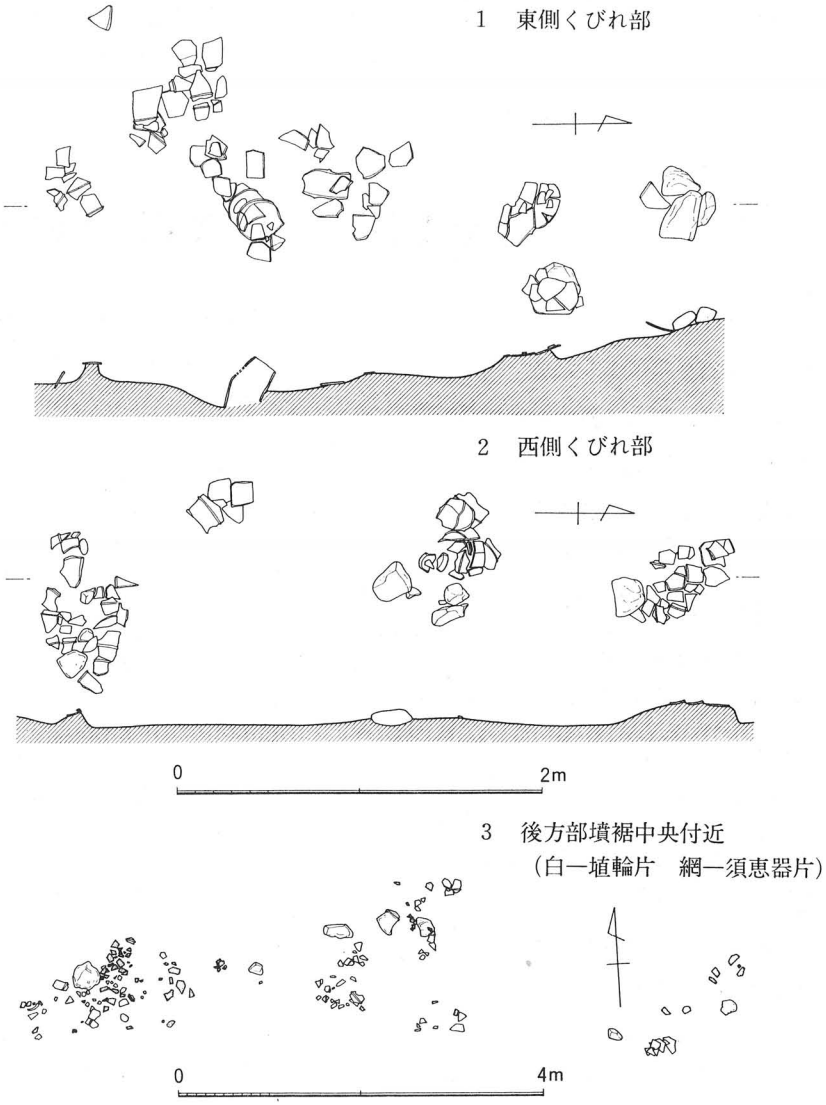
石棺長辺外側の前後には，石室側壁との間に仕切石が設けられていて，一つの区画がつくられているが，その双方の区画の前側部分（西側）には須恵器類があり，北側区画の須恵器に隣り合う部分（東側）には馬具類が一括して置かれていたという。

2個の金環については，棺内出土と推定されている。

（蓮岡法暲）

2.　墳丘上遺物出土状況

岡田山1号墳の墳丘上からは多数の円筒埴輪片と子持壺片が出土した。しかし，上段の封土の流出によってどの外部遺物も押し倒されており，原位置を留めるものは全く遺存してはいなかった。しかしその出土状況から，およその原位置の推測が可能な



第20図　墳丘上遺物（埴輪・須恵器）出土状況実測図

ものも相当数あり，それらはいずれも下段上面端と後方部後方墳麓に置かれていたものと思われ，この古墳の外部遺物の在り方を示しているといえよう。下段上面の円筒埴輪は後方部の周囲数カ所に2本づつ並べられていたもののようであり，また両側のくびれ部にはそれぞれ6～7本づつ集中的に置かれていたもののようであるが，前方部の周囲からは出土した破片数が微量であって，ここには，置かれていたとしてもきわめて少数であったろうと推測され，円筒埴輪の並べ方にも前方部軽視の傾向が現われているとみることができる。一方，後方部の後側墳麓中央附近にはかなり多数の円筒埴輪が置かれていたもののようであるが，ここでは円筒埴輪群に混って数個の子持壺も並べられていたものと思われる。

前方部の前面に設けられているテラス状の造り出し部の意味については不明という外はないが，ただ前方部正面墳麓中央の地点から，極細に砕けているので，器形の具体的特徴などの細部については把え難いものの，竈の上に土師器甕が載っていたものがそのまま押しつぶされた状態で出土しており，さらにその周辺からは灰が検出されていて，この位置で竈の下に火を焚くような何らかの行事が行われたであろうことを示している。このことから，このテラス状の造り出し部は埋葬儀礼としての何らかの祭場に用いられたのではないかとの想定に導かれるのである。なお，この造り出し上面の西南端に近い地点からは箱式石棺1基が出土している。

（門脇俊彦）

第5節　1号墳出土遺物

大正4年（1915）4月12日に玄室内から出土した遺物の品目は，当時の新聞記事（大正4年4月15日付『山陰新聞』）や，2年後に記録された梅原報文[1]によって大略を知ることができる。遺物発見後，70数年が経過しているため若干紛失したものもあるが，大半はほぼ良好な状態で保存されている。ただし，出土品の細かなリストについては現存する遺物と山陰新聞，梅原報文，島根県史[2]（野津報文），山本報文等[3]との間に若干の相違がみられる（第2表）。ここでは現存品の観察を中心にして，紛失し

第2表　1号墳石室内出土遺物一覧表

	山陰新聞	梅原報文	野津報文	山本報文	現存品
武器					
大刀	2	4	4	3	3
刀子		1（小刀残欠数口分）	剣折片18	3	3
鉄鏃	数百	一括	多数		
鏡鑑					
内行花文鏡	1	1	1	1	1
装身具					
金銅製丸玉	20	18	19	16	16
耳環		2	2	2（銀環）	2
馬具					
轡・鏡板	2	1	1	1対	1対
鞍		1具分	大小 5	1個体分	1個体分
雲珠	1	}6	4（大1 小3）	2	2
辻金具		各種金具若干		4	4
鉄環			2	2	2
鈴	2	3	2	7	6 ＊
須恵器					
壺	1？	1	1	1	1
瑞		1	1	1	1
高坏		1	1	1（現存せず）	
提瓶		2	2	1（現存せず）	
横瓶		残欠 1			
壺残欠			1		
椀破片			2		

＊　現存品としてこのほかに鈴残欠1個があるが，1号墳出土品かどうか確定できなかったため本報告では除外している。

たものについてはこれまでの各報文に掲載された写真や図をもとに若干の補足を加えながら説明していくことにする。

昭和45年度に実施された発掘調査の際には下記のものが出土している。

石室内

鉄鏃

弓飾金具

馬具（雲珠の脚片，金銅製鋲頭）

墳丘上及び墳裾周辺

須恵器（子持壺，子壺付蓋，壺，甕，蓋坏ほか）

円筒埴輪

土師器（甕）

竈

なお，このうち雲珠脚片については大正4年出土の雲珠と接合することができたが，鋲頭は接合できなかった。墳丘出土遺物のうち土師器甕，竈，須恵器坏類などのなかには1号墳の築造と直接かかわりをもたない遺物が含まれている可能性もある。（松本岩雄）

註(1) 梅原末治「出雲国岡田山古墳調査報告」『中央史壇』第7巻5・6号，国史講習会，1923年11月。

(2) 野津左馬之助「八束郡大庭村大字大草岡田山古墳」『島根県史』第4巻，島根県，1924年。

(3) 山本清「古墳」『島根県文化財調査報告書』第5集，島根県教育委員会，1968年。

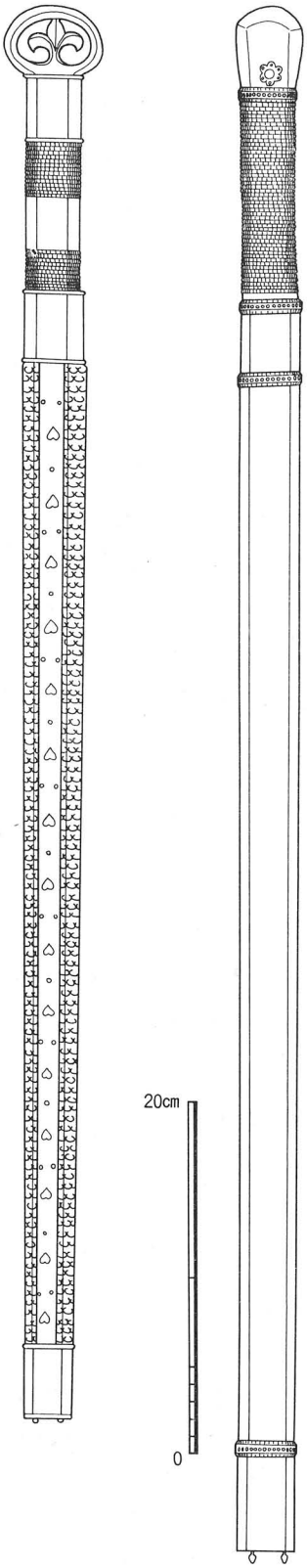
1. 武　　器

金銅装三葉環頭大刀（第21図，図版8・46-1・51-1・52-1・53・1）　柄頭の環内に三葉形の飾りを施した，いわゆる呑口式の環頭大刀である。鞘部の遺存状態は良好であるが，柄間の約半分が欠失しており，柄頭と柄間の部分が分離してしまっている。したがって大刀の全長については不明である。ただし，柄間は金銅板と銀線を交互に巻いたもので，この種のものは栃木・天王塚古墳[(1)]，京都・岡1号墳[(2)]などに類例がみられることから，それらを参考にして復元すると，全長は約78.5cmとなる。

柄頭は金銅製で，長さ6.1cm，環の長径5.5cmを測る。環は楕円形（内径指数[(3)]1.61）を呈し，無文である。環の中心飾りは環体と一体に同鋳されたもので，いわゆる共作りと称されるものである。環の断面は五角形を呈し，幅7mm，厚さ9mmを測る。環足は幅2.2～1.9cm，長さ2.1cm，厚さ4～3mmを測り，ほぼ中央部に径約2mmの目釘孔がある。環足の長さが短いので，柄木のなかで茎と分離するのであろう。環内の三葉形の飾りは表現が立体的で，中心の芯と左右の葉とがはっきりと区別されている。

柄間は約半分を欠失しているが，金銅板と銀線を交互に巻いたものである。断面は八角形を呈しているが，佩表と佩裏は対称形ではない。柄頭を固定する筒金具は失われているため不明であるが，栃木・天王塚古墳例，京都・岡1号墳例などをもとに復元すると柄間は長さ11.6cmあまりとなる。柄間に巻かれた金銅板は厚さ1mmの板で，長さは3cmある。無文で，長径3.1cm，短径1.6cmを測る。銀線は幅1.4mmあまりの断面蒲鉾形を呈するもので，表面に刻目があらわれる。銀線は長さ2.7cmにわたって巻かれており，その間に19条みられる。

鎺は無文の金銅製で，茎と柄の木質部分をつつんでいる。断面は八角形を呈し，長径3.1cm，短径1.6cm，長さ3cmを測る。



第21図　金銅装三葉環頭大刀・銀金銅装円頭大刀復元模式図

鞘の部分は全長63.2cmあり，鞘口金具と鞘尻金具がついている。鞘口金具は，断面八角形を呈する長さ3.9cmの金銅製筒形金具を用いている。無文で，長径3.4cm，短径1.8cmを測る。鞘口金具の端部には幅2mmの断面蒲鉾形を呈する細い突帯をつくる。鞘は全体を銀板でつつみ，その合わせ目は佩表側にくるようになっており，合わせ目の部分を鞘飾板で飾る。銀板にはC字文が打ち出されている。C字文は現状では相当見えにくくなっているが，長さ7mm，幅3mmあまりのもので，穴沢・馬目の分類[4]に従うとB類に属するものである。鞘飾板は幅1.4～1.1cm，厚さ1mmあり，猪目形の透彫り文が約3.5cmごとに入れられている。頭部が円形を呈する小さな釘で鞘木に打ち込まれている。この種の猪目形透彫り文の鞘飾板を有する大刀は，千葉・山王山古墳，静岡[5]・宇洞ヶ谷横穴など[8]に数例ある。鞘尻金具は，金銅製で長径2.8cm，短径1.6cm，長さ4cmある。無文で，端部には幅2mmの断面蒲鉾形の細い突帯をつくる。鞘尻金具の小口部には厚さ3mmの鹿角をあてて蟹目釘を2本打ち込んでとめている。蟹目釘の頭は球形を呈す。X線写真によると釘の長さは2.8cm程度と思われる。なお，刀身が鞘内に必要以上に押し込まれた結果，切先が棟側の蟹目釘の先端と接する形となっている（図版77-2）。

刀身はX線写真によると幅3cmあまりのもので，カマス切先を有するものと思われる。棟は平棟で厚さ約8mmであり，刀身の断面は二等辺三角形を呈する。関は両関と思われ，茎は長さ11cmで，茎尻はいわゆる栗尻形を呈す。目釘穴と思われる円形の形跡が茎尻から4.5cmの位置に1箇所みとめられる。

銀金銅装円頭大刀（第21図，図版8・51～53）　いわゆる呑口式の円頭大刀である。残念なことに柄頭と鞘尻部が失われているが，発掘当初はほぼ全体が遺存しており，京都大学所蔵の写真（図版46-1）や梅原報告[7]をもとに大略全体の様子をうかがうことができる。それによると全長は87cmあまりあったものと推測される。

円頭は2枚の匙形に打出した銀板をあわせ，その継目を文様帯で飾ったものある。柄間寄りの長径約3.2cm，短径約1.6cm，先端部の長径約3.8cm，短径約2cmとなっており，先端部がやや大きくなっている。柄間寄りのところに径約6mmの鵐目孔があり，そのまわりは六弁の花文で飾られている。円頭側面の継目に施された文様帯は，幅約7mmの金銅板と思われるもので，中央に径2mmの環状突線，その両側に幅1mm弱の突線を配し，一番外側に刻目を入れている。

柄頭部の責金具は，円頭側面の継目に用いられた文様帯と全く同様なものである。

柄間は長さ約10.8cmあり，断面は八角形を呈する。長径3.2cm，

短径 1.6 cm あり，全面にわたって銀線が巻かれている。銀線は幅約 1.6 mm の断面蒲鉾形を呈し，刻目が施されている。

鏃はX線写真によると長さ 3.5 cm あまりのものと思われ（図版77-2），露出している部分の状態をみると鍍金は行なわれていないようである。

鞘口金具は，断面八角形を呈する金銅製の筒形金具を用いており，両端に責金具がつけられている。筒形金具の部分は無文で，長さ 3.3 cm，長径 3.4cm，短径 1.8 cm ある。両端につけられた責金具は，柄頭のものと同様な文様が用いられている。

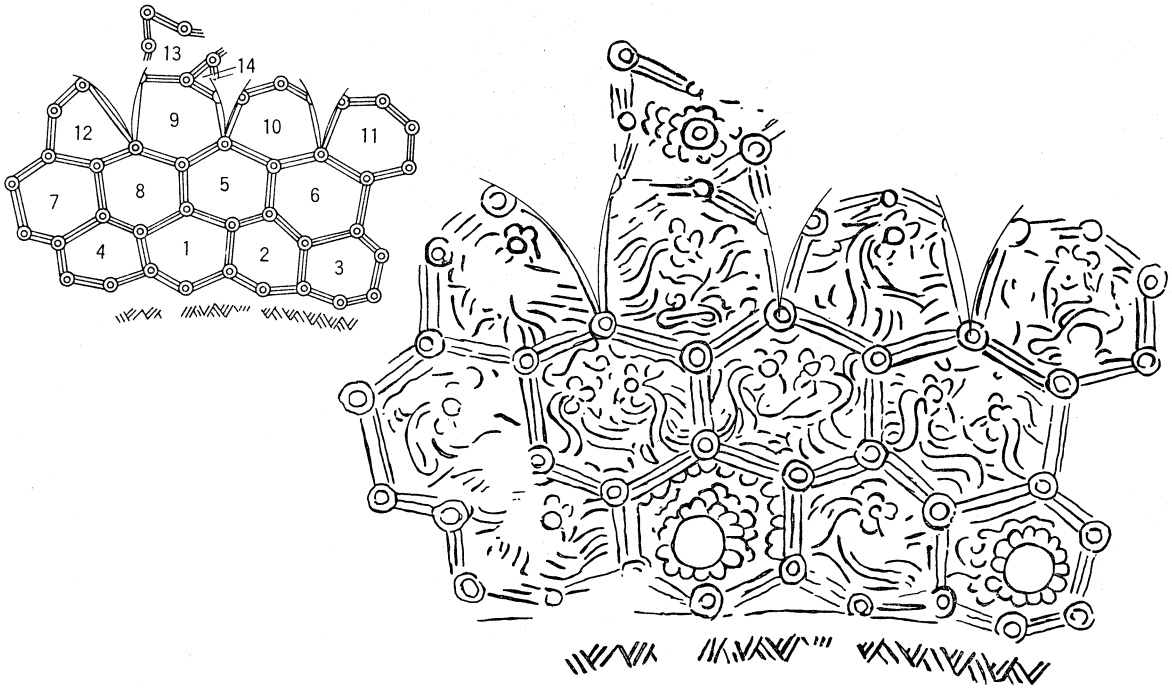
鞘には銀板とか飾板といったものはつけられていない。断面は八角形を呈し，木質の上に漆が塗られていたものと思われる（第1部，第7章，第7節）。

梅原報文によれば鞘尻金具は，やはり断面八角形を呈する金銅製の筒金具が用いられていたようである。責金具は鞘口金具等と同様のものである。鞘尻金具の先端には2本の蟹目釘が打ち込まれている。

刀身はX線写真によると幅 3.2 cm あまりのものと考えられる。関部は不明瞭ではあるが両関と思われ，茎は幅 2.2 cm，厚さ 6～4 mm あまりのものである。

鉄地銀象嵌円頭大刀（「額田部臣」銘大刀）（巻首図版1・2，図版7・48～52）　刀身の約半分を失っており，残存全長は約 52 cm である。大正4年に発見された際には切先まで完全に遺存しており，『島根県史[8]』の写真（図版45-1）には全体が写し出されている。『島根県史』では全長約 82 cm となっており，刀身部が約 30 cm 欠失したことがわかる。

柄頭は鉄製（鍛造か鋳造かは不明）で，銀象嵌が施されている。表裏2面の周縁には面取りがあり，断面が八角形を呈する。長さは 8 cm。長径は柄間寄り 3.8 cm，頂部付近 5 cm，短径は柄間寄り 2.2 cm，頂部付近 3.2 cm となっており，頂部付近の方が相当ふくらむ形態である。象嵌文様は，亀甲繋鳳凰文と称されるものである。亀甲繋文は基本的に六角形の各頂点にあたるところを二重の円で表現し，その頂点を結ぶ各辺を3本の直線で描いている。この象嵌文様は円頭の柄間寄りの方から円頭頂部に向けて順次描かれたものと考えられる。というのは亀甲繋文の下段（柄間に最も近い部分），中段は比較的整った亀甲形をなしているが，上段に



第22図　亀甲繋鳳凰文展開図・区割図

なると形がかなり崩れ，最終的に頂部で亀甲繋文を処理しようとして1箇所だけ三角形で繋いでいるところがあるからである。円頭柄頭の文様はこうして描かれた亀甲繋文13個と三角形繋文1個の都合14区画に割り付けされている。今仮りにこの14区画を下段佩表から順次番号を付して区画ごとに若干の説明を加えておくことにしよう（第22・23図）。

1区　佩表の柄間寄り（下段）にあたり，一辺約1.6cmの整った六角形を呈する。区画内のやや下寄りに径8mmあまりの鵜目孔があり，その周囲を花形文で飾る。

2区　下段の棟方にあたる位置にあり，鳳凰が描かれている。亀甲文で区画された面積が狭いためか右向きの鳳凰が1羽のみしか描かれていないようである。鳳凰の形はかなり便化しているが一応判別できる。

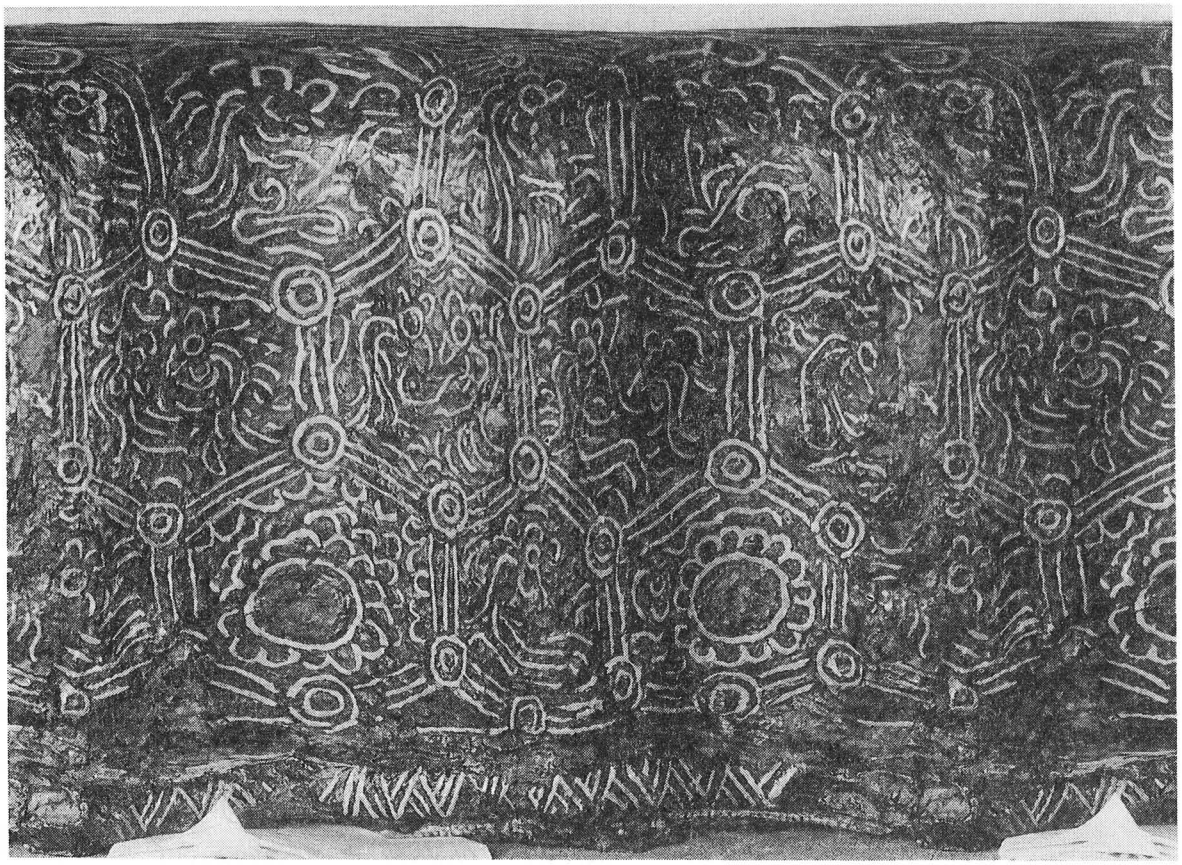
3区　佩裏の柄間寄り（下段）で，ちょうど1区の裏面にあたる。1区と同様に中央に径9mmあまりの鵜目孔があり，その周囲に花形文が描かれている。花形文の花弁は14箇ある。花形文はしっかりした文様であるがその周囲は曖昧な表現になっている。

4区　下段の刃方にあたる位置に設けられた区画。向かい合った2羽の鳳凰が描かれているものと思われるが，左側の鳳凰の表現がきわめて曖昧で，毛状の文様となっている。

5区　中段の佩表から棟方にかけて設けられた区画。この大刀のなかでは最も整った形の鳳凰が2羽向かい合った状態で表現されている。

6区　中段の棟方から佩裏にかけて設けられた区画。やはり比較的整った形の鳳凰が2羽向かい合った状態で描かれている。

7区　中段の佩裏から刃方にかけて設けられた区画。全体に区画内の文様は不鮮明であるが，右向きの鳳凰



第23図　亀甲繋鳳凰文展開写真（小川忠博氏撮影）

1羽は容易にわかる。左向きのの鳳凰も表現しようとしたものと思われるが，明確でない。

8区　中段の刃方から佩表にかけて設けられた区画。2羽の鳳凰が向かい合った状態で表現されている。亀甲文・鳳凰文ともに比較的整った形を呈している。

9区　上段の佩表に設けられた区画。区画内の文様は，2羽の向かい合った鳳凰を描こうとしたものと思われるが，左向きの鳳凰は毛状の表現となっており，不明瞭である。

10区　上段の棟方に設けられた区画。9区と同じく，向かい合った2羽の鳳凰を表現しようとしたものと思われるが，象嵌の欠落した部分などもあり，全体の文様は不明瞭である。

11区　上段の佩裏に設けられた区画。区画内の文様は，向き合った2羽の鳳凰を表現しようとしたものであるが，全体の文様は不明瞭である。

12区　上段の刃方に設けられた区画。向かい合った2羽の鳳凰を表現しようとしたものと思われるが，象嵌がかなり欠落しているようであり，全体の文様は不明瞭となっている。ただし，左向きの鳳凰はかろうじてわかる。

13区　円頭の頂部に設けられた区画。正しい亀甲形を示さず，不整形な区画となっている。区画内の文様は中央に二重の円を描き，そのまわりに花弁を表現する花形文である。

14区　9区・10区・13区の間にある三角形の区画。下段の方から順次亀甲文を描いていく過程で最終的に生じてしまった三角形の空間であり，無文。

柄頭と柄間の境に1個の責金具がある。責金具は断面蒲鉾形で，幅5mmある。鉄製で，表面には複合鋸歯文状の銀象嵌が施されている。

柄間は，棟方が直線なのに対して刃方が大きく内湾する形態をとり，銀線が巻かれている。断面は全体としては倒卵形を示すが，刃方の方がかなり尖っている。長さは約14.5cmある。長径は柄頭寄りの最大部で3.4cm，柄間ほぼ中央の最小部で2.6cm，鍔寄りの最大部で4cmを測る。短径は柄頭寄りの最大部で2.3cm，柄間ほぼ中央の最小部で1.7cm，鍔寄りの最大部で3.3cmを測る。柄は柄木を一木から彫り出し，茎を棟方から装着したいわゆる「茎落し込み法」によってつくられている。柄間を棟方あるいは刃方からみると鍔から6.5～7cmのところにわずかなふくらみがみられ，その部分に目釘のあることがわかる。これはX線写真によっても明瞭に確認できる。なお，X線写真によると，この目釘の両側それぞれ約5.4cm離れたところにも径約5mmの目釘穴を確認することができる（図版80・81）。柄間に巻かれた銀線は幅約2mmの断面V字形のもので，表面に刻目が入っている。

柄元には縁幅があまり広くない，いわゆる喰出し鍔がつけられている。鍔の形態は倒卵形を呈するものと思われるが，現在約3分の1しか遺存していない。復元すれば，長径6.8cm，短径5.7cmあまりになるものと思われ，厚さは5mmある。鉄製で全面に銀象嵌が施されているが透孔はない。象嵌文様は，柄間側，刀身側ともに3条の線により2帯の文様帯をつくり，その中に「C」字形の文様をほぼ等間隔に入れている。鍔の側面は柄頭の責金具と同様な複合鋸歯文状の文様を入れている。

鞘は，一部の木質と鞘口金具のみが遺存している状態で，全体の形状を知ることができない。鞘口金具は銀板製である。鍔寄りのところから長さ2cmあまりしか遺存していないが，その下縁（切先寄り）らしい位置に責金具の痕跡とみられるくぼみがあり，もともと長さは約4.5cmあったものと考えられる。長径4cm，短径3.2cmを測る。無文で，両端部は銅線を芯として幅3mmの断面蒲鉾形の細い突帯をつくる。

鍔と刀身の境に鎹をはめている。これは現在鞘口金具があるために見ることができないが，X線写真によって知ることができる。X線写真によると長さ約1.8cm，長径約3.8cmのもので，象嵌文様の施されているこ

とがわかる（図版80・81）。象嵌文様は刀身に直角方向に走る3本の線によって2帯の文様帯を画し，その中にそれぞれ17個の「ɔ」形文をめぐらしている。象嵌が施されていることからすれば，鋸は鉄製の可能性が高い。

刀身は切先側の約半分を欠失しており，現存全長約28cmである。棟は平棟で，断面は二等辺三角形を呈す。棟幅8mm，刀身幅3.3cmあまりある。X線写真により棟関はないが刃関があるものと推定される。刀身の佩表には銘文を銀象嵌している。銘文は切先部から柄の方向に向かって刀身の棟寄りの部分にやや蛇行しながら施されている。線画の欠落した部分があり，判読しにくいが，確定された釈文は次のとおりである。

各田ア臣□□□素□大利□

刀子（図版10-1・2・3，図版46-2，図版54-3）　岡田山1号墳から出土した刀子の正確な数については不明である。すなわち，梅原報文では「刀子1，小刀数口分」，『島根県史』では「剣折片18」となっているからである。現存するものは山本報文[9]以来，「刀子3」となっている。現存する3点のうち2点は明らかに刀子と認められるが，他の1点については鉋である可能性が高い。

図版10-1は鹿角装の刀子である。切先部と茎尻部が欠損しており，残存長6.7cmを測る。刀身は刃部にかなりの研ぎべりが認められる。残存長3.5cm，元幅1.3cmある。刃関，棟関があり，茎幅は約7mm厚さ2mmである。柄は鹿角を使用しており，柄元部に鹿角がわずかに遺存している。柄元部の鹿角の断面は倒卵形を呈し，長径1.4cm，短径1.1cmを測る。

図版10-2は1と同様鹿角装の刀子である。切先部と柄頭部が欠失しており，残存長は6.3cmを測る。刀身残存長2.6cm。元幅1cmである。鹿角製の柄が遺存しているため不明であるが鹿角柄の背と棟との間および腹と刃筋に落差がないことから棟関と刃関を有することがわかる。茎は残存長さ3.6cm，幅5mm，厚さ3mm。鹿角製の柄の断面は概ね倒卵形を呈するが，側面にかすかな稜線があるようである。柄元の長径1cm，短径1cmを測る。

図版10-3は茎部分のみの残片である。茎部の外面には鹿角と思われるものが付着している。残存長7.5cm。断面は長方形を呈し，細い方は4×6mm，太い方は6×10mmある。茎部断面の形状や大きさなどからすると刀子とするよりも鉋の茎とみた方が良いのではないかと思われる。鉋の茎を鹿角に差し込んだ例は少ないものと思われるが，岡田山1号墳から南方向約5kmの松廻横穴（八束郡八雲村）では鹿角装鉋の良好な資料が出土している[10]。

以上は現存する刀子及び刀子と称される鉄片について記してきたが，これ以外に3口があったことが知られる。すなわち梅原が来県した折に撮影したとみられる写真（原板京都大学蔵）中に認められるもので，現存はしないものの法量や刀身形態を知ることができるので若干記しておくことにしたい。〔付記〕

写真（図版46-2）にある刀子はいずれも完形に近いものである。上段にあるもの(a)は全長約15cm，刀身長約9cmを測る。刃関・棟関が明瞭に認められ，元幅約1.6cm，茎幅1cmとなっている。茎尻に白く見えるのは鹿角柄の一部が残存しているものと思われる。

中段にある刀子(b)は関の部分から折れ茎部と刀身部分と分れていたものを接合した形となっている。両者が間違いなく同一個体であるとすれば全長約17.7cm，刀身長約10cmとなる。関部の形態は銹によって詳細は不明となっているが，元幅は約2cmを測る。

下段右側のもの(c)は全長約12cm，刀身長5.7cmを測る。刀身は刃部にかなりの研ぎべりが認められ，元幅は約1.6cmとなっている。この刀子は中央，茎よりに長さ約2cmにわたって，幅約2mmを測る繊維が巻きつけられている。これが発掘後に行なわれたものでないことは明らかで，鹿角や木を柄の材とする以外の

一手段とみられる。

なお，この写真中のd・eは現存する刀子とみられる。形態・大きさなどからdは図版10-2，eは図版10-1として説明を加えたものと考えられる。

鉄鏃（図版9・55）　岡田山1号墳石室内から出土した鉄鏃は大正4年出土のものと，今回ここに報告する昭和45年度調査時に得られたものとがある。前者は当時の新聞報道によればその量は数百，梅原報文によれば一括，『島根県史』には多数などと記されてきたものである。その後これらの鉄鏃は散逸したため詳細は不明のままである。

後者は玄室内奥部南隅に穿たれた約20×40 cm，深さ約30 cmを測るポケット状の穴から出土したものである。

これらは出土時すでにかなり腐蝕が進んでいたこととともに，その後長期にわたって保存処理もしないままであったため全形をとどめるものはない状態となっている。

鉄鏃は小片となっているが本数は鋒先の点数から34本以上と推測される。

いずれも篦被の長い鏃で，本来は全長15 cm前後のものであったと考えられ，鋒先の形態から3種に大別することができる。

Ⅰ類（図版9，1～18）鏃身は長さ1.7～2.7 cm，最大幅1～1.2 cmを測り，大略二等辺三角形を呈するものである。両側に刃及び腸抉をもち，鏃身横断面は片面が丸みをおび，一方の面が平担となるいわゆる片丸造りとなっている。

Ⅱ類（図版9，19～30）　鏃身は長さ2.5～3.5 cm，最大幅1 cmを測り柳葉状を呈するもので，腸抉は認められない。鏃身横断面はⅠ類と同様である。

Ⅲ類（図版9，31～34）　鏃身は長さ4 cm，幅0.8 cmを測り，大略長方形を呈するもので，片側にのみ刃と腸抉をもつ形となっている。鏃身横断面は二等辺三角形となっている。

以上記した鏃身の下方は細長い篦柄部と茎部からなり，両者の境には棘状突起が認められる。

篦被部は断面方形を呈し，幅0.6 cm，厚さ0.3 cm前後となっており，長さは(1)を参考にすれば7 cm以上とすることができよう。

茎部は棘状突起を境にして四角錐となり，最も長いもの(58)で残存長6.4 cmを測る。茎部には植物繊維を螺旋状に巻きつけ矢柄に挿入した痕跡が認められる（39.50，54～58）。

さらに矢柄に茎部を挿入した後，その上を樺皮で巻き，両者を固定している（51.52）。

矢柄の断面はほぼ正円形で，径0.8 cmとなっている。

弓飾金具（図版9・55-3）昭和45年度調査時に鉄鏃とともに出土した鉄器[11]である。長さ1.7～2.2 cm，幅0.5 cm，厚さ0.5 cmを測る断面方形の筒に鉄製小棒を挿入するもので，その両端は筒の両端からマッチ棒の頭状に球形をなして突出している。

図版9-3・5を詳細に観察すると筒の両端は6筋の浅い切り込みを入れ，6枚の花弁を作り出していることが知られる。また筒の外面には木質が認められる。それは四面のうち相対する2面に木口の導管が，他の相対する2面には木理が圧着している。さらにその木質は花弁と花弁に狭まれた部分に限定されたことから，本金具は木製弓の木理に対して直交方向に貫通した孔に挿入され，花弁及び，球形を呈す鉄製小棒の両端部分は外に出ていたことをよく示している。

両花弁の間隔は長いもので2.4 cm，短いもので2 cmを測り一定ではない。それは弓本体の部分的な太さの違いと，金具がとり付けられた位置との関係を示すものと解される。　（三宅博士・松本岩雄）

註(1)　小林行雄編『世界考古学大系』第3巻，平凡社，1959年11月，グラビア66。

(2)　樋口隆康「網野岡の三古墳」『京都府文化財調査報告』第22冊，1961年3月。

(3)　町田章「環頭大刀二三事」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会，1986年10月。

(4)　穴沢咏光・馬目順一「日本・朝鮮における鱗状紋装飾の大刀」『物質文化』33，1979年。

(5)　小出義治編『上総山王山古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会，1980年3月。

(6)　向坂鋼二『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』1971年。

(7)　梅原末治「出雲国岡田山古墳調査報告」『中央史壇』第7巻5・6号，国史講習会，1923年11月。

(8)　野津左馬之助「八束郡大庭村大字大草岡田山古墳」『島根県史』第4巻，島根県，1924年。

(9)　山本清「古墳」『島根県文化財調査報告書』第5集，島根県教育委員会，1968年。

(10)　島根県八束郡八雲村文化財保護協会『八雲村の遺跡――八雲村埋蔵文化財分布調査報告』1978年3月。

(11)　この金具については，近年まで用途不明とされていたが，馬目順一「中田装飾横穴出土の鉄製両頭金具の本来的形態」『平地学同好会会報(特別号)』1979年に「弓の拷の一部を担当した遺品ではなかったか」と推定されている。財団法人いわき市教育文化事業団『発掘ニュース』第13号，1986年によれば，いわき市小川町上平字小申田小申田横穴群中の南18号横穴から，木製弓に装着した形で出土している。

〔付　記〕

校正中に，小野山節氏から京都大学所蔵の刀子写真について御教示いただいた。京都大学蔵の写真キャプションには，本書図版46-2に掲載したa・bは「岡田山古墳」，c・d・eは「大草字三崎古墳」と記されているということである。「大草字三崎古墳」は松江市大草町の御崎山古墳であろうか。したがって，現存するd・eの刀子は岡田山古墳以外から出土した可能性も考慮される。

2.　鏡　　鑑

直径10.48cmの長宜子孫内行花文鏡である。縁の一部に欠損があるが，全体の保存状態は比較的良好で，色調は暗緑色を呈し，光沢がある。小型ではあるが，重厚な趣をそなえた整った品である（版図14・54)。

鈕座はいわゆる蝙蝠座と称されるもので，その間に右まわりに「長宜子孫」の銘文を配している。鈕は径16.8mm，高さ7mmの円形のもので，径5.7×3.4mmの紐通孔があいている。こうもり座鈕と銘文の外側には内行八花文帯がめぐり，その外は幅5.9mm，深さ1mmの無文の凹帯を経て，無文の平縁となっている。縁の厚さは2.7mmであるが，内区の最も薄い部分では1mmあまりしかない。

この種の鏡は，後漢代の作にかかる舶載鏡とされるものである。樋口隆康氏の分類によれば，内行花文鏡BC Ⅰ式になる。[(1)] この型式の鏡は国内では，福岡・前田山遺跡，愛媛・東宮山古墳などで出土している。また，北朝鮮大同江面出土鏡や河南省洛陽焼溝147号墓出土鏡など半島・大陸にもかなりの類例がある。

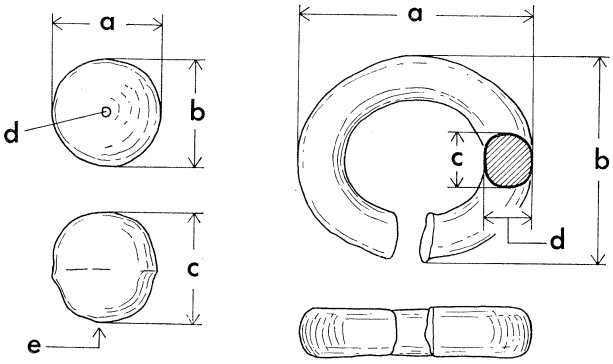
（三宅博士・松本岩雄）

註(1)　樋口隆康『古鏡』新潮社，1979年10月。

3.　装　　身　　具

金銅製丸玉（図版10・56）　現存するものは16個である。大正4年4月15日付山陰新聞では20個，梅原報文では18個，『島根県史』（野津報文）では19個となっており，もともと何個出土したのか，正確な数については不明である。

現存するもののうちNo. 9としたものは半壊しているが，その他のものはほぼ原形を留めている。形状は球形を呈し，上下に紐通孔があり，内部は空洞になっている。半球形のサラダボール状のものを上下合わせて



丸玉計測位置　　金環計測位置

第3表　岡田山1号墳出土丸玉計測値表（単位：mm）

計測位置 遺物番号	a	b	c	d	e	備　考
1	13.3	13.0	13.0	0.7	1.4	
2	12.9	12.9	13.3	1.3	1.1	
3	13.1	13.0	13.7	1.7	1.7	保存状態きわめて良好
4	13.2	13.3	13.7	3.2	1.3	
5	13.2	13.1	13.4	1.2	1.2	
6	13.1	13.3	13.7	1.7	1.6	
7	12.8	12.9	13.5	1.7	1.0	保存状態きわめて良好
8	13.3	12.9	14.2	1.3	1.5	
9	12.8	—	13.4	(1.8)	—	半壊
10	13.1	13.2	13.1	1.5	1.5	保存状態良好
11	12.9	13.2	13.3	1.0	0.8	〃
12	13.2	13.0	13.4	1.3	1.8	〃
13	13.2	13.2	13.8	1.4	1.6	
14	12.8	12.8	13.1	1.4	1.5	保存状態良好
15	13.1	13.2	13.6	1.1	1.0	〃
16	12.6	13.1	13.4	2.1	1.2	

第4表　岡田山1号墳出土金環計測値表（単位：mm）

計測位置 遺物番号	a	b	c	d	備　考
1	31.6	27.3	6.4	6.1	保存状態良好　金環
2	31.0	27.5	6.3	6.2	〃　〃

製作したものであり，胴中央部に接合の際のふくらみがみられるものや，わずかにずれを生じているものもある。

16個のそれぞれの大きさは第3表のとおりである。詳細にみると数値に多少のばらつきはみられるが，測点aの平均値が13.0mm，bの平均値が13.1mm，cの平均値が13.5mmとなり，径13mmあまりのほぼ同形・同大の球形の丸玉である。孔の径は保存状態の良好なNo.3・10・11・12・14・15の平均値をとると1.35mmになる。厚さは0.7mmできわめて薄い。

金環（図版10・54）　2個現存している。山陰新聞には記載がないが，梅原報文，『島根県史』ともに2個となっており，当初より2個出土していたものと考えられる。それぞれの計測値は第4表のとおりである。

図版10-1は3.16×2.73cmの銅環を芯として銀板を巻き，その後に渡金を施したもので保存状態は良好である（第Ⅰ部第7章第2節）。外面は部分的に黒色のしみが認められる他は真ちゅう色を呈す。

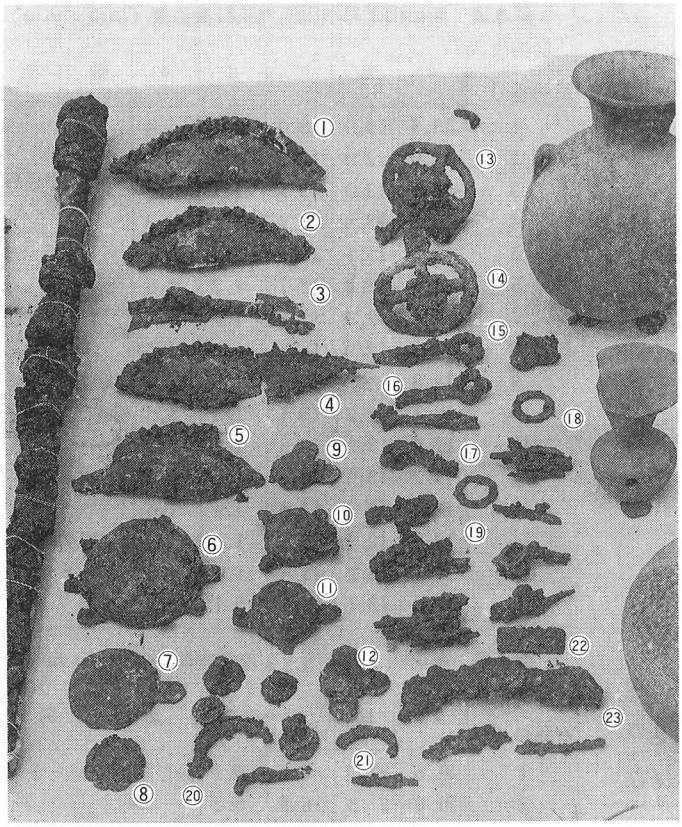
図版10-2は3.10×2.75cmの銅環を芯として銀板を巻き，その後に渡金を施したもので，図版10-1と同様なものである。全体に暗茶色を呈している。　（三宅博士・松本岩雄）

4.　馬　　具

現在，岡田山1号墳出土の馬具と認めることができるものは，次のとおりである。

- ◦鞍　金　具　　1背分
- ◦金銅鏡板付轡　　1　個
- ◦雲　　珠　　2　個
- ◦辻　金　具　　4　個
- ◦馬　　鈴　　6　個
- ◦環状繋絡金具　　1　対

これらの出土品は，馬鈴の個数に相違があるが，それ以外は全て梅原報告[1]の内容と合致する。梅原報告より刊行が一年遅れる野津報告[2]（調査年月は数年の隔りがある）では，銅鈴の他に「雲珠　大形1個小形3個」とあり，雲珠1個，辻金具1個が失われた如く記載されている。しかし同報告の附図には現存する総てのものが写っている（第24図―6・7・9・10・11・12）ことから単なる誤報であり，混入品などでないことを確認する



第24図　岡田山1号墳出土の馬具（『島根県史』1923より）

ことができる。

ここで少し今日まで個数の変動が続く馬鈴資料の検討をしたい。発掘を報じた大正4年（1915）4月15日付『山陰新聞』によれば，「鈴2個」と記述されている。[3] 大正6年（1917）調査の『梅原報告』には「銅鈴3個」，大正末期の野津報告では，「鈴貳個」とされている。岡田山古墳の保存問題が生じた昭和39年（1964）には，「鈴7個」[4]として今日におよんでいる。

山本報告の「鈴7個」の内1個については，以前解明したように，御崎山古墳出土と形状の等しい金銅製打物鈴であることから混入品と考えられる。[5] このことは，現在の御崎山古墳出土品は，昭和47年度の発掘調査の出土品のみに限られていて，『探雲記』[6]に記載された「鍍金鈴二三（高一寸五分位，中央周囲三寸三分）」や野津報告中の[7]「……4，銅製鈴壱個。5，其他金銅鈴の破片らしきもの数多。……」の消息は以後途切れ，戦後の文献には全く報告されていない。

山本報告[8]の付記によれば，岡田山古墳出土品の保管先である六所神社において，古天神古墳の金環と岡田山古墳の混同があったとされている。しかし，岡田山古墳より4ヶ月後の大正4年8月に発掘された古天神古墳の出土品[9]は梅原の調査時（大正6年）には既に東京国立博物館の蔵品になっており六所神社官司の談は成り立ちえない。六所神社宮司の語られた古天神古墳は，おそらく御崎山古墳を始めとする岡田山古墳周辺の古墳であり，これらから出土した遺物が氏子らによって奉納され混入していると考えられる。

このような管理下で御崎山古墳出土と同タイプ金銅鈴が混入したと考えられることに加えて，野津報告時においてすでに『探雲記』が記載していない銅鈴が御崎山古墳出土品に加わっていることは，6個の銅鈴の内3個は明らかに岡田山古墳出土のものであると認められる。そして，推測が許されれば，発掘時2個の鈴が，2年後の梅原調査の時，3個に増加していることを素直に受けとれば，当時なお石室北奥に遺物が残存していたものと考えられる（整備調査においても雲珠の脚片等が出土した）。鈴6個の内，明確でない3個は，県史刊行後石室に残存したものを地元の手により，何にらかの理由によって掘り出され六所神社に奉納されたと憶測したい。

この傍証には，前述した野津報告における御崎山古墳の銅鈴が，昭和47年度の発掘において1片の破片だに出土していない[10]ことから，御崎山古墳出土と考える可能性が極めて低いことがあげられる。以上のことから現時においては，他に有力な出土古墳が掲らないことから出所不明として扱うよりは，後述するよう同規格の同文様の鈴であることから6個の鈴は岡田山1号墳出土品と概ね認めたい。

前に掲げた品目以外に，県史附図40ノ1（第24図）によれば，轡のごときもの⑳㉑，長方形飾金具のような

もの㉒，鞍金具とおぼしきもの㉓など多数の出土品があったことを知ることができる。現在それらが散逸して実見できないことは「額田部臣」銘大刀の刀身が失われたことと共に惜まれる。

鞍金具（図版11・56）　鞍の本体である鞍橋，居木は，木製であったことから，古墳出土の通例どおり出土をみない。鞍橋の磯に鋲打ちした礎金具が前輪，後輪の2面の一背分が遺存している。鞍は，後輪においては礎金具に鞍座などが残っており，磯金具に装着するものである。前輪については該当金具が遺存していないが，他の例からして磯金具に取りつけず，鞍本体に固定するものであろう。

磯金具は，鉄地金銅張の眉形金具を同じく鉄地金銅張の縁金具で押え，これに金銅を被せた鉄鋲でもって鞍本体（鞍橋）に打ちつけ装着する構造をとる。

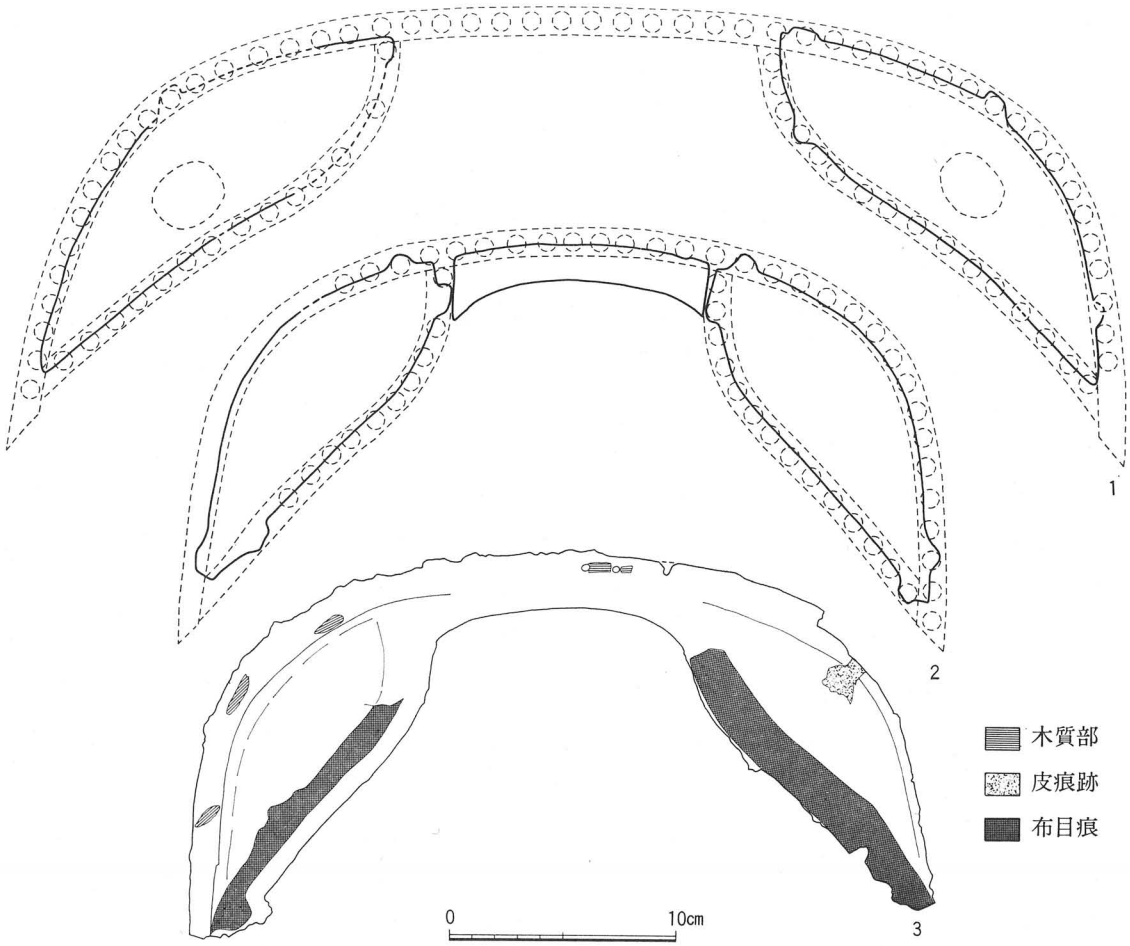
前輪の磯金具は，縁金具の一部を欠失しているが，各部の計測値は次のとおりである。

高さ 16.2 cm　　州浜形幅 11.3 cm　　馬狭み 34.1 cm

後輪は，州浜形の上を飾った，左右の眉形金具を繋ぐブリッジ状の金具を欠失しているので明確に測定はできない。

眉形金具の大きさは，前輪（左）全長 17.3 cm，最大幅 5.7 cm，後輪（左）全長 21.2 cm，最大幅 6.1 cm を測る。

この磯金具における眉形金具と鋲打ちとの関係は二通りがみられる。多くの鋲打ち法は，眉形金具を貫通させずその金具を外して縁金具から，鞍本体に直接打たれている。これに対し，眉金具の頭部（前・後輪），中



第25図　鞍金具眉形鉄地金及び前輪裏面図

央（後輪）・尾部（前輪）にはこぶ状の小さい造り出しが造られていて（第25図），この部分の鋲打ち法は，鋲脚をこの造り出し状の突起を貫通させたのち鞍橋に到達させる堅固なものである。前輪と後輪の造り出しの場所が相違するのは，後輪に鞍を固着することに起因している。

眉形金具に見られた造り出しを，州浜形金具の上縁に見ることはできない。

眉形金具の断面は，上縁金具の掛りを僅かに残して緩やかな弧を描く。そのカーブは飛行機の主翼断面曲線によく似ていて，上縁部分が高く，下縁へ低く流れる。このことは，これに打ちつける縁金具の位置に差があり高低関係が生じていた，すなわち垂直面上でなかったことを知ることができる。この差を磯金具の中央位置で上縁の底面を基準とし測定すると次のとおりである。

	上縁の鋲から下縁鋲間	上縁底からの高さ	勾配率角
前輪（左）	6.2 cm	1.4 cm	13°
後輪（右）	5.8 cm	2.8 cm	26°
〃　（左）	5.3 cm	2.7 cm	27°

面が狭いため測定誤差が大きくあると考えられるが大略上記のとおりである。

後輪の眉形金具には，鞍座が装着されている。現存する左後輪の座金具は長径 3.2 cm，短径 2.6 cm の楕円形で高さ 0.3 cm を測る。山本報告などによれば右後輪にも鞍が描かれていることから最近になって欠失したらしい。鞍座につく鉸具も，失われているがその基部が左右に遺存している。

前輪の裏側（第25図），鞍橋への装着面は，上縁では鋲間に木質を残している。中央部には一部銹が切れて，黄色の革銹があり革紐の介在していたことを示している。下縁は，木痕が見られず布地を帯状に観察できる。

縁金具は，幅 1.2 cm，厚さ 0.2 cm の幅広い型式のものである。打ちつける鋲も大形のもので，全長 1.9 cm 径 0.35 cm の鉄鋲で，鋲頭には径 0.9 cm，高さ 0.8 cm の金銅製のキャップをかぶせている。鉄芯と金銅キャップとの間は木質性のようなもので充塡し固着している。

鞍橋に装着する順は，∩型の上縁金具を打った後，ハ字状に下縁金具を留めたことが爪先の重りで知られる。鋲数が前輪の下縁には左右に各14個，後輪では16個となっており規格性があったともみることができる。

轡（図版12・57）　鉄地金銅張のハート形十字透文鏡板付轡が1個出土している。轡の機能主体である銜や引手は，現存しない。しかし，鏡板に残る一部断片や先述した『島根県史』附図（第24図）から通例のと変らないものであることを知ることができる。

銜は，鉄捧を加工した二連銜である。引手は，同様な鉄捧で先端を環状につくり斜に曲げた引手壺を備えている（第24図15・16・17　なお，4個とも引手かどうかは不明）。

鏡板は引手を馬肌側で連結する型式のもので，銜返しの楕円形の鐶を鏡板で固定し，その鐶に引手を連結する構造である。鏡板の外郭は，扁円形を呈しているが，下端に小さな突起をもつことからハート形（心葉形）を意識するものであることが知られる。内郭は，四角形の銜座を中央に十字に輻軸をもって配され外輪を支えている。左右とも立聞を失っているが，『島根県史』の附図（第24図13・14）から方形であったことが知られる。鏡板の大きさは，最大幅 9.9 cm，残存高 8.9 cm，立聞の幅は 2.4 cm，外縁の厚さ 0.9 cm，銜座は長辺 3.3 cm，短辺 3 cm，高さ 1.8 cm を測る。構造は，十文字に切り残した透の鉄地板の中央に方形の窓を設け，この窓へ楕円形の銜返し鐶を通し，その鐶にさらに幅 0.7 m の銜留（橋金）の小鉄板を通してその両端を鋲打ちして，銜と鏡板の鉄地板との連結を構成する。鏡板（鑣）の機能はこのわずか厚さ 0.3 cm の鉄地板によって担われている。この上に装飾と補強としての厚さ 0.5 cm の鉄地金銅張で十字透の文様板軸先を四方で鋲留めしている。銜返しの空間は，文様板の銜座の上に，アーモンド形の半球をもつ中空の方形板で蓋をする。そのキャッ

プは四隅を鋲留めしている。使用された鋲は，すべて鉄鋲であり，鋲頭は径 0.65 cm，高 0.3 cm を測る。外枠の金銅の上に平織の布痕が付着していることから，布に包んで副葬されたと推定される。

雲珠・辻金具（図版13・58）　雲珠と辻金具は，懸絡用紐幅の違い即ち脚の幅と伏鉢の形態から2組に分けることが出来るので組み合せごとに述べたい。

A組　使用した革紐が細いと考えられる小さい脚をもつ。伏鉢は，稜のない半球状を呈し腹部には凹線をもって段を繞らすことにより区別する。雲珠1個（図版13—1），辻金具2個（図版13—2・3）である。

雲珠の径 14.5 cm，伏鉢径 11.1 cm，高さ 7.3 cm，伏鉢の高さ 4.3 cm を測る。

辻金具の径 9.5 cm，伏鉢径 6.1 cm，高さ 2.7 cm を測定する。

伏鉢の腹部の下縁どりの段を除く段は雲珠で4段，辻金具は2段をかぞえる。

雲珠・辻金具とも，鉄地金銅張である。しかし，雲珠の上に戴く花形座と宝珠飾りは鉄地銀張をほどこしている。

雲珠の構造は，八弁の花文様をもつ上下2枚の鉄地それぞれに銀を被う精巧な花形座を伏鉢に載いて，宝珠の台座をつけた鉄芯を貫通させて固定したのち，鋲頭とも言える宝珠を銀で被うという手法をとっている。伏鉢の内をみるともう一本鉄芯が添えられているのは，更に固定を図ったものであろうか。なお，辻金具は宝珠を有しないものであったと観察できる。

脚は，雲珠は10脚を等間隔配置し，辻金具は×字に配している。先端は，半円状を呈している。幅は 1.5 cm あり，これに鋲頭径 0.9 cm，高さ 0.7 cm の鋲を1個づつ打ち，基部に幅 0.3 cm の鉄製責金具が巻かれている。鋲頭は金銅で被れている。

雲珠で完存する脚は3個であるが，長さが 1.9 cm のもの2脚，1.5 cm のもの1脚と長短がみられる。

B組　幅広い革紐を使用するセットである。鉄地金銅張の伏鉢は，偏平で稜をもつものであり稜から下には，下縁のみで直線的であり，段など装飾性はみられない。

雲珠の径 13 cm，伏鉢径 8.2 cm，残存高 3.2 cm，伏鉢高 2.4 cm を測る。

辻金具の径 8.5 cm，伏鉢径 4.4 cm，高さ 1.3 cm を測定する。

雲珠は，伏鉢の上に，6弁の花文様の鉄板と方形の鉄板を重ねたものに金銅で被ったもので，A組の雲珠に比して簡便な花形座を鋲を兼ねた宝珠によって装着されている。宝珠は残存していないが，花形座に残る痕跡から径 1.2 cm の底面をもつものであることが知られる。伏鉢を貫いた鉄芯は，方形の板に当った後留められたらしく，伏鉢の底に木痕が残る。

脚は，幅 2.2 cm，先端は脹らみをもって尖る蓮弁状を呈する。これに偏平な鋲頭1個と幅広い責金具を装着している。鋲頭径 1.1 cm，高さ 0.5 cm，責金具幅 0.5 cm，ともに鉄製であり装飾は少ない。雲珠は8脚等間隔に，辻金具は十字に配置している。

雲珠は2脚のみしか完存しない。伏鉢に残る脚の折れ口を見ると完存する脚と異り，幅 1.6 cm のものが2脚あったことが知られる。この細い脚にも革紐を装着したらA組との連絡もできることから，A・B組を合せた飾りも可能であろう。

B組雲珠の花形座には鉄鏃の鋒片が銹着している。

鉄環（環状繋絡金具）　鉄製鍛造による偏平な鐶であり，2個ともほぼ同じ形態で，外径 3.9 cm，内径 2.8 cm，厚さ 0.2 cm，重量 9 g を測定する。革紐が結びつけられた痕が三箇所明確にみられ，馬装における金具であることが認められる。残る革銹の色も，黄色，赤褐色，黄褐色とあり，革紐も色彩豊かなものであったことが推定できる。この金具に伴う帯先金具・責金具は残っていない。

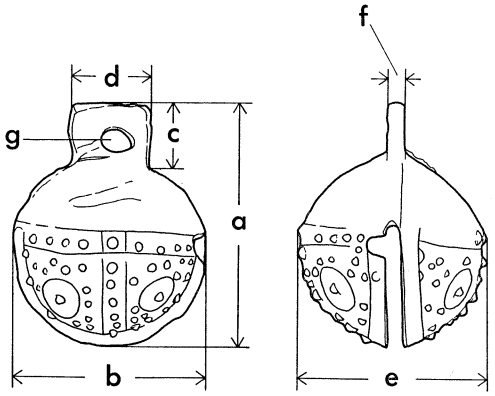
残存する革紐の推定幅は2.2～2.8cmであり，雲珠・辻金具B組の懸絡紐に結びつくものである（図版13―7・8，図版56）。

馬鈴（図版12・57）　鋳造による銅製であり，両面とも下半をT字形に2条の陽線によって区画し，その中央に珠圏文を配しその外を珠文でうめるもの4個（1～4）と，珠文のみで散らしたもの2個（5・6）がある。鈴子はすべて小さい円礫を使用している。

鈴の測定箇所と測定値は第5表に掲げた。

第5表　岡田山1号墳出土馬鈴計測値表　（単位：mm）

測定位置 鈴番号	a	b	c	d	e	f	g	備考
1号鈴	46.3	34.5	11.2	15.5	35.1	3.2	4.3	
2号鈴	45.4	35.9	10.7	15.4	34.9	3.6	4.7	
3号鈴	48.7	36.6	13.1	15.4	35.7	4.0	4.9	
4号鈴	44.0	35.4	10.2	15.7	35.1	3.2	4.5	
5号鈴	47.8	36.2	12.1	17.1	35.6	3.1	(6.3)	⊙なし
6号鈴	49.9	35.7	13.7	16.8	34.8	3.6	(5.2)	〃



馬鈴計測位置図

1号鈴　A・Bの両面の鋳型接合がズレたため文様に高低を生じているし，鈕もA面では斜めに鋳出されている。湯まわりも悪く口唇部が欠けている。B面鈕の左下に鋳かけがみられる。鈕と響胴部の結合が，4号とともに他のものと異っている。それは鈕の基部が響胴部内面ブク状に残り⊥状になっている。この2個の鈕は別鋳であろう。B面は4号B面と同文の可能性がある。

2号鈴　A面は3号のA面と同文である。A面の右唇は湯がまわらず欠けている。また左接合の甲張りそぎ落としの際に鈕の基部や珠文を誤って深削りしている。B面は銹が著しい。

3号鈴　A面は2号A面と同文である。A面の右鈴口から上にかけて湯きずを生じている。鈕の先端は，タガネによる切断口がよく残る。A面の文様上部の珠文と陽線はヤスリによる仕上げの際に削りおとされている。B面は銹が著しい。他と異り2個の石丸を内蔵している。

4号鈴　B面左口鈴口部に湯きずがあり，鈕の近くに鋳かけした修正痕がみられる。その補修にともなうケズリが素文の上半分にありT字の上部陽線は大きく削られ消滅している。また唇にもヤスリがかけられA面の唇より短くなっている上に，唇を縁どる珠文も半削されている。鈕には鉄片が付着している。鉄環をもって懸絡したものであろうか。1号鈴と同じく鈕は別鋳であろう。

5号鈴　湯まわりが悪く，鈕，鈴口，唇などを一部欠いている。このため現在石丸を孕んでいない。B面は，鉄銹が全面に付着していて不明瞭である。鋳型接合が悪く，左右の唇が相違し，鈴口がいびつなものとなっている。鈕のA面は，孔から上端部にかけ，くぼんでいる。紐通し孔は歪んでいる。

6号鈴　鈕と響胴部に孔から続く大きい湯傷がある。ここの観察からすれば，1，4号と異り明らかに共鋳（ともぶき）で製作されている。湯は唇部にもまわらずA面左唇をもたない。鈕の上端面には，タガネによる切断面が残されている。鈕の紐通し孔は湯まわりが悪く円をなさない。

なお，野津報告[1]によれば「鈴　弐個　鍍金銅製…略……尤も精巧のものなり。」と記述されている。しかし，保存処理など終った今，鍍金の痕跡をみることはできない。　（西尾良一）

註(1)　梅原末治「出雲国八束郡岡田山古墳調査報告」『中央史壇』7巻5・6号合冊，1923年（P.95）

(2) 野津左馬之助「八束郡大庭村大字大草岡田山古墳」『島根県史』四　古墳，1925年（P.288）
(3) 渡辺貞幸「岡田山古墳研究の現状と問題点（レジメ）」島根考古学会2月例会発表要旨，1984年（No 2）
(4) 勝部　昭「岡田山古墳について」松江考古学談話会4月集会資料，1964年
(5) 西尾良一「岡田山1号墳出土の馬具類について」『島根考古学会誌』第1集，1984年（P.84）
(6) 大道弘雄「探雲記（第四回）」『考古界』第8篇第5号，1909年（P.235）
(7) 野津左馬之助「同郡同村大字同上日御崎神社境内古墳」『島根県史』四　古墳，1925年 P.292
(8) 山本　清「岡田山古墳」『島根県文化財調査報告書』第5集，1968年（P.18）
(9) 高橋建自「出雲国八束郡大草古天神山古墳発掘遺物」『考古学雑誌』第9巻第5号，1919年
(10) 勝部　昭「御崎山古墳」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975年 P.69
(11) 註2に同じ（P.290）（附図第40の2）
附図に2個の鈴が見えるが上半の素文部に白い斑が見られる。この斑が鍍金痕であろうか。なお，附図の鈴は鈕の位置，斑の文様から同じ鈴の印影であると思われる。この鈴は文様と鈕の特徴から5号鈴と判定されるものである。

5. 須　恵　器

玄室内出土の須恵器（図版14—1・2，図版59）

玄室内からは短頸壺1，瑞1，高坏1，提瓶2が大正4年の発掘で家形石棺両脇から出土したとされるが，現存するのは短頸壺，瑞のみである。短頸壺は口径9.4 cm，胴径22.8 cm，高さ17.5 cmを測るもので，肩部が強く張り底部は丸底である。肩部には1～3条の沈線文が2段に廻り，その間に刺突文が施される。胴部には外面に平行叩き痕，内面に同心円状叩き痕が残り，外面はさらにカキ目が施される。瑞は口径9.7 cm，胴径7.4 cm，高さ12.4 cmを測るもので，胴部は肩が強く張り，口頸部は長く外反する。底部はやや丸味を持つ平底状である。頸部中程に2条の沈線文が廻り，その上に波状文，肩部には2条の沈線文間に刺突文が施されている。調整は胴部にカキ目，底部にはカキ目後回転ヘラ削り調整が施される。

高坏，提瓶は既に散逸しているため詳細を知ることはできないが，京都大学保管の写真（図版47—1），『島根県史』掲載写真（図版45—1）から大略を窺うことができる。高坏は坏部口縁部が直立気味に内湾し，脚部は筒部が細長く裾部が「八」の字形に広がるもので脚端部はさらに外方に屈曲する形を呈する。脚端部の接地面は平坦に面取りされているようである。坏部中程には2条の突帯文，または2条の凹線によって強調された突帯文1条が施され，脚部中央は2条の凹線文が施されている。脚部には凹線文を挟んで上段に直線状，下段に三角形の透孔が2段に配されている。脚部には横方向に条線がみえることからカキ目調整が施されていたようである。一緒に撮影された短頸壺，瑞（ともに現存）と比較すると，この高坏は口径10～11cm，高さ15 cm，脚部高13 cm，脚端径9 cm程度の法量であったと思われる。

提瓶は京大保管写真には1個写っているだけだが，『島根県史』には2個が撮影されている。京大写真の提瓶は胴部の張りなどからみると『島根県史』右上端の提瓶と思われる。これは口縁部が漏斗状に外反し胴部正面形がほぼ正円の形を呈するもので，肩部には耳朶状の把手が付く。口縁端部は肥厚し面をなすようである。胴部は平行叩きの後カキ目が施され，中央部はカキ目工具で不整方向に掻き上げている。法量は口径が10～11 cm，高さ22 cm，胴部径20 cm程度と思われる。

今一つの提瓶は上記のものと似るが，胴部径がやや小さく球形を呈しているようである。把手の孔もやや小さいようである。『島根県史』の写真は俯瞰写真であるため法量の比較は困難であるが，口径は上記提瓶とほぼ同じだが，胴部径，器高はやや小さいと思われる。

墳丘出土の須恵器（図版15～17，図版59～65）

墳丘上からは多数の須恵器が出土したが，細片となったものが多く図示できたのは84点である。これらはいずれも原位置を失っているが，出土状態から後方部の北側墳麓中央部付近には子持壺が数個並べられていたと推定されている。このほかにも円筒埴輪と供に出土した須恵器が数点みられ，本古墳の築造当時に置かれたと思われるものもある。また前方部付近を中心として新しい時期の須恵器が多数出土している。

子持壺（図版15—3～10，図版16—28～39）　完形に復元しうるものは3のみである。3は口径13 cm，復元高51 cm，胴部径34 cmを測る大型のもので，他も同様な大きさと思われる。いずれも口縁部は短く直立し，端部は内傾する平坦面をなす。胴部は長胴で底部は丸底である。肩部には子壺が4個配されている。子壺は胴部が玉葱形を呈し口縁部は大きく開く。子壺口縁端部も平坦面をなすものが多い。子壺と本体胴部の接合部にはいずれも接合後，径1 cm前後の小孔が子壺側から穿たれている。また3・9・10の肩部には子壺接合部のやや下方に三角形の透孔が四方に穿たれている。胴部外面は規則的な平行叩きの後部分的にカキ目，同内面は同心円状叩き痕をナデて消すものが多い。

28～39は子持壺子壺部分である。口径9.4～9.8 cm，高さ8～10 cm前後といずれもほぼ同様な大きさである。これらは後述の子壺付蓋の子壺部によく似るが，底部が厚く本体と接合後に径1 cm前後の小孔が穿たれている点で子壺付蓋の子壺と区別できる。子壺内外面は回転ナデ調整が施され，本体内面は同心円状の叩き痕がナデによって消去されるものが多い。また本体との接合痕が明瞭に残るものも多い。

これらはいずれも均整がとれた形をしており，焼成も良好な優品である。

壺（図版15—11～13，図版16—48，図版17—52・53）　11～13，52は短頸壺で口縁部が短く直口またはわずかに外傾し，端部は内傾する平坦面をなす。肩部はかなり張るもの（13）と緩やかに胴部に至るもの（12）とがある。完形に復元しうるものは13のみであるため胴部，底部の形態は不明なものが多いが，13は長胴で丸底である。口径は16.1～17.3 cmで13の胴部最大径43.7 cm，高さ50.8 cmである。胴部外面は規則的な平行叩きの後部分的にカキ目，同内面は同心円状叩き痕をナデて消去している。これらは口縁部，胴部，底部の形態が子持壺とよく似ているが，口頸部に自然釉が付着していないため子持壺でないと判断した。[(1)] 48は直口壺である。中程に凹線文を1条廻らせその上に波状文が施されている。53は口頸部が大きく外反し頸部は細く締まる形を呈する。肩部はかなり張るようである。52は頸部がやや外傾する直口の壺である。以上の壺は均整がとれた形態の優品が多い。

甕（図版17—49～51）　49・50は口縁部が逆「ハ」の字形に大きく外反する大形の甕である。口縁端部は肥厚して平坦面をなす。口頸部には櫛描きによる波状文を2段に配し，その間には2条の凹線文が廻る。51は49・50に比べやや小形の甕で，口縁部は逆「ハ」の字形に短く外反する。口縁部は丸く単純におわり，文様は施されていない。

子壺付蓋（図版16—14～27）　丸い天井部に子壺を付けるもので類例の少ない土器である。蓋部の器高は高く，口縁端部は内傾する平坦面をなす。子壺部は胴部は小さく口縁部は大きく外反し，口縁端部は内傾する凹面または平坦面をなす。天井部と子壺部の接合部分は孔が空いているが，これは子持壺と違い接合後に穿孔したものではなく，蓋天井部中央は当初から塞がれなかったと思われる。14・16・17・18・19・21・22の天井部には刺突文が施されている。いずれも均整のとれた形を呈し，調整もていねいな優品である。

脚部（図版16—47）　小片のため全形を窺うことはできないが「ハ」の字形に開くもので，端部近くで段がつき端部は平坦面をなす。上端には透孔の一部が観察され，本来は方形または三角形の透孔が穿たれていたことがわかる。器壁がさほど厚くないことから，長頸壺など中型の器種の脚部と思われる。

蓋（図版16—40～46，図版17—60～67）　40～46は天井部が丸く，天井部と口縁部の境に稜を持つ蓋である。このうち口縁端部が窺えるのは41～46でいずれも端部は凹面をなすが，45・46は他に比べシャープさを欠く。稜が観察できるもののうち40・41の稜は比較的明瞭で鋭さが残るが，42・43の稜は鈍く不明瞭である。また40～44は器壁が比較的うすく口縁部が直線的に垂下するのに対し，45・46は器壁が厚く，口縁部は湾曲している。いずれも小片のため天井部の形が窺えるものは少ないが，40・41の天井部は丸く器高も高いようである。60～67はいずれも器高が低く，天井部に輪状つまみ（60・63・64）または擬宝珠つまみ（65）がつく蓋である。60・63・64・66・67の天井部はカーブを描くが，65の天井部は平坦でやや窪む。口縁部は内面にかえりを有するもの（60～62）と，内面にかえりを持たず端部が垂直に屈曲するもの（66・67）とがある。なお65の天井部周縁にはヘラ状工具による沈線文が1条廻っている。

坏（図版17—54～58，68～76，81，82）　たちあがりと受部を持つもの（54～58），口縁部がわずかにくびれるもの（70～76），無高台で口縁部は内湾し端部が単純に終るもの（68・69），有高台のもの（81・82）などがある。

たちあがりと受部を持つものは56のたちあがりがやや高いようであるが，58のたちあがりは低く内傾している。小片のため底部の状況は不明であるが，56の底部には回転ヘラ削りが施されているようである。

口縁部がわずかにくびれる坏もすべて小片のため，底部の状況は不明だが他例からみると無高台と思われる。口縁部は明瞭にくびれるもの（75・76）のほか，段がつくだけのもの（71・73），凹線または沈線を入れるもの（72・74）などがある。

無高台で口縁部が内湾する坏は，ともに平底で回転糸切痕が残る。他の坏に比べ器壁がやや厚いようである。

高台付の坏は，さらに高台の低いもの（81）と高台が高く外傾するもの（82）とがある。前者のうち81は体部がやや内湾するものの直線的に伸びる坏である。底部は81が回転糸切，82がヘラ切りによって切り離されている。

皿（図版17—77～80）　体部中程で稜がつき口縁部は外反，下半は内湾するもの（77・79・80）と，体部，口縁部が内湾するもの（78）とがある。

底部（図版17—83～85）　いずれも高台を有する底部小片で，長頸壺または広口壺の底部と思われる。高台は83・84が比較的高く外傾しているが，85の高台は低い。いずれも胴部は内湾して伸びる。85の底部外面にはわずかながら平行叩き痕が残っており，叩きによって整形されたものと思われる。84の底部は回転糸切後ナデによって調整されている。

高坏（図版17—59）　筒部はやや太く，直線状の透孔を2方向に配す。坏底部から筒部にかけての小片のため坏部，脚端部などの形態は不明である。　（柳浦俊一）

註(1)　子持壺は口縁部に蓋をかぶせて焼かれたらしく，3～6を観察すると口縁部，頸部には自然釉がまったくかかっていない。上から見ると，この無釉の部分はほぼ正円でその範囲は子壺付蓋端部の面積とほぼ一致する。また，無釉の部分と自然釉のかかる部分の境は明瞭で，部分的に蓋端部が融着したと思われる粘土小片が付着している。7～10の小片については以上のことから子持壺と壺とを判断した。

〔付記〕　須恵器の実測図作製にあたっては，大半を佐古和枝が実施した。

第6表　須恵器観察表　（+αを付した数値は残存長。（　）付の数値は復元法量）

図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
14-1	玄室	短頸壺	9.5	胴部径 22.9	18	口縁部は，わずかに内傾。肩部はかなり張り，底部は丸底。 肩部に2条2段の沈線文，間に刺突文 外面胴部以下平行叩き後カキ目。 同内面，同心円状叩き，他は回転ナデ	暗灰色	小砂粒含む	良好	
14-2	玄室	𤭯	10.1	胴部径 7.8	12.7	口頸部は長く大きく外反し，胴部はやや肩部が角張り，底部は丸味を持つ平底状，頸部に2条の凹線文と2段の波状文，肩部に2条の凹線間に刺突文，底部から胴部下半回転ヘラ削り，胴部上半はカキ目。他は回転ナデ。	暗灰色	小砂粒含む	良好	
15-3	後方部北側下段	子持壺	13 小壺口径 9.3	胴部径34	(51)	胴部は長胴で，肩部に4個の子壺をつける。 口縁部は短く直立し，端部は鈍いノミ刃状に内傾。 肩部には四方に三角形の透孔。子壺は「5」の字状口縁で口縁端部は平坦。子壺底部は本体との接合後に小孔貫通。上半内面は同心円叩き痕をナデで消去。肩部外面は平行叩き後縦方向のカキ目。他は回転ナデ。	暗灰褐色	密	良好	一部復元
15-4	後方部北側下段	子持壺	11.8 子壺口径 11.7	胴部径 36+α	14+α	なだらかな肩部に4個の子壺をつける。口縁部は直立し丸く終る。子壺は「5」の字状口縁をなし，端部は平坦。子壺接合部は小孔が貫通。内面は同心円叩き痕を消去。 外面平行叩き，他は回転ナデ。	黄褐色～灰褐色	密	良好	
15-5	後方部北側下段	子持壺	12	胴部径 28.6 +α		なだらかな肩部に4個の子壺をつける。口縁部は直立し，端部はノミ刃状に内傾する。子壺接合部は小孔が貫通。 上半内面は同心円叩き痕を消去，外面平行叩き他は回転ナデ。	灰色 黄褐色 （自然釉）	密	良好	
15-6	後方部北側下段同西側下段，くびれ部西側中段南寄り	子持壺	11.6			口縁部は直立し，端部はノミ刃状に内傾する。肩部に子壺剝脱痕残る。 子壺接合部には小孔が貫通。肩部内面は同心円状叩き痕を消去。外面平行叩き，口縁部回転ナデ。	暗緑茶褐色 （自然釉） 口縁部灰色	密	良好	肩部に融着物蓋の一部か
15-7	西側くびれ部中段	子持壺	14.2			口縁部は直立し，端部はノミ刃状に内傾する。肩部下部は同心円状の叩き痕を消去，外面平行叩き。	茶褐色～灰色 （自然釉）	密	良好	子持壺口縁部か
15-8	後方部北側下段	子持壺	11.4			口縁部は，やや内傾気味に直立し，端部は内傾する凹面をなす。肩部はなだらかで内面は同心円状叩き痕を消去。 肩部平行叩きの後カキ目，他は回転ナデ。	暗黄灰色～灰色	密	良好	子持壺口縁部か
15-9	後方部北側下段	子持壺		胴部径 37.2	46.4	胴部は長胴で肩部に三角形の透孔4個。内面上半同心円の叩き痕を消す。 同下半は同心円叩き，外面平行叩き後浅くカキ目。	青灰褐色	密	良好	肩部に子壺剝離痕
15-10	後方部北側下段	子持壺		胴部径 37.3	38.5 +α	胴部は長胴で底部は丸底。 内面同心円叩き痕を消去。 外面平行叩き後浅くカキ目。	灰色	密	良好	子持壺の胴部底部か
15-11	後方部北側下段	壺	(16.1)			口縁部は直立し，端部はノミ刃状に内傾する。	灰色	密	良好	子持壺
15-12		壺	17.3	胴部径 48.5	33+α	口縁部は直立し，端部はノミ刃状に内傾。内面は同心円状の叩き痕を消去。 外面は平行叩き後，カキ目。口縁部は回転ナデ。		密	良好 焼成時の気泡残る	

図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
15-13	後方部北側下段	壺	17.5	胴部径 43.7	50.8 +α	口縁部は直立し，端部はノミ刃状に内傾，内面同心円状の叩き，外面平行叩きの後カキ目。	暗灰色 肩部に暗茶灰色の自然釉	密	良好	
16-14	後方部北側下段	子壺付蓋	蓋16 子壺部 9.8	子壺部 5.4	13.3 子壺部 6.2 蓋部 7.1	口縁端部はノミ刃状に内傾。天井部は丸く頂部に子壺。子壺は口縁部が「5」の字状に開き端部はやや内傾。子壺底部と蓋天井頂部は塞がれていない。天井部外面に刺突文。全面回転ナデ。	暗灰色 一部暗緑茶色の自然釉	密	良好	
16-15	後方部北側下段	子壺付蓋	蓋16 子壺 10.6	子壺部 6.2	12 子壺部 5.8 蓋部 6.2	口縁端部はノミ刃状に内傾。天井部は丸く頂部に子壺口縁部は「5」の字状に開き，端部はやや内傾。子壺底部と蓋天井頂部は塞がれていない。全面回転ナデ。	暗灰色	やや粗	良好	
16-16	中段くびれ部 No. 2	子壺付蓋	14.5		5.5 +α	口縁端部はノミ刃状に内傾。天井部は丸く外面に刺突文，全面回転ナデ	暗灰褐色	密	良好	
16-17	前方部前面②	子壺付蓋	(15.4)		5.3 +α	口縁端部は屈曲し，内傾する平坦面をなす。天井部は丸く，外面に刺突文	黒灰色			
16-18	前方部西側下段	子壺付蓋		子壺部 6.6	3.9 +α	天井部頂部に子壺，子壺底部と蓋天井頂部は塞がれていない。天井部外面に刺突文。天井部外面，カキ目。他は回転ナデ。	暗灰色 (内面灰色)	密	良好	
16-19	くびれ部西側前寄り中段	子壺付蓋		子壺部 5.6	2.2 +α	天井部はやや平坦で，頂部に子壺。子壺底部と，蓋天井頂部は塞がれていない。天井部外面に刺突文。	灰色	密	良好	
16-20	後方部北側下段	子壺付蓋		子壺部 7	5+α	天井部は丸く頂部に子壺。子壺底部と蓋天井頂部は塞がれていない。天井部外面カキ目。他は回転ナデ。	暗灰色	密	良好	
16-21	後方部前寄り東側中段	子壺付蓋		子壺部 7.2	6.3 +α	天井部に子壺を付ける。蓋天井頂部と子壺底部は塞がれていない。天井部外面に刺突文。	暗灰褐色	密	良好	
16-22	東側くびれ部中段番外①	子壺付蓋	(14.9)		6.2 +α	口縁部はノミ刃状に内傾。天井は丸く，外面に刺突文。全面回転ナデ。	灰褐色	密	良好	
16-23	後方部北側下段	子壺付蓋	(13.4)		5.3 +α	口縁端部はノミ刃状に内傾し，体部は急角度でたちあがる。外面天井部近くにカキ目，他は回転ナデ。	暗灰褐色	密	良好	
16-24	後方部北側西寄り下段	子壺付蓋	(14.9)		2.9 +α	口縁端部は屈曲し，端部内面は凹面をなす。	暗緑茶褐色の自然釉 内面灰色	密	良好	
16-25	後方部北側下段	子壺付蓋	(16)		5.7 +α	口縁端部はノミ刃状に内傾し凹面をなす。	淡灰褐色	密	良好	
16-26	後方部北側下段	子壺付蓋	16	子壺部 6.8	10.5 +α	口縁端部はノミ刃状に内傾。天井部は丸く，頂部に子壺底部と天井頂部は塞がれていない。天井部外面にカキ目。	灰褐色	密	良好	
16-27	後方部北側中央下段	子壺付蓋	(14.8)		5.3 +α	口縁端部はノミ刃状に内傾し天井部は丸い。全面回転ナデ。	暗灰褐色 (内面灰色)	密	良好	
16-28	後方部北側下段	子持壺(子壺)		6.8	5+α	胴部は玉葱形を呈し，底部は小孔が貫通。本体内面には同心円状叩き痕消去	灰褐色	密	良好	
16-29	後方部北側下段前2区②	子持壺(子壺)	9.7	5.4	9.6 +α (小壺部)8.6	胴部は玉葱形で，口縁部は「5」の字状に大きく開く。底部は小孔が貫通。本体内面は同心円状叩き痕を消去。子壺部は全面回転ナデ。	暗緑茶褐色 (自然釉)	密	良好	
16-30	後方部北側下段	子持壺(子壺)	9.4	6	子壺部8.4	胴部は玉葱形で口縁部は「5」の字状に大きく開き端部は内傾する。底部は小孔が貫通。底部内面の小孔周辺には竹管状の刺突あり。本体内面は同心円状の叩き痕を消去。	灰色 一部に黄褐色の自然釉	密	良好	

図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
16-31	後方部北側下段71	子持壺(子壺)	9.8	9.5	9.4 +α 子壺部8.7	胴部は玉葱形で，口縁部は「5」の字状に大きく開く。端部はノミ刃状に内傾する。底部は小孔が貫通。本体内面は同心円状叩き痕。	灰色 外面暗緑茶褐色の自然釉	密	良好	
16-32	前2区⑧	子持壺(子壺)		5.6	8.7 +α	胴部は玉葱形で，頸部は大きく開く。底部は小孔が貫通。本体内面は同心円状叩き痕を消去。	暗緑茶色の自然釉	密	良好	
16-33	後方部北側下段	子持壺(子壺)		6.7	4.2 +α	底部に小孔貫通，接合部は指による押圧。子壺内外面とも回転ナデ。	灰色	密	良好	
16-34	後方部北側下段	子持壺(子壺)		6.5	6.4 +α	胴部は玉葱形で，底部に小孔貫通。内外面とも回転ナデ。底部近くに接合痕明瞭。	灰色	密	良好	
16-35	後方部北側下段	子持壺(子壺)		6.5	5.2 +α	胴部は玉葱形で底部には小孔が貫通。胴部下半カキ目。接合部は指による押圧痕，ナデ。他は回転ナデ。本体内面は同心円状叩き痕消去。	灰褐色	密	良好	
16-36	後方部北側下段	子持壺(子壺)		6.1	5.3 +α	胴部は玉葱形で底部には小孔貫通。内外面とも回転ナデ。本体との接合痕明瞭。本体内面は同心円状叩き痕消去。	暗灰色	密	良好	
16-37	後方部下段	子持壺(子壺)			4.6 +α	胴部は玉葱形で頸部は大きく開く。内外面回転ナデ。	暗灰褐色	密	良好	
16-38	くびれ部西側中段前寄り	子持壺(子壺)		5.7	4.8 +α	胴部は玉葱形で底部には小孔貫通。内外面回転ナデ。接合部付近は指による押圧痕およびナデ。	暗緑茶色(自然釉)	密	良好	
16-39	後方部北側下段	子持壺(子壺)		6.6	5.4 +α	胴部は玉葱形で底部には小孔貫通。内外面回転ナデ。接合痕明瞭。	灰色	・密	良好	
16-40	後方部北側下段斜面西ヨリ	蓋				天井部と口縁部の境は明瞭な稜をなす。天井部外面はていねいなヘラ削りそれ以外の内外面は回転ナデ。	外面淡緑色の自然釉。内面明青灰色。	密。小砂粒を含む。	きわめて良好。堅緻。	
16-41	前方部前面	蓋	(14.1)		4.0 +α	口縁端部は凹面をなし，口縁部・天井部は内湾する。天井部と口縁部の境にはやや鈍い稜。内外面回転ナデ。	灰色	密	良好	
16-42	後方部北側下段斜面西ヨリ	蓋	(12.9)			口縁端部はわずかに段をなし，口縁部と天井部の境には明瞭な稜を施す。内外面回転ナデ。	外面濃緑色の自然釉。内面明青灰色。	密。小砂粒を含む。	きわめて良好。堅緻。	
16-43	後方部北側下段西ヨリ	蓋	(12.4)			口縁端部はわずかな段をなす。口縁部と天井部の境は不明瞭な稜をなす。内外面回転ナデ。天井部外面回転ヘラ削り。	外面濃緑色の自然釉。内面明青灰色。	密。小砂粒を含む。	きわめて良好。堅緻。	
16-44	後方部北側下段西ヨリ	蓋	(13.5)			口縁端部はわずかな段をなす。口縁部と天井部の境は明瞭な稜をなす。内外面回転ナデ。	明青灰色	密。小砂粒を含む。	良好	
16-45	後方部西側下段	蓋	(12.8)		2.1 +α	口縁端部はわずかに段をなし，口縁部は内湾して伸びる。内外面回転ナデ。	黒灰色	密	良好	
16-46	後方部北側下段	蓋	(14.2)			口縁端部は段をなす。口縁部は内湾してのびる。内外面回転ナデ。	外面暗青灰色 内面明青灰色	密。小砂粒を含む。	良好	
16-47	後方部北側中央下段	脚部		(12.1)		「ハ」の字形に開き，端部近くで段がつく。端部は平坦。上端には透孔の下端わずかにみえる。内外面回転ナデ。	暗灰褐色 内面灰色	密	良好	
16-48	後方部北隅下段	壺	頸部径 9.3			頸部は外傾する。中程に凹線文を施し，その上部には波状文。内外面とも回転ナデ。	黒色	2mm大の砂粒含む	良好	

図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
17-49	後方部北側下段	甕	30.7			口縁部は大きく外反し，端部近くで外面が肥厚し段がつく。中程に2条の凹線文が施され，その上下に波状文。内外面とも回転ナデ。外面はその後に浅いカキ目。	暗灰褐色	密	良好	
17-50	後方部西側下段北側下段西北隅	甕	(35.0)			口縁部は大きく外反し，端部近くで外面が肥厚し段がつく。2条の浅い凹線によってつくられた突線文の上下に波状文を施し，その下にきわめて浅い凹線文1条。内外面回転ナデ。	外面暗灰色で，口縁部付近に濃緑色の自然釉がかかる。内面灰色	密。小砂粒を含む。	きわめて良好。堅緻。	
17-51	西側入口南	甕	(16.4)			頸部は強く締まり口縁部は短く外反する。内外面回転ナデ。	黒灰色	密	良好	
17-52	前方部南側下段	壺	(17.7)			口縁部は内湾気味に外傾し，端部は細くなる。内外面回転ナデ。	黒褐色（自然釉）	密	良好	
17-53	西側下段南寄り	壺	頸部径6			頸部は締まり口縁部は大きく外反する。肩部はかなり張る模様。	暗紫灰色	密	良好	
17-54	前方部2区	坏				底部外面は回転ヘラ削り。内面は回転ナデ。底部内面は回転ナデのあと静止ナデ。	明灰色	小砂粒を含む	良好	
17-55	前方部西側下段	坏				底部外面は未調整で，粘土の凹凸が残る。回転ナデ。	灰褐色	密	良好	
17-56	後方部北側下段	坏	受部径(15.5)			底部・体部は丸く受部は上外方に伸びる。底部外面は回転ヘラ削り，他は回転ナデ。	黒灰色 内面灰褐色	1mm大の砂粒含む	良好	
17-57	東側下段	坏	受部径(14.4)			受部は上外方に短く伸び，体部は丸く浅身。内外面とも回転ナデ。	暗緑灰褐色 内面灰褐色	密	良好	
17-58	前方部2区東寄り②	坏	(12.0)			口縁部は短く内傾し，受部は上外方に伸びる。内外面とも回転ナデ。	暗灰色	密	良好	
17-59	前方部2区東寄り②	高坏		筒部径4.0		脚部に直線上の透孔を2方向に配す。内外面回転ナデ。	暗赤茶色	密	良好	
17-60	前3区⑩前8区西	蓋	15.0	つまみ径3.8	3.0	口縁部内面に低いかえり。器高低く天井部に輪状つまみをつける。天井部外面ヘラ削り，同内面仕上げナデ，他は回転ナデ。	灰褐色	0.5～1mm大の砂粒やや多い	良好	天井部外面に「ノ」状のヘラ記号
17-61	前2区西	蓋	(14.4)		1.6 +α	口縁部内面にかえり。内外面とも回転ナデ。	暗灰褐色	密	良好	
17-62		蓋	(14.0)			口縁部内面には短いかえり。内外面とも回転ナデ。	暗灰褐色	密	良好	
17-63		蓋		つまみ径4.9		天井部に輪状つまみ。天井部外面は回転ヘラ削り。	灰色	密	良好	
17-64	前3区中央④	蓋		つまみ径(4.6)		天井部に輪状つまみ。天井部外面は回転ヘラ削り。	灰褐色	密	良好	
17-65	後方部西側下段	蓋	16.0 +α	天井部径8.0	3.7 +α	平坦な天井部に擬宝珠状つまみ。天井部回転ヘラ削り後回転ナデ，他は回転ナデ。天井部に1条の沈線文。	暗緑青灰色	2mm大の砂粒含む	良好	
17-66	前方部西側下段	蓋	(16.1)		2.0 +α	口縁端部は垂直に屈曲し高い。天井部は低く緩いカーブを描く。天井部外面回転ヘラ削り，内面仕上げナデ，他は回転ナデ。	暗青灰色	密	良好	
17-67	前方部2区東寄り①	蓋	(16.1)		1.6 +α	口縁端部はほぼ垂直に屈曲し高い。天井部は低く緩いカーブを描く。天井部内面仕上げナデ，他は回転ナデ。	淡灰褐色	1mm大の砂粒やや多い	やや不良	

図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
17-68	前方部2区東寄り①	坏	12.8	9.0	3.8	底部は平坦で，体部は内湾して口縁部に至る。 底部外面は回転糸切未調整，内面は仕上げナデ。他は回転ナデ。	淡緑灰色	密	やや不良	
17-69	前方部2区東寄り	坏	(12.1)	9.5	3.8	底部は平坦で，体部は内湾して口縁部に至る。 底部外面は回転糸切未調整，他は回転ナデ。	暗緑灰色	2mm大の砂粒含む	やや不良	
17-70	前方部2区東寄り②	坏	(13.4)		4.1 +α	体部は内湾して伸び，口縁部近くでくびれ，口縁部は外反。 比較的深身。内外面とも回転ナデ。	灰褐色	密	不良	
17-71	前方部前面 p. 1～5	坏	(14.5)		3.0 +α	体部は内湾し，口縁部近くで段をつけ口縁部はわずかに外反する。 内外面とも回転ナデ。	黒灰色	密	良好	
17-72	西側くびれ部中段	坏	(15.2)		4.1 +α	体部は内湾し，口縁部近くに凹線を廻らせる。 内外面回転ナデ。	暗茶褐色	密	良好	
17-73	前方部前面	坏	(14.4)		4.2 +α	体部は内湾し，口縁部近くで段状にくびれる。 内外面回転ナデ。	黒灰色	密	良好	
17-74	No. 24	坏	(14.0)		3.2 +α	口縁端部に凹線。	暗灰色	密	良好	
17-75	前方部西側下段	坏	(12.0)		2.2 +α	体部は内湾し，口縁部近くでくびれ口縁部は外反する。 内外面回転ナデ。	黒灰色	密	良好	
17-76	第1土壙	坏	(14.4)			体部は内湾し，口縁部近くでくびれ口縁部は外反する。 内外面とも回転ナデ。	黒灰色	密	やや不良	
17-77	前方部2区東寄り	皿	(15.0)		2.0 +α	体部下半は内湾し，体部上半・口縁部は外反。 内外面回転ナデ。	黒灰褐色	密	良好	
17-78	東側下段	皿	(12.1)			体部・口縁部は内湾する。 内外面回転ナデ。	灰褐色	密	良好	
17-79	第1土壙	皿	(13.0)		2.4 +α	体部下半は内湾し，体部上半・口縁部は外反する。 内外面回転ナデ。	暗灰色	密	良好	
17-80	下段南ヨリ	皿	13.1	9.3	3.4	体部下半は内湾し，口縁部は外反。内外面回転ナデ。底部は回転糸切で切り離したまま。	青灰色	砂粒を多く含む。	良好	
17-81	西側入口南	坏	10.4	11.4	4.4	底部は平坦で体部との境に低い高台を付ける。体部・口縁部は直立気味に内湾する。底部外面回転糸切後若干ナデか。同内面仕上げナデ，他は回転ナデ	黒灰色	1mm大の砂粒含む	良好	
17-82	前方部西側下段	坏		6.7		底部はやや丸味を持つがほぼ平坦で底部外縁に外方にふんばる高台をつける。底部外面ヘラ切後回転ナデ。同内面仕上げナデ。	淡灰褐色	1mmの砂粒やや多い	やや不良	
17-83	前方部前面	底部		(7.6)		底部と体部の境に外方にふんばる高台をつける。高台端は平坦。 底部と体部下半ヘラ削り後回転ナデ。 他は回転ナデ。	暗紫灰色	1mm大の砂粒少量含む	良好	
17-84		底部				底部はほぼ平坦で，胴部との境に外方にふんばる高い高台を付ける。 底部外面回転糸切後回転ナデ。 胴部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。	暗紫灰色	密	良好	
17-85		底部		11.7	9.1 +α	凹凸あるが底部はほぼ平坦で，胴部との境に低い高台を付ける。 高台端部は平坦に面取り。 底部外面叩きの後ていねいにナデ。 胴部下部手持ちヘラ削り後平行叩き。 上半および回転ナデ。 底部内面は指による押圧痕あり。	黒灰色 内面灰褐色	1mm大の砂粒含む	良	

6. 埴　　輪

(1) 円筒埴輪の概要

出土した円筒埴輪は普通円筒のみであった。努めて全容復原をはかったが，全形を図示できたものは完形品と図上復原を含めても9本にとどまった。以下個々の円筒埴輪について説明するが，先がけて埴輪各部の名称と本古墳出土の円筒埴輪の概要を明らかにしておきたい。

各部の名称及び計測区分は第26図に示しており，これに従って記述する。これらの円筒埴輪は2段のタガを有し，基底部から口縁部にかけて逆ハ字形に開く器形を特徴とする。製作にあたって，成形は粘土紐の積み上げによるものであるが，粘土紐接合痕の比較的明瞭なものをみると逆時計回り方向の巻き上げによるものが多い。基底部は粘土帯を数枚丸くまいたものと思われるが，底部調整が顕著に施されておりその詳細は不明である。

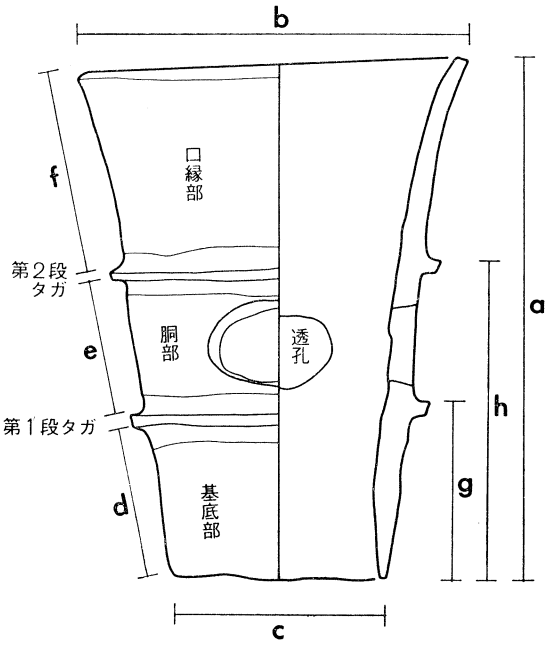
タガは退化しているのにもかかわらず突出度をもつことが当地方の円筒埴輪の地域性とされているが[1]，本古墳出土例も例外ではなく断面形がM字形に近くなった個体も数多くみられるがいずれも突出度は大きい。またタガの調整は全てヨコナデによるものである。

透孔はいずれも胴部に1対の円孔を穿つがあまり丁寧ではなく概ね胴部の幅いっぱいに横長の楕円形に穿孔され，径も一定してはいない。穿孔は刀子状工具により外から内へ時計回り方向に施される。

色調は赤褐色のものが多く，他に黄橙色あるいは須恵質のものも認められる。

焼成はいずれも良好で，土師質のものには黒斑は認められない。

外面調整はハケメ（タテ，ナナメ），指ナデ，指頭圧，ヨコナデを基本とし，胴部外面に2次調整のB種ヨコハケ[2]を施すものが認められる。内面調整は，ハケメ，指ナデ，指頭圧，板ナデ（ハケメ技法と異なり条痕を残さない板状工具によるナデをいう）などの技法が用いられるが，調整の範囲や施す方向，強弱にかなりの個体差が認められる。



第26図　円筒埴輪各部名称・計測区分図

また確認されたすべての個体に底部調整が認められ指ナデ，指頭圧の他に板ナデ，板オサエ，指ケズリ（ケズリを思わせるような強い指ナデをいう）などを施すものが認められる。

以下，各個体の説明に入るが，形態・技法の特徴を述べるにとどまり，法量等の詳細は観察表，計測表を参照されたい。

(2) 円筒埴輪各説（図版18～22，図版66～70）

1，2は基底部から口縁部下位までわかるものである。1は残存高30.6cmで，やや直立気味に立ち上がる器形を呈し，成形は逆時計回りの巻き上げによるものであるが，他の個体に比べ器肉がやや薄い。底部調整は

外面上位を横方向，中位を斜方向の指ナデでハケメを消しており，内面は斜方向の指ナデが施される。底端部は外面に指頭圧，内面は強く板ナデが施され器肉が薄くなっている。2は逆ハ字形に開く器形のものである。粘土紐の接合がやや雑で明瞭に逆時計回りの巻き上げであることがわかる。底部調整は外面上位に斜方向の指ケズリ，下位に縦方向の指ナデを施し，内面は縦方向の指ナデが用いられる。底端部外面は指頭圧，内面は縦方向の板ナデ・指頭圧が施され，これらの技法により基底部断面形は中位からV字形に徐々に薄くなる形態を呈す。

3～6は器高が39 cm前後で，全形のわかるものである。3はタガの形態が段によりやや異なり，第2段タガの方がより突出する。外面調整は口縁部，胴部にタテハケが施され2次調整は認められない。底部調整は外面9 cmレベル以下に左上り方向の板ナデ・指ナデが施され，内面は縦方向の指ナデが用いられる。底端部外面は右上り方向の指ナデ，内面は強い指頭圧が施され，器肉が薄くなっている。4は胴部外面に2次調整のB種ヨコハケが認められる。底部調整は外面上位に横方向，下位に縦方向の指ナデが施され，内面は第1段タガレベルに縦方向の板ナデ，それ以下は縦方向の指ナデが用いられる。底端部内面は強い指頭圧が施され器肉が薄くなっている。5は口縁部付近でさらに大きく開く器形のもので，胴部外面に2次調整のヨコハケが認められる。底部調整は外面上位に横方向，下位に縦方向の指ナデが施され，内面は縦方向の指ナデが用いられる。底端部内面は縦方向の板ナデ・指頭圧が施される。基底部断面形は第1段タガレベルからV字形に徐々に薄くなる形態を呈す。6は口縁部が第2段タガレベルからさらに大きく開く器形のもので，胴部外面に2次調整のヨコハケが認められる。また第2段タガの貼付方法が第1段タガに比べやや雑である。底部調整は外面上位に板オサエ，下位に縦・横方向の指ナデが施され，内面は縦方向の指ナデ・板オサエが用いられる。基底部断面形は中位からV字形に徐々に薄くなる形態を呈す。

7～9は器高が36～37 cm前後のもので全形を窺えるものである。7は他の個体と比べ口径に対して口縁部長がやや長く，底径に対して基底部長はやや短い。また口縁部のみに2次調整のナナメハケが施され，胴部に2次調整が認められない点で他の個体と異なる。底部調整は内外面ともに縦方向の板ナデが施され，断面形は基底部中位からV字形に徐々に薄くなる形態を呈す。8は口縁部がさらに大きく開く器形のもので第1，2段タガともに断面形が三角形でやや退化している。また透孔が全形を窺え長径8.7 cm，短径6.3 cmを測る。底部調整は外面下半に指頭圧が施されるが，上半には1次調整のタテハケが明瞭に残る。基底部内面は縦方向の指ナデ・指頭圧が施され，断面形は第1段タガレベルからV字形に徐々に薄くなる形態を呈す。また口縁端面に倒立させた痕跡が認められる。9は口縁端部が大きく外反する器形のものである。底部調整は外面に横方向の指ナデ，内面上位に縦方向の指ナデ，下位に指頭圧が施される。底端部は内外面ともに指頭圧が用いられ，断面形は基底部中位から徐々に薄くなる形態を呈す。

10，11は器高が33 cm前後のものである。10は口縁部上半で器肉が薄くなるもので，成形・調整ともに雑である。底部調整は外面下半に板オサエ・指頭圧が施され，内面は全域に指頭圧が用いられる。また底端部に幅1.5 cmの粘土紐を接合した痕跡が認められる。基底部の断面形は中位からV字形に徐々に薄くなる形態を呈す。11は口縁端部が外反するものである。底部調整は外面上位に横方向の指ナデ，下位に縦方向の板ナデが施され，内面は縦方向の指ナデが用いられる。底端部は内外面ともに指頭圧が施され器肉が薄くなっている。

12～24は基底部から第1段タガあるいは第2段タガ付近までわかるもので，各個体について底部調整のみ記述する。12～18は基底部断面形が第1段タガレベルからV字状に徐々に薄くなる形態を呈すものである。12～15は内外面ともに指ナデ，指頭圧で再調整され，12，15は外面第1段タガ下に板オサエも認められる。16は外

第7表　円筒埴輪計測値一覧表（単位：cm）

No.	a器高	b口径	c底径	d 基底部長	e胴部長	f 口縁部長	g第1 タガレベル	h第2 タガレベル	a/c	b/c	d/c	f/b	d：e(1)：f
1	現存高 30.6	—	18.3	14.2	10.1	—	14.7	25.5	—	—	0.78	—	1.40：1：？
2	現存高 35.2	—	16.6	13.6	10.8	—	14.5	25.8	—	—	0.82	—	1.26：1：？
3	39.0	27.6	16.7	11.2	10.4	16.4	11.8	22.9	2.34	1.65	0.67	0.59	1.08：1：1.58
4	39.4	27.2	16.9	11.9	11.0	15.3	12.5	24.4	2.33	1.60	0.70	0.56	1.08：1：1.39
5	39.7	29.1	15.9	12.2	10.0	15.7	13.5	24.2	2.50	1.83	0.77	0.55	1.22：1：1.57
6	39.2	29.4	16.8	13.0	10.0	15.2	14.0	24.7	2.33	1.75	0.77	0.52	1.30：1：1.52
7	36.0	25.0	16.0	10.0	10.3	14.9	10.6	21.5	2.25	1.56	0.62	0.60	0.97：1：1.45
8	35.7	26.6	14.9	12.2	9.0	13.7	12.7	22.5	2.40	1.79	0.88	0.52	1.36：1：1.54
9	37.2	29.9	14.7	12.5	9.8	14.5	13.2	23.8	2.53	2.03	0.85	0.48	1.28：1：1.48
10	33.4	24.5	12.8	11.5	10.0	12.7	12.0	20.9	2.60	1.91	0.90	0.52	1.15：1：1.27
11	33.6	26.8	15.5	12.3	9.4	11.2	12.4	22.7	2.17	1.72	0.79	0.42	1.30：1：1.19
12	—	—	12.0	13.1	9.6	—	13.8	24.0	—	—	1.09	—	1.36：1：？
13	—	—	11.8	14.2	—	—	14.5	—	—	—	1.20	—	—
14	—	—	14.2	12.6	—	—	13.2	—	—	—	0.89	—	—
15	—	—	15.3	11.6	—	—	12.5	—	—	—	0.76	—	—
16	—	—	15.8	12.8	—	—	13.6	—	—	—	0.81	—	—
17	—	—	13.4	12.0	—	—	12.6	—	—	—	0.90	—	—
18	—	—	13.8	11.8	—	—	12.1	—	—	—	0.86	—	—
19	—	—	15.4	11.8	10.1	—	12.5	23.3	—	—	0.77	—	1.17：1：？
20	—	—	14.6	14.4	—	—	14.2	—	—	—	0.99	—	—
21	—	—	14.2	11.8	—	—	12.4	—	—	—	0.83	—	—
22	現存高 24.0	—	13.5	10.4	8.9	—	11.0	20.5	—	—	0.77	—	1.17：1：？
23	—	—	15.0	10.2	—	—	11.2	—	—	—	0.68	—	—
24	—	—	14.8	8.4	—	—	9.1	—	—	—	0.57	—	—
25	—	25.8	—	—	—	12.0	—	—	—	—	—	0.47	—
26	—	24.6	—	—	—	11.0	—	—	—	—	—	0.45	—
27	—	28.4	—	—	—	12.4	—	—	—	—	—	0.44	—
28	—	31.8	—	—	—	9.0	—	—	—	—	—	0.28	—

第8表 円筒埴輪観察表

No.	形態の特徴	成形	外面調整 基底部 1次	外面調整 基底部 再調整	外面調整 胴部 1次	外面調整 胴部 2次	外面調整 口縁部 1次	外面調整 口縁部 2次	内面調整 基底部	内面調整 胴部	内面調整 口縁部	胎土	焼成	色調	出土地点	備考
1	・やや直立気味の器形を呈し、他のものに比して器壁が薄い ・タガは風化して原形をとどめないがM字形を呈す 底端部が薄くなっている	・逆時計回りの巻き上げ	ナナメハケ	指ナデ 指頭圧	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	指ナデ 板ナデ	指ナデ 第2タガレベル以上に部分的にナナメハケ	指ナデ ナナメハケ	白色砂粒、ガラス質砂粒を多量に含む	良好	内外面：黄褐色 断面：青灰色	西側中段くびれ部南より	・一部須恵質 ・底端部外面に布目のような痕跡が残る ・風化著しい
2	・逆ハ字形に開くもので、器壁が薄い ・タガはM字形を呈す ・基底部は内面が中位から端部に向けて外方に開く	・逆時計回りの巻き上げ ・接合調整が雑で、粘土紐接合痕が明瞭	ナナメハケ	指ケズリ 指ナデ	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	指ナデ 板ナデ 指頭圧	部分的にナナメハケを施した後指ナデ	部分的にナナメハケを施した後指ナデ	4㎜大の小石、白色砂粒を多量に含む	良好	外面：黄褐色 内面：赤褐色 断面：白青灰色	西側くびれ部下段浮き	・外面一部須恵質 ・タガは風化が著しく原形をとどめない
3	・逆ハ字形に開く器形を呈す ・第1タガはM字形、第2タガは三角形を呈す ・底端部が薄くなっている ・ややタテ長の円孔	・逆時計回りの巻き上げ	タテハケ	板ナデ 指ナデ	タテハケ	なし	ナナメハケ	なし	指ナデ 指頭圧	指ナデ	指ナデ後ナナメハケ	5㎜大の小石、白色砂粒を含む	良好	内外断面：赤褐色	後方部東側下段斜面	・透孔は対称の位置になく大きくづれている
4	・逆ハ字形に開く器形を呈し、口縁部中位からさらに外反する ・タガは台形を呈す ・底端部は丸くおさまっている	・逆時計回りの巻き上げ	ナナメハケ	指ナデ	ナナメハケ	ヨコハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	板ナデ 指ナデ 指頭圧	指ナデ 部分的にナナメハケ	指ナデ 部分的にナナメハケ	3㎜大の細石粒を含む	良好	内外面：濃赤褐色 断面：明赤褐色	後方部東側下段中央	
5	・逆ハ字形に開く器形を呈し、第2タガからさらに大きく開く ・タガは台形を呈す ・基底部は第1タガから徐々に薄くなる	・逆時計回りの巻き上げ	ナナメハケ	指ナデ	ナナメハケ	ヨコハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	指ナデ 指頭圧	部分的に板ナデ、指ナデ	指ナデ 部分的に板ナデ、ナナメハケ	白色砂粒含む	良好	内外面：濃赤褐色 断面：不明	西側くびれ部②	・タガ、口縁端部やや風化している
6	・逆ハ字形に開く器形を呈し、第2タガからさらに大きく開く	・逆時計回りの巻き上げ？	ナナメハケ	板オサエ 指ナデ	ナナメハケ	ヨコハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	板オサエ 指ナデ 指頭圧	指ナデ	指ナデ ナナメハケ	小石粒を含む	良好	内外面：赤褐色 断面：暗褐色	後方部北側中央下段	・第2タガはヨコナデの際、下面に板をあてたものと思われる
7	・逆ハ字形に開く器形を呈す ・タガはM字形を呈す ・基底部は中位から徐々に薄くなる ・他のものに比べ口縁部長が長い	・逆時計回りの巻き上げ？	タテハケ	板ナデ 指ナデ	タテハケ	なし	ナナメハケ	ナナメハケ	板ナデ	指ナデ	指ナデ 部分的にナナメハケ	白色砂粒、金ウンモを含む	良好	内外断面：暗赤褐色	東側中段くびれ部	
8	・逆ハ字形に開く器形を呈し、第2タガからさらに大きく開く ・タガは三角形を呈す ・基底部は第1タガから徐々に薄くなる	・逆時計回りの巻き上げ	タテハケ	指頭圧	タテハケ	ヨコハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	板ナデ 指ナデ	指ナデ 板ナデ	指ナデ ナナメハケ	白色砂粒若干含む	良好	内外面：濃赤褐色 断面：赤紫色	不明	・口縁部端面に倒立させた時の痕跡が残る
9	・逆ハ字形に開く器形を呈し、口縁端部がさらに外反する ・タガは台形を呈す ・基底部は中位から徐々に薄くなる	不明	ナナメハケ？	指ナデ 指頭圧	不明	ヨコハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	指ナデ 指頭圧	指ナデ	指ナデ ナナメハケ	白色砂粒含む	良好	内外面：赤褐色 断面：暗褐色	後方部北麓下段中央	・内外面に少量の炭化物付着
10	・逆ハ字形に開く器形を呈し、口縁部中位から器壁が薄くなる ・タガは台形を呈す ・基底部は中位から徐々に薄くなる	・時計回りの巻き上げ	タテハケ	板ナデ 指頭圧	タテハケ	ヨコハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	指頭圧	板ナデ 指ナデ	部分的にナナメハケ 指ナデ	2㎜大の小石、白色砂粒を多量に含む	良好	内外面：薄青灰色～赤褐色 断面：薄青灰色	東側中段くびれ部番外④	・成形、調整ともに雑である ・風化著しい
11	・逆ハ字形に開く器形を呈し、口縁端部がさらに外反する。 ・タガは三角形を呈す ・基底部は端部が薄くなっている	・輪積み？	タテハケ	指ナデ 板オサエ 指頭圧	ナナメハケ	ヨコハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	指ナデ 指頭圧	指頭圧 板ナデ	指ナデ	白色砂粒含む	良好	内外面：濃赤褐色 断面：濃紫赤褐色	後方部東側中段北寄	
12	・第1タガから大きく逆ハ字形に開く器形を呈す ・タガはM字形を呈す ・基底部は第1タガから徐々に薄くなる	・逆時計回りの巻き上げ？	ハケメ	指ナデ 指頭圧	ナナメハケ	なし	ナナメハケ	なし	指ナデ 板オサエ	指ナデ	ナナメハケ 後、指ナデ	3～5㎜大の小石含む	良好	内外面：赤褐色～青灰色 断面：暗青灰色	西側中段くびれ部②	須恵質

13	・基底部は第1タガから徐々に薄くなる	不　明	不　明	指ナデ 指頭圧	ナナメハケ	ナナメハケ	——	——	指ナデ 指頭圧	指ナデ	——	3㎜大の小石、白色砂粒を多量に含む	良	内外面： 紫赤褐色 断　面： 灰　色	後方部北側下段中央立ち	・風化著しい
14	・基底部は第1タガから徐々に薄くなる ・タガはM字形を呈す	・逆時計回りの巻き上げ	ナナメハケ	指ナデ 指頭圧	ナナメハケ	ナナメハケ	——	——	指ナデ 指頭圧	指頭圧 上位ナナメハケ	——	白色砂粒を多量に含む	良　好	内外断面： 青灰色	後方部……	
15	・基底部は第1タガから徐々に薄くなる ・タガは台形を呈す	不　明	ナナメハケ	指ナデ	ナナメハケ	不　明	——	——	板オサエ 指ナデ	不　明	——	白色砂粒を多量に含む	良　好	外　面： 赤褐色～ 暗青灰色 内　面： 暗黒灰色～ 暗青灰色 断　面： 赤褐色	後方部北側下段中央、北麓下段西寄り	須恵質
16	・基底部は第1タガから徐々に薄くなる ・タガは台形を呈す	不　明	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	——	——	ナナメハケ	指ナデ	——	砂粒を多量に含む	良　好	外　面： 灰　色 内　面： 茶灰色	東側中段くびれ部番外⑤	・須恵質
17	・基底部は第1タガから徐々に薄くなる ・タガは台形を呈す	不　明	ナナメハケ	板ナデ	ナナメハケ	ナナメハケ	——	——	指ナデ	部分的にナナメハケ 指ナデ	——	砂粒を多量に含む	良　好	外　面： 赤茶色 内　面： 茶灰色	東側中段くびれ部浮き	・須恵質
18	・基底部は第1タガから徐々に薄くなる ・タガは台形を呈す	不　明	不　明	板ナデ	ナナメハケ	ナナメハケ	——	——	指ナデ	指ナデ	——	砂粒を多量に含む	良　好	内外面： 赤灰色	後方部北麓下段西寄り	・須恵質 ・風化著しい
19	・逆ハ字形に開く器形を呈す ・基底部は中位から徐々に薄くなり、底面は平坦を呈す ・タガは台形を呈す	・逆時計回りの巻き上げ	ナナメハケ	指ナデ 指頭圧	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	指ナデ 板ナデ	指ナデ	指ナデ 部分的にナナメハケ	白色微砂粒を含む	良　好	内外面： 赤褐色～ 青灰色 断　面： 青灰色	前面3区⑪	・須恵質
20	・基底部は中位から徐々に薄くなる	不　明	ナナメハケ	指ナデ 指頭圧	ナナメハケ	不　明	——	——	板オサエ 指ナデ 指頭圧	指ナデ	——	3㎜大の小石を含む	良　好	内外面： 赤褐色 断　面： 暗褐色	後部北麓下段西寄り	・風化著しい
21	・基底部は中位から徐々に薄くなる	不　明	不　明	不　明	タテハケ	ナナメハケ	——	——	不　明	不　明	——	1～3㎜の小石を含む	良　好	内外断面： 赤褐色	後方部西側下段中央	・風化著しい ・破片のため正確な傾きは不明である
22	・逆ハ字形に開く器形を呈す ・タガは三角形を呈す ・基底端部は薄くなっている ・やや小形	・逆時計回りの巻き上げ	タテハケ	指ナデ 指頭圧	タテハケ	ヨコハケ	タテハケ	な　し	指ナデ 指頭圧	板ナデ 指ナデ	指ナデ 部分的にタテハケ	白色微砂粒を含む	良　好	内外面： 薄青灰色～ 赤褐色 断　面： 青灰色	東側くびれ部中段番外①	・成形、調整ともに雑
23	・基底部は中位から徐々に薄くなる ・タガはM字形を呈し、低い ・底径に比して、基底部長が短い	不　明	ナナメハケ	指ナデ	ナナメハケ	不　明	——	——	指ナデ	不　明	——	微砂粒を含む	良　好	内外面： 明茶灰色	東側中段くびれ部浮き	・須恵質 ・風化著しい
24	・基底部は端部がU字形を呈す ・タガはM字形を呈し、低い ・底径に比して基底部長がやや短い	不　明	不　明	指ナデ	ナナメハケ	不　明	——	——	指ナデ	指ナデ	——	砂粒を多く含む	良　好	内外面： 赤灰色	後方部北側中央下段浮き	・風化著しい
25	・口縁端部は強いヨコナデにより内外面ともに凹んでいる ・タガは台形を呈し、やや高い	不　明	——	——	タテハケ	ヨコハケ	タテハケ	ナナメハケ	——	上位ナナメハケ	ナナメハケ	白色砂粒を含む	良　好	内外断面： 明赤褐色	西側下段南寄り②③	
26	・タガはM字形を呈し、高い	不　明	——	——	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	——	指ナデ	ヨコ方向に近いナナメハケ	砂粒を多量に含む	良　好	内外面： 明茶灰色	後方部東側下段斜面	・須恵質
27	・口縁端部が外反する ・タガはM字形を呈す	不　明	——	——	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	——	——	ナナメハケ	砂粒を含む	良　好	外　面： 赤灰色 内　面： 赤茶灰色	東側くびれ部	・須恵質
28	・口縁部長が口径に対して短く、第1タガから大きく外反する ・タガは台形を呈す	不　明	——	——	ナナメハケ	な　し	ナナメハケ	な　し	——	——	ナナメハケ	砂粒を含む	良　好	内外面： 明赤褐色	後方部北東下段斜面	

面はナナメハケ，内面は横方向に近いナナメハケで再調整され，指ナデ等によりハケメを消さないものである。筆者が実見したところ基底部全面にハケメを残す個体はこれ1点のみである。17，18は外面が板ナデ，内面は指ナデにより再調整されるものである。

19～24は基底部断面形が中位からV字形に徐々に薄くなる形態を呈すものである。19は外面に指ナデ・指頭圧を施し，内面は強い板ナデが用いられ，底端面は平担をなす。20は風化が著しく詳細は不明である。21は外面に指ケズリ，指頭圧が施され，内面は板ナデ・指頭圧が用いられる。22は外面下半に指ナデが施され，上半にハケメが残る。内面は指ナデが施され，底端部は内外面ともに指頭圧が用いられる。23は内外面ともに指ナデが施されるもので，底径に対して基底部長がやや短い。24は風化著しく詳細は不明である。

25～28は口縁部から最上段タガまでわかるものである。25は口縁部外面にナナメハケ，胴部にナナメハケの後2次調整のヨコハケが施され，内面は横方向に近いナナメハケが用いられる。27は口縁端部が大きく外反するもので，内外面ともにナナメハケが施される。28は口縁部が大きく外反し，他の個体に比べ，口径に対して口縁部長が短いものである。内外面ともにナナメハケで調整され，外面に2次調整は認められない。

（長嶺康典・昌子寛光）

註(1)　井上寛光「出雲の円筒埴輪」『松江考古』松江考古学談話会　第5号，1983。

(2)　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』日本考古学会　第64巻第2号，1978。

7.　土師器・土製品

前方部正面墳麓中央の地点から，竈の上に土師器甕が載っていたものがそのまま押しつぶされた状態で出土している。いずれも極細に砕けているので全体の形状や細部の特徴などについては把え難いが，大略次のようなものである。

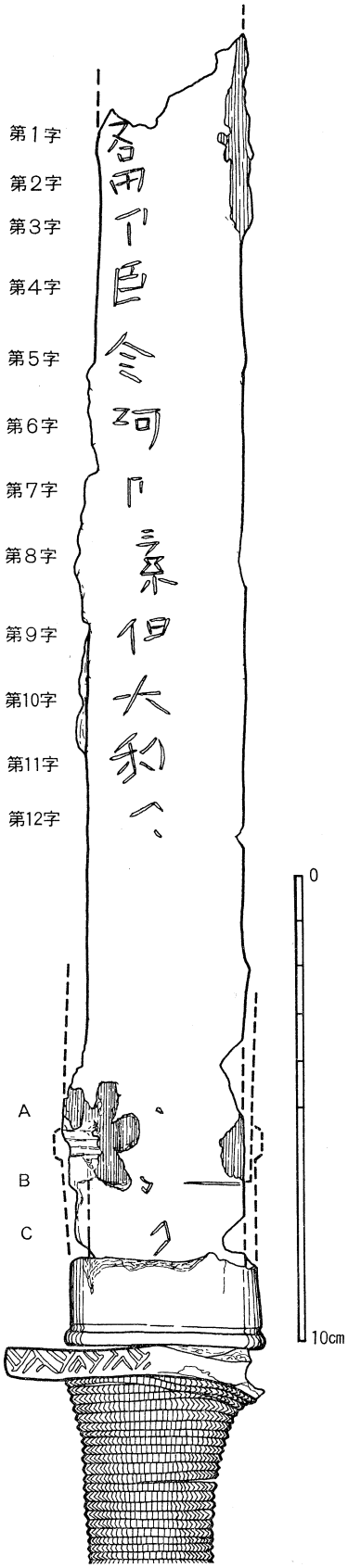
土師器甕（図版17—1，図版74—1）　口縁部は単純に「く」の字形に外反する。復元口径は18.3cmあまりとなる。口縁部は内外面ともにヨコナデ，胴部外面は縦方向のハケメ，内面頸部以下は斜方向の顕著なヘラケズリが施されている。胎土中に石英・長石等の砂粒を多くむ。焼成は良好で，黄褐色を呈する。口縁部内外面に黒斑がみられる。なお土師器甕の胴部片とみられる小片の外面には煤状のものが付着しているものもみられる。

竈（図版17—2，図版74—1）　図示し得たものは竈前面の鍔状部にあたるものである。土師質の焼上りで，表面は指によるナデ調整がなされている。胎土中に石英・長石等の砂粒を多く含む。焼成は良好で，暗黄褐色を呈する。

（松本岩雄）

第6節　銘　文　解　読

岡田山1号墳出土の大刀の銘文の釈読は，X線撮影フィルムと大刀そのものの実検との両者の方法を併用して行った。銘文の文字は線画のかなりの部分が欠落しており，その存在を確定できた文字数は12文字，そのうち釈読できた文字は第1字目，第2字目，第3字目，第4字目，第8字目，第10字目，第11字目の計7文字である。確定できた釈文は次の通りである。



第27図　銘文実測図

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
各田部臣□□□素□大利□

第1字目は全画が鮮明に残っていた。線画からみて「各」と釈読したが，第一画はX線フィルム等でも認められなかった。異体字で夂が又になる例はしばしばみられるので「各」と釈読して誤まりない。また意味からみて，大刀銘では各を額と通用させているが，額を各で通用している例は，藤原宮出土木簡，平城宮木簡中に用例がみとめられる。たとえば，次のような例がそれである。

1　各田□〔部ヵ〕（飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報五）
2　各田部里人□〔王ヵ〕（平城宮木簡三2915号）
3　（表）国□□〔哲多〕郡各田部里各田部虫□
　（裏）□□〔二人ヵ〕庸米
　　五斗八升　（平城宮木簡三3295号）

第2字目は，第五画（最終画）が確認できず不明であるが，字の結体からみて「田」と釈読してまちがいない。

第3字目は，全画のこっていて，「ア」と表されている。「ア」は日本の古代文字史料では「部」と通用され，「部」の省画された異体字である。「ア」の使用例は7～9世紀代の木簡，古文書等の文字史料にしばしば認められる。出土文字史料のうちで古い例としては，7世紀中葉のものとされる飛鳥京出土木簡の中に「大田ア」（大田部），「丈ア」（丈部），「長谷ア」（長谷部）などと落書き風に記されたものがある（橿原考古学研究所『飛鳥京二』）。また，日本以外の例では，百済の扶余で数例，使用例を認めることができる。その一つは，百済扶余発見の「百済前部銘標石」2点のうち，1点に

上ア　前ア
□自此以
□□□　（黄寿永『韓国金石遺文』による）

と記したものがある。この上ア，前アは百済末期に成立した行政区画とされている上部，前部にあたる。さらに扶余で発見された刻印瓦の中に「中ア乙瓦」「後ア乙瓦」「上ア乙瓦」などの刻印をもつものがあり，これらは，それぞれ中部，後部，上部を示し，前述と同じ行政区画を示す。したがって「部」を「ア」と省略する例は7世紀代の日朝両国において認めることができる。本大刀の「ア」の用例は，これらの日朝の「ア」の用例にくらてべやや先行した事例とすることができる。百済等では確実に6世紀代にのぼる例が未確認であるが，6世紀代にすでに「ア」という省画体が日本へ伝えられていたことを本刀の第3字目が示しているように思われる。

第4字目は，第六画が不明であるが字の結体としては「臣」と釈読してよい。同じ銘文である稲荷山鉄剣にみえる臣とは字体が異っている。

第5字目は，確認できる残画のみで想定すると令，今，彡などの文字が考えられるが，残画自体も不鮮明であり，3文字中のいずれともきめがたいので釈読しなかった。第6字目は河，阿等が残画からは想定し得る。しかし残画自体不鮮明で両文字のいずれとも定めがたく欠落した線画も予想されるので釈読しなかった。残画の現状では河としては扁の画数が不足し，阿としては第一画が欠失している。

第7字目は，残画からすると門がまえの文字が想定されるが線画の欠落があり残画も少く判読し難い。

第8字目は，第二画の縦線が欠落しているが，他の残画及び字の結体からみて「素」と釈読した。なお，この文字の中心部分は，刀身から欠落，分離していた小破片群を接合することによって釈読が可能になった。

第9字目は，線画に欠落があり残画も少く，また，文字の結体の全体も不明である。扁が人扁である以外には釈読不能である。

第10字目は，残画から判断して「大」と釈読できる。

第11字目は，残画からみて「利」と釈読した。

第12字目は，残画からは「刀」などの文字が想定でき第10字目，第11字目とつなげると，大利刀と釈読し得るが，線画の欠落があり残画が少なすぎるので釈読しなかった。

第28図　藤原宮跡(1)・平城宮跡(2)出土木簡

第12字目以下については，X線によって大刀の柄に近い部分に，銀線が認められたが，文字であるかどうかは確認できなかった。ただし，第12字目以下に，もともと文字の象嵌がなされなかったかどうかについては不明である。

以上が大刀銘の釈読の結果である。釈読可能な文字以外で，今回釈読しなかった文字についてもさまざまな文字の想定が可能であるが，線画の欠落，残画の過少さ等によって釈文を確定するにはいたらなかった。

以上の釈読の結果得られた文字史料としての注目すべき点は以下の通りである。

1，「各田」という記載は，8世紀におこなわれていたウジに相当する記載と考えられるが，このような後代のウジにあたる史料としては，本大刀銘は，もっとも古い例の一つである。ただし，隅田八幡宮人物画象鏡の銘文中には「開中費直穢人」という記載があり，この開中費直がウジの記載とすれば本大刀のウジの記載は二番目に古いことになる。

2，いわゆる部民制の表記としての「部」のもっとも古い史料である。ただし，部という表記のもっとも古い史料ではあるが，部民制等の成立がこの大刀銘より古く遡及する可能性を否定するものではない。

釈文の問題上特記することは以上の2点であるが，次に文字の書風についてその特色を述べると，次のような点を指摘できる。まず東大寺山古墳出土の銘文や石上神宮所蔵の七支刀の銘文には，あきらかに隷書を意識した文字になっている。江田船山古墳出土の大刀銘も，多少隷書の余風を残している。稲荷山鉄剣の銘文の文

字は隷書の意識はかなり失われており，むしろ六朝時代におこなわれた，隷書と楷書の中間の書風を示している。本大刀銘の文字は，以上に述べた銘文の書風からみるとやや新しい要素をもっている。しかし，当然のごとく隋唐時代に確立した楷書に比較すると，はるかに古様，古拙であって，六朝時代後半の影響をうけている可能性が高い。稲荷山古墳出土の剣銘と兵庫県箕谷2号墳の大刀銘文との間に位置するかと思われるが，書としては前者より後者の方に近い位置にある。（鬼頭清明）

第４章　岡田山２～７号墳の調査

第１節　岡田山２号墳

岡田山２号墳は，標高 23ｍあまりの丘陵上に築かれた円墳で，径 44ｍ，高さ 5.44ｍ ある。円墳としては県下３番目の規模[(1)]を有する大型古墳である（図版１・２・23・26・27・77）。２号墳の現状での墳裾（みかけの裾）から１号墳のテラス裾までは約 13ｍ，前方部先端までは約 30ｍ離れている。古墳はほぼ丘陵の平坦部に築造されているが，やや細かく見ると墳丘北側の方が標高約 24ｍ，南側が標高約 23ｍで，わずかに異なっている。墳丘上からは東方眼下に意宇川下流平野，北方に茶臼山（『出雲国風土記』に「神奈樋野」と記された山）を望むことができ，天候が良好であれば東方に遠く大山の秀峰をみることができる。

墳丘は，全体としては遺存状態が比較的良好で，二段築成の円墳であることが知られる。墳裾は南側が幅６ｍあまりにわたって残存しているのみで，その他はわずかずつ掘削されているようで，墳丘斜面が相当急角度になっている。特に墳丘の南東側裾部は，かつて宅地に造成されていたと思われ，直線的に掘削されている。現状で墳丘一段目の下端線と考えられる地点の標高は 23.124ｍ ある。そのほかは一段目下端線と推定できるところが遺存していないため，墳丘の直径は不明である。ただし，二段目はほとんど良好に遺存していることからその中心点を求め，先ほどの一段目下端線とこの二段目の中心点の距離を半径として復元すると墳丘の直径は 44ｍ あまりになろう。一段目上端線の標高は北側が 25.5ｍ，南側が 25.1ｍ で，ほぼ水平になっている。したがって，一段目の上端径は約 34.5ｍ，高さは約２ｍ となる。テラスの幅は 1.8～2.3ｍ ある。

二段目下端線は，標高 26ｍ あまりでほぼ水平であり，径は南北 30.8ｍ，東西 29.5ｍ ある。二段目下端線から墳頂までの高さは 2.4～2.6ｍ ある。墳頂部には径 15.5ｍ の平坦面があり，墳丘最高所の標高は 28.66ｍ を測る。墳丘裾が唯一確認できる南側墳裾の標高は 23.214ｍ であるから，この墳丘全体の高さは 5.44ｍ ということになる。このようにして求めた墳丘規模を整理して示すと下記のとおりである。

一段目　下端径 44.0ｍ　上端径 34.5ｍ　高さ 2.0ｍ

二段目　下端径 30.8×29.5ｍ　高さ 2.4～2.6ｍ　平坦面（二段目上端）径 15.5ｍ

テラス　幅1.8～2.3ｍ

墳丘の築成方法についてみると，一段目は大半が地山を削り出すことによってつくられ，二段目が盛土によって築かれているものと考えられる。というのは，１号墳発掘調査の所見からすると，１号墳前方部の地山の標高が 25～25.5ｍ と推定され，それは２号墳の一段目上縁端の標高にほぼ一致することから，２号墳の一段目あたりの高さまでは地山である可能性が高いものと判断されるからである。

墳丘表面は草木に覆われているので不明瞭であるが，墳丘中腹には貼石列の存在が認められるといわれる。また円筒埴輪の小片も少量ながら採集されている[(2)]。　（三宅博士，松本岩雄）

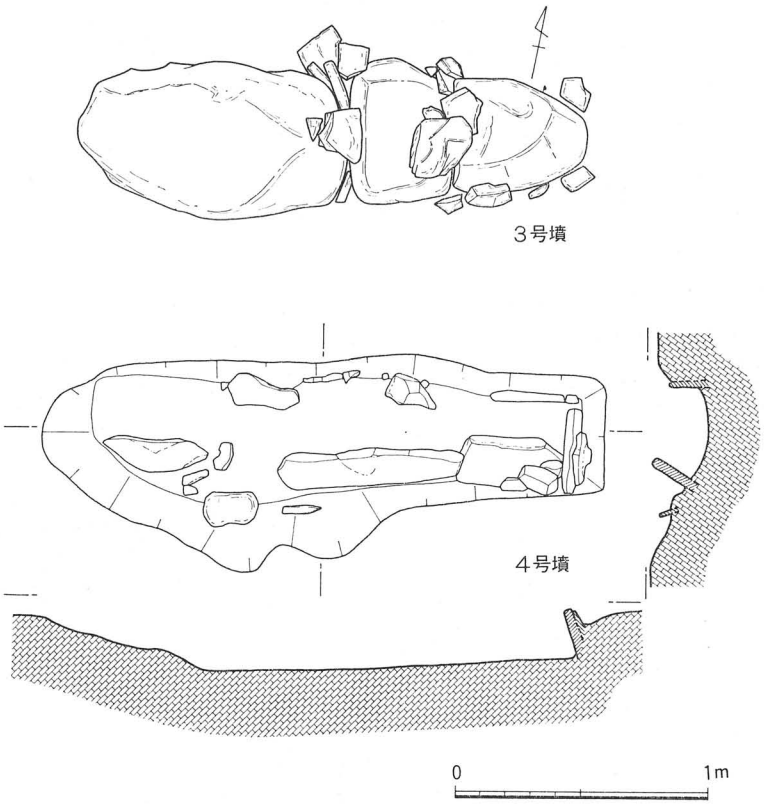
註(1)　益田市久城町に所在するスクモ塚古墳は，一般に全長約 100ｍ の前方後円墳といわれているが，円墳と方墳の２基の古墳である可能性が高い。このように考えると，円墳は径47ｍ，高さ７ｍあり，墳丘の北側に17×15ｍの造り出しを有するものとなる。このスクモ塚古墳を円墳として把えるならば，岡田山２号墳は県下４番目の規模ということになる。

なお，出雲における大型円墳については，本庄考古学研究室「出雲の主要古墳一覧」『山陰考古学の諸問題』（1986年10月）に掲載されている。

(2) 門脇俊彦「岡田山古墳群」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会，1975年3月

第2節　岡田山3号墳

3号墳は1号墳の造り出し部南麓に接して築造されている箱式石棺を主体とする古墳で，棺の主軸をほぼ東西方向に置いている。箱式石棺は約1.8mの長さのもので，床面には砂利を敷き詰め，前後壁各1枚，北側壁3枚，南側壁4枚の板状の野石を組合せたものである。蓋石には自然石3枚を用い，小石を目詰めに使っている。副葬品は全く無く，簡単な古墳である。墳丘は今日明瞭にはその存在を肯定し難いが，もとは上に墳丘があったのではないかと思われる痕跡がある（第29図，図版71）。（門脇俊彦）



第29図　3号墳石棺蓋石・4号墳箱式石棺実測図

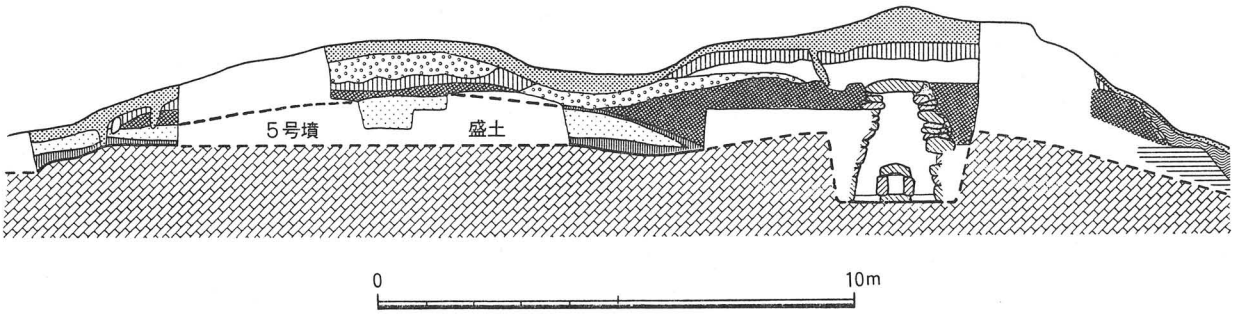
第3節　岡田山4号墳

4号墳は前述した1号墳の造り出し部上面の西南隅に築造された箱式石棺で，長さ約2m，幅約50cmの掘り形の中に板状の割石を並べて造ったものであるが，破損がひどく，蓋石も失なわれている。この古墳はおそらく1号墳の築造以前のもので，造り出し部上面を削平して整形した際に破壊されたものであろうと推測され

る。遺物は全く認められず，墳丘の存否についても不明である（第29図，図版72－1・2）。　（門脇俊彦）

第4節　岡田山5号墳

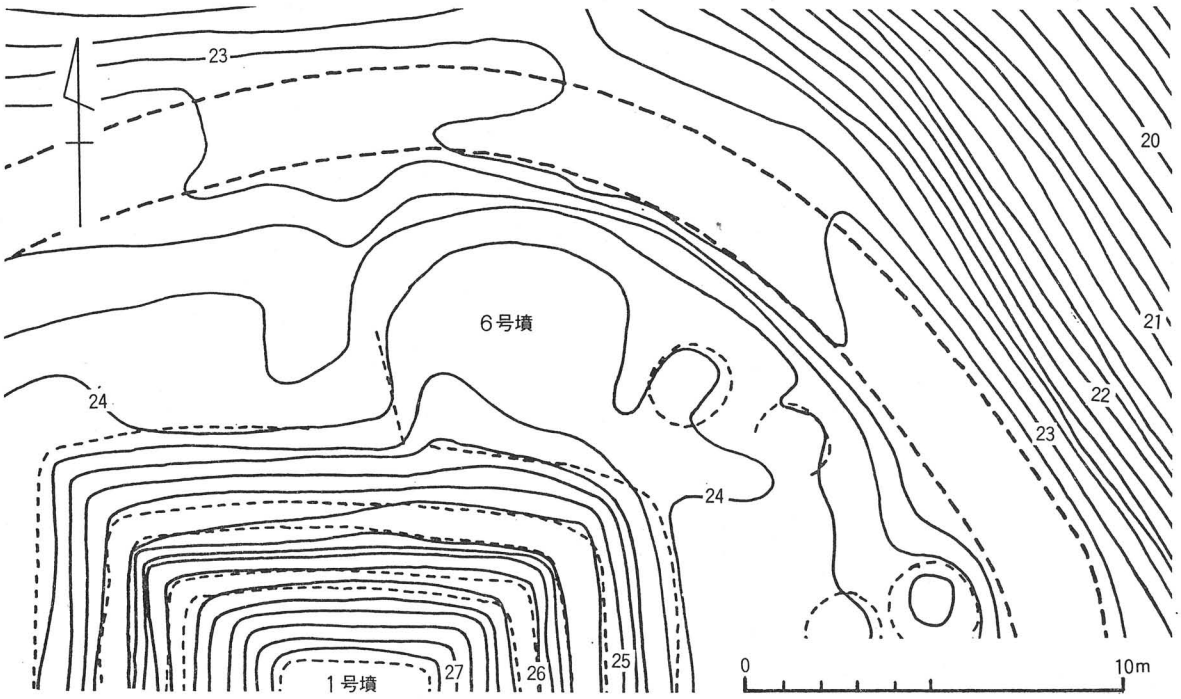
5号墳は1号墳の前方部の下に埋もれている古墳で，約12mの規模のマウンドを備えている。この古墳は木棺直葬墳であり，主体部の中に直刀一振りが副葬されていることが確認されている。なお1号墳の断面図でみると，墳丘の周囲に貼石が廻らされていた可能性もある（第30図，図版72—3・4）。　（門脇俊彦）



第30図　5号墳盛土状況土層断面図

第5節　岡田山6号墳

6号墳は1号墳後方部北麓東寄りに築造されている一辺約10mの方墳で，墳丘斜面には貼石が廻らされている。墳丘上面は二次的にかなり削り取られているので墳丘の高さについては不明であるが，現存する墳頂には木棺直葬の掘り形の存在が確認されている。しかし掘り形の内部は未調査であるのでその様相は明らかでない（第31図）。　（門脇俊彦）



第31図　6号墳墳丘実測図

第6節　岡田山7号墳

7号墳は岡田山丘陵の西北端に近い位置に築造されている古墳で，一時箱式石棺の一部が露呈していたために確認できたものであるが，その内容については一切不明である。　（門脇俊彦）

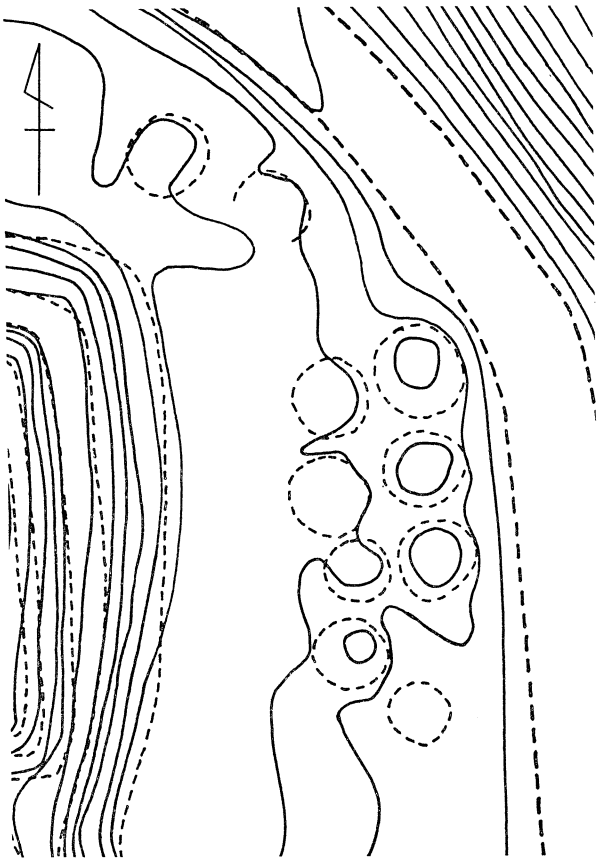
第5章　その他の遺構・遺物

第1節　遺　　構

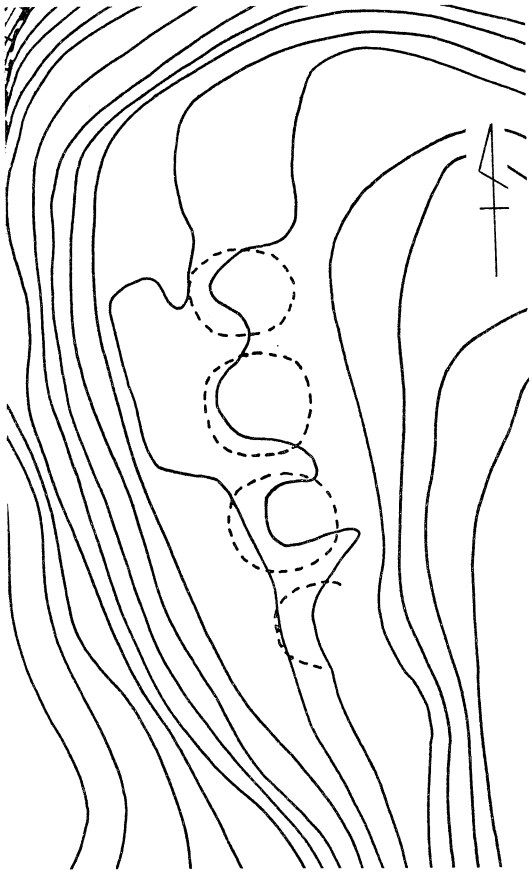
岡田山古墳群が位置する丘陵上にはこれまでに紹介してきた古墳のほかに10数個の小規模なマウンドが分布している。この小マウンドは，大まかにみると1号墳の後方部東側と，後方部の北西約20m隔てたところの2ヶ所に分布している。今，仮に後方部東側に分布するものをA群，後方部北西側に分布するものをB群としてその概要を記しておくことにする（第16・32・33図）。

A群としたものは現状では10個確認できる（第32図）。1号墳の後方部北東隅付近に2個並んで位置しその南側約3m隔てたところにマウンドの裾を接するようにして8個の小マウンドが築造されている。このうち中央部の6個は特に整然と並んでいる。小マウンドの平面形はいずれも円形を呈する。その規模は径1.6mから2.3mまであるが，多くは径2mあまりの同形同大のものである。高さは最も低いもので23cm，高いもので43cmある。

B群としたものは現状では4個確認できるが，かつてはさらに多く存在していたようである（第33図）。現



第32図　A群小マウンド実測図



第33図　B群小マウンド実測図

在確認できる4個のマウンドはいずれも裾を接するようにしてほぼ南北方向に1列に並んでいる。平面形はA群と同様円形を呈するが，規模は径2.2～2.6mあり，A群よりわずかに大きい。高さはいずれも30cmあまりを測る。

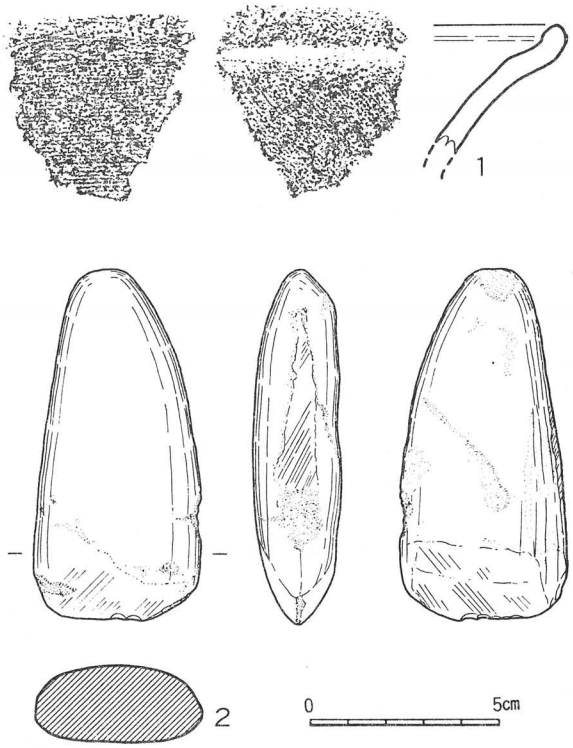
これらの小規模なマウンドは一般的には中・近世墓とされることが多いが，この丘陵上のものは1個も発掘調査が実施されていないのでその性格については現状では不明といわざるを得ない。　（松本岩雄）

第2節　出　土　遺　物

1. 縄文土器

1号墳前方部前面にあるテラスの東寄りから出土したものである。この土器に関係すると思われる遺構等は確認されていない。土器は口縁部の小片であるが，浅鉢形土器になるものと思われる。口唇部がふくらみ，内面に段を有する。器面の風化が著しく調整については不明瞭であるが，顕著な磨研はみられず，内外面ともにナデ調整が行なわれているようである。胎土中に砂粒を多く含む。焼成は良好で，外面暗黄褐色，内面灰黄褐色を呈する。岩田四類土器群[(1)]中に類似のものが認められることから，晩期前半のものと考えられる（第34図—1，図版74—1）。

註(1)　潮見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部研究紀要』18号1965年



第34図　縄文土器・石斧実測図

2. 石　　斧

1号墳後方部の東北下段斜面から出土した磨製石斧である。長さ9.2cm，幅4.4cm，厚さ2.3cmを測る。重量は122gである。刃部は両刃になっており，斜方面の擦痕がかすかにみられることからいわゆる縦斧と考えられる。表面は風化して赤褐色を呈しているが，内部は黒色である。石材は硬質の砂岩系のものである（第34図—2，図版74—1）。　（松本岩雄）

3. 墳裾埋納遺物

出土状態

墳裾埋納遺物としたものは，1号墳の後方部・北西隅墳裾で検出した中世～近世にかけてのものと考えられる石鉢・腰刀・磁器皿・土師質土器皿等である。これは1号墳丘の精査時に長径0.75m，短径0.45m，深さ0.3mあまりを測る楕円形プランを呈す土坑内から出土したものである（図版24・25）。

各遺物のうち石鉢は土坑短辺の壁に底部をもたせかけ横転した形で認められ，内部の土師質土器皿は横転あ

るいは口縁部をやや傾け，おり重なった状態で出土した。土師質土器皿は表面のものは土圧によって破片となっているものが若干あって，その間から磁器の小皿が伏せた形で存在することが確認された。

土坑掘方の縁に沿って腰刀1振が置かれていた。これは切先を先述した石鉢の口縁部に，刃部は外方へ向けられていた。

前述した遺物の出土状態からすると本来石鉢は土坑短辺に沿って正位置で置かれ，内の土師質土器皿等も同様に納められていたが，何らかの事情で土坑中央に向けて横転するような力が加わったものと推定された。前述したような力が加わったことにより，石鉢内に納められていた土師質土器皿が土坑中央に飛び出し，おり重なる形となったものであろう。土師質土器皿がもともと石鉢内に納められていた根拠としては，検出時に数枚が残存していたことがあげられよう。

土師質土器皿に混じって磁器の小皿が認められたが，現状では伏せた形で出土したものの，もとは他のものと同様に正位置の状態で石鉢内に納められていたものと推定された。

前述した遺物の埋納は出土状態から次のような順序によって行なわれたものと推定される。①楕円形土坑を掘る。②石鉢を土坑短辺沿いに正位置ですえる。③石鉢内に土師質土器皿・磁器小皿を納める。④石鉢を土坑中央に向けて横転させる。⑤石鉢・土師質土器皿等をそのままにして土坑を埋める。⑥土坑の掘方に沿わせて腰刀を置き，土をさらにかけて埋納を終了する。①～⑥に至る行為は土師質土器皿に風化が認められいなことから短期間に行なわれたものと推測される。

遺物の観察

石鉢（図版24-1・76）粗粒凝灰質砂岩製で，口径35cm・高さ15cm・深さ12cmを測るものである。器肉は平均3cmと比較的厚い。口縁部の一端は片口の形態に，底部は径18cmを測る平底に加工されている。

体部外面には，製作時の粗いはつり痕が認められ，内面は頻繁に使用されたため滑らかな肌となっており，各所に横方に走る擦痕が認められた。先の片口の加工や内面の使用痕を考えあわせると擂鉢のような役割をはたした容器であろうと考えられる。

磁器小皿（図版24-2・75）直径6.6cm，高さ1.8cmを測る小皿である。見込中央には藍色の呉須を用いた細線による二重輪と幅3mmを測る無釉の輪に囲まれて十字花文が描かれている。口縁は細かい波状を，また裏面底部は碁笥底の形態を呈す。この皿は口辺部の一部に細かい破損があるものの釉面には傷はなく，露胎部にも染み等は認められない。このことから焼成時から時を経ずして，あるいはほとんど使用されないまま埋納されたものと判断される。

腰刀（図版24-3・76）総長27cm・刃渡り20.6cm・身幅3cmを測る鉄製平造りのもので全体に銹化が著しい。身の厚さは3mm，反りは1.2cmを測る。茎は刃関・棟区とも明瞭な段をもち，茎尻に向って徐々に細くなっている。関に近い部分に柄材の一部とみられる木質が認められる。柄材が剝落した茎尻付近の茎断面は幅1cm，厚さ0.5cmの方形を呈す。

土師質土器皿（図版24-4～21・25・74—2・75）当地で俗に「カワラケ」と称されるもので，現在小片となったものもあるが，接合して確認しえた個体数は58個である。これらはいずれも淡白黄色を示す比較的焼成のあまいもので直径12cm前後を測る大形のもの41個（図版24-4～21，図版25-38～60）と，直径8.5cm前後を測る小形のもの17個（図版25-22～37）に大別できる。

前者は口径11.25～12.5cm・高さ2～2.5cmの範囲におさまるもので，多くは底部は丸底でしめられるが，一部にやや上げ底ぎみとなるものもある。体部の曲線は内湾しながら立ちあがり，口縁部付近でアクセントをもって外反し口唇に至っている。体部外面には口縁外反部直下から，底部にかけて著しい指頭圧痕が認め

られる。口縁付近から上端が外反するのは最終的な口縁部の調整によるものであろう。

内面には見込みと体部立ちあがり際に沿って，いわゆる「の」の字状ナデ仕上げ痕がみられる。内面の仕上げに際しては見込み面を横方向ナデの後にその周囲を右回りに「の」の字状ナデ仕上げとしている。見込み面が円板状に隆起してみえるのはこのナデ仕上げの折に生じる結果であろう。

後者とした小形のものは口径8～9cm・高さ1.5～2.4cmの範囲におさまるもので，一部の底部裏面に指頭大の凹をもつもの（図版25-24・28・31）があるが，他は断面半円形を示す丸底となっている。外面の口縁部直下から底部にかけて著しい指頭圧痕が認められるのは前者大形品と同様である。見込み面に円板状隆起はみられず，指頭大の凹をもつもの（図版25-24・25・26・31・34）がある。器面の調整は図版25-23に見られるように見込み面を横ナデし，後に周囲を右回りに「の」の字状にナデ仕上げとしている。このように同様な手法によりながら口唇部の造りに若干の相違がみられるが，これは工人の癖によるものであろうか。なお前述した土師質土器皿の中に部分的に炭化物の付着が認められた（図版25-22・25・26・29～31）。これは灯芯を置いた痕跡とされるものに類似している。

埋納時期とその性格

これまで岡田山1号墳北西隅墳裾出土の中世～近世遺物について，その出土状態・遺物の観察を行なってきた。これらは一括埋納の良好な資料と云えるが，出土した遺物のうち石鉢・腰刀・磁器小皿は特に伝世する要素が大きく，また共伴した土師質土器皿も当地において編年が確立しておらず的確な時期の決定は困難である。

ただ磁器小皿は釉の面に使用痕が認められないことなどから，長期にわたって伝世したものではないことがうかがえた。同資料のような見込みに十字花文を描く磁器は16世紀を中心とする舶載磁器に多く認められるものであることから，埋納時期もほぼこのころとして大過ないと思われる。

ところで，これと同様な遺物組成の出土例は容器を石鉢にこだわらなければ，県下では10例をかぞえる。いずれも土師質土器皿を多数伴出する点に共通点があり，なかには古銭を納めた例も知られる。

これら埋納の意図については明確に論じられたものを聞かない。これは遺物の出土が不時発見とか，明確な遺構に伴わない例が多く検討の手がかりが少なかったからであろう。ただ古銭には古くは宋銭，新しくは寛永通宝を伴う例があり，中世から近世のある時期にかけて長期にわたって行なわれたものであることがうかがえる。これらは従来，古銭や土師質土器皿が伴うことから古墓に想定されがちであったが，埋葬にかかわる形跡は認められず，人里はなれた丘陵端部や斜面で検出されることが多いことも注意すべきことと云えよう。

以前岡田山1号墳裾出土遺物について，磁器小皿の「十字花文」を輪宝墨描土器の代用ではないかと想定し，一種の「鎮めもの」ではないかと考えたこと[(1)]がある。類例を俟って検討すべきことと云えよう。（三宅博士）

註(1)　三宅博士「土師質土器を伴う石鉢について」『島根考古学会誌』第2集　1985年

第6章　遺構・遺物・銘文の検討

第1節　岡田山1号墳の儀仗大刀についての検討

1　儀仗大刀の概観

古墳時代の大刀のうち，外装に美しい文様を施しその豪華さの強調を主眼にした大刀を，文様が少なく実用本位らしい一般の大刀に対して装飾大刀とか儀仗大刀とよんでいる。儀仗大刀の範疇に属するものの多くは，外装を金・銀・銅・鉄の金属部品で飾るものである。それらは条件さえよければ古墳の副葬品として残りうるものだが，金属部品を用いない木材のみの外装(木装)の場合にはよほど保存条件がよくなければその形をたどることはできない。時折発見される大刀の木装具には，直弧文の文様を彫刻したり朱や黒の漆で彩色するものがあり，実用大刀と儀仗大刀との区別は曖昧であり，かつ容易でないのが実状である。[(1)] それはともかくとして，岡田山1号墳からは金属の加工部品で外装を装飾した種類のことなる3本の儀仗大刀が出土していることは，すでに述べられている。1．金銅装三葉環頭大刀，2．銀金銅装円頭大刀，3．鉄地銀象嵌円頭大刀（「額田部臣」銘大刀）である。それらの個々の形状や特色についても，出土遺物の章で詳しく述べられているので再述しない。ここでは，3本の大刀が岡田山1号墳の性格に肉薄する重要な資料であることから，儀仗大刀のなかでそれらの大刀がどのように位置づけられるかという点について，まず儀仗大刀の流れを概観してみよう。

筆者は3世紀末から7世紀に至る古墳時代の儀仗大刀の発展段階について，大雑把に6段階に区別している。ここでいう段階とは変化の開始をしめすものであって，ことなる段階の儀仗刀がある期間平行して存続することを前提にしている。実年代の比定には，百済・武寧王陵出土の環頭大刀と兵庫・箕谷古墳出土大刀の年代を根拠にし，新納泉・穴沢咏光・馬目順一らの環頭大刀に対する編年を参考にしている。[(2)]

(1)　第1段階―倭風大刀

初期古墳の副葬品の中核となる鉄剣の外装は一般的には木装なので，おおくの場合外装の形骸をとどめていない。しかし，辛うじて柄の外装をとどめている例からすると，柄の材を1木からとり1木口から茎孔を刻込んで剣の茎を着装する。柄の外形は鍔と柄頭の平面形を杏仁形にかたどり，鎚に糸を巻き柄間に節をつくり，全体を直弧文など浮彫り風の文様で飾る。こうした鉄剣の外装は，弥生時代の青銅短剣の外装に起源している。

この剣の外装を大刀に応用して倭風の大刀外装が成立する。大刀の場合にも1木から鎚・鍔・柄間・柄頭からなる柄を丸彫りでつくるが，柄の棟方に溝を彫り込んで茎を装着する「茎落し込み法」が特色であるとともに，1木を二つ割りしてつくる鞘木の鞘口と鞘尻を丸彫りで別作りにした部品でとめる。柄頭・鍔・鞘口・鞘尻は杏仁形ないしはそれに類する平面形をとり，直弧文などの文様を浮彫りにするものもある。こうした外装が成立するのは，3世紀末から4世紀にかけての時期に想定される。その後，装具に鹿角や金属を用いるなど，時々の変化をとげながら6世紀まで，倭における基本的な刀装具として存続する。[(3)] 本来ならば，以下の諸段階に従って変化を指摘しなければならないが，現段階においては分析の余裕がないのでそのままにしておく。

(2)　第2段階―漢式環頭大刀

環頭大刀は柄頭を環形につくるとこから名付けられているのだが，刀身から柄頭までを鉄で一体につくる場

合と，柄頭と刀身・茎とを別作りにする場合がある。前者には柄頭が環だけのもの(素環)と，三葉形の飾りを環内に施したもの(三葉環)に区分されている。後者には柄頭を銅・金銅で別につくり，鉄の茎に鋲で連結したものがある。中国でつくられたらしい鳳凰環のほか，確実に倭で製作した家屋環・三葉環がある。環頭大刀の柄は鉄の茎に直接糸巻するものもあったらしいが，茎に柄木を装着しそのうえから糸を巻いた。この場合，柄木は2枚の板で茎をつつむ形につくる(2枚あわせの柄木)。中国の例からすると鍔がつかず，柄元が鞘口に入り込む呑口式大刀である。[4]

類似品が中国や朝鮮の漢墓から発見されることから漢式環頭大刀というのであるが，日本出土の遺物には年代の決手がなく，年代的には後漢代から5世紀の南北朝時代までの比較的長期間を考慮しておかねばならない。一方，こうした環頭大刀の出現が契機になって，第1段階の倭風大刀が成立した可能性が高い。

(3)　第3段階―百済系儀仗大刀

外装具の基本的な構造は第2段階と同じ環頭大刀・呑口式の大刀のほか，縁幅が狭くて厚みのある鍔（喰出し鍔)がつくのもがある。柄には柄元金具・筒形金具，鞘には鞘口金具・鞘尻金具をつけるが，いずれも横断面が到卵形を呈する筒形の金具である。環頭と茎を共作りにする鉄製のものしか発見されていない。環頭には単純な素環・三葉環のほか，鉄地に銀象嵌の文様を施すものが韓国の伽耶地方や日本の古墳から発見されている。珍しい例としては，鉄地の環の外面を銀象嵌と貼金の文様をあしらい内面に銀板をまき，環内に銀かぶせの蕾形飾りをはめ込んだ豪華なものがある(鉄地の環は鋳造品の可能性がつよい)。韓国・百済の古墓からも類似の金銀象嵌を施した優品が出土している。このような大刀は，日本の5世紀第3四半期から6世紀第1四半期の頃の古墳から発見され，5世紀後半に百済・伽耶地方から移入されたものと推測される。

(4)　第4段階―伽耶・南朝系儀仗大刀

環頭大刀と円頭大刀とがあり，前者はA・B・ABの3種類にわかれ，後者はA・Bの2種類にわかれる。年代に多少の出入りがあるにせよ5世紀第3四半期から6世紀第2四半期にかけての頃に盛行したようである（第38図)。

A型環頭大刀　伽耶系の儀仗大刀である。外装具は基本的には前段階と同じ。装具を鉄地でつくりその上から金・銀の薄板を張りつけたものと，銅の地金に金鍍金を施したものがあるが，ともにロウ型の鋳造品で浮彫り風の文様を鋳出す。呑口式の大刀が一般的であるが，まれに喰出し鍔をつけるものもある。環体の外面に走竜，環内に別鋳の双竜・双鳳・単竜・単鳳の立体的な中心飾りを挿入する。柄元金具・筒金具・鞘口金具には，同じ構図の交竜文をいれているが，鞘尻の金具には文様を施さない。柄間には紐をまねた金線や銀線で巻いている。なかには，佩き表に鞘口金具と鞘尻金具を結んで細い文様板(佩飾板)を飾るものがある。韓国の伽耶地方の古墳から多く発見されており，日本での出土例は少ない。穴沢咏光・馬目順一の研究では8形式に分類され，北魏・高句麗の系譜をひき，[5]百済でつくられ伽耶の豪族達に配布されたものと考えられる。

B型環頭大刀　中国の南朝系儀仗大刀である。外装の基本構造はA型と同じくする環頭大刀だが，装具は原則としてA系列よりも優美な文様をほどこした金銅の鋳造品である。環頭は環体と中心飾りとをロウ型で共作りし環足が長く，中心飾りは双鳳と単竜が知られている。また，鞘の横断面を八角形にするのもこの大刀の特色。いまのところ，百済の武寧王陵と群馬県の古墳から出土したもののほか3例が確認されるが，前者については南朝梁の王室から百済王に冊封されたときに賜与されたものと想定し，南朝系儀仗大刀とよぶのである。

AB型環頭大刀　A型環頭大刀とB型環頭大刀の特色を合わせてもつ環頭大刀である。大刀の外装は原則としてB型と同じ。環頭は鋳造の金銅製品。環の中心飾りは環体と一体に同鋳し，環足が短く柄木のなかで茎と分離することになる。中心飾りの大半は竜・鳳凰文である。製作地については百済を想定している。

円頭大刀　柄頭の飾りが円頭であることを除くと，外装の構造は原則として環頭大刀と変わらない。しかし，竜・鳳凰文の加飾はおこなわれず，どちらかといえば質素で実用的である。円頭は銀板を打出した表裏2枚の匙形品を合わせたもの(A型)と，銀や鉄の板で筒形につくったもの(B型)があり，後者には鉄の地金には金銀の象嵌を施したものもみとめられる。環頭大刀が基本的には鉄地金貼ないし金銅装であるのに対して，円頭大刀が銀装であるのが対称的である。いまのところ出土例は少ないが，伽耶地方で主として発見されているので伽耶系儀仗大刀に含める。

(5)　第5段階―倣南朝系儀仗大刀

環頭大刀と円頭大刀がある。この段階の前半には百済・伽耶の製品であるが，後半になると倭国で模倣したものが主流となる。時期はおよそ6世紀第3・4四半期にあてられる(第38図)。

環頭大刀　前半ではAB型環頭大刀の形態をうけついだ単竜・単鳳環がつく金銅装の呑口式が主流となり，これに少数の獅喰・三葉環のつくものが混じる。筒金具・柄元金具・鞘口金具から竜・鳳凰文の装飾が消失し，金具の上下に簡単な綾杉文や円文をいれた帯状の責金具がつくにすぎない。一方，鞘飾板の文様は簡略化し，鞘全体を鱗状文（C字形文）を打出した銀板で包むものもある。後半になると，足金物をつけるものが出現する。竜鳳文は退化し文様は一層簡略化するが，鞘の全体を金銅板でつつむものが一般化する。環頭は2枚合わせの鋳型（土型か）で鋳造するが，双鳳環では環内の向いあう鳳凰を別につくって環体と組み合わせる。単竜・単鳳環では環体と中心飾りを共作りするが，細部の細かな文様には鋳造後にタガネで彫刻してあらわす。少数ではあるが，新羅で発達した方形三葉環頭大刀・三繋環頭大刀も移入されて存在する。

円頭大刀　A・B型がともに存続。前半では前段階の円頭大刀の形態を踏襲するものと，装飾の少ないものがある。前者は百済・伽耶の製品で環頭大刀と共通する外装をとる。後者は銀・金銅装ではあるが，製作地については不明。後半では第1段階以来，引きつづいて作られてきた「茎落込み法」の柄を特色とする倭風大刀に百済・伽耶形式の円頭大刀の要素を加味して，倭式円頭大刀とでもいうべき新しい儀仗刀を形成し，頭椎大刀も登場する。主として銀の板や象嵌で飾る点は前段階と同じである。なお，この段階の円頭大刀には足金物がつかない。

(6)　第6段階―倭製儀仗大刀

環頭大刀と頭椎大刀が主流となり，それに各種の形を異にする儀仗大刀がくわわり，足金物をつけることが原則となる。時期は7世紀第1四半期頃である。

環頭大刀は前段階の後半に出現した倭製儀仗大刀の諸要素を誇張したもの。全体に文様の簡略化がすすみ，基本的には打出しとタガネの列点で文様をほりつける。環頭の環体は鋳造だが中心飾りの双鳳文は，厚手の銅板を切抜いて環体にはめこむ。喰出し鍔がつき，作りはひ弱だが全体に肥大化の傾向をたどる。

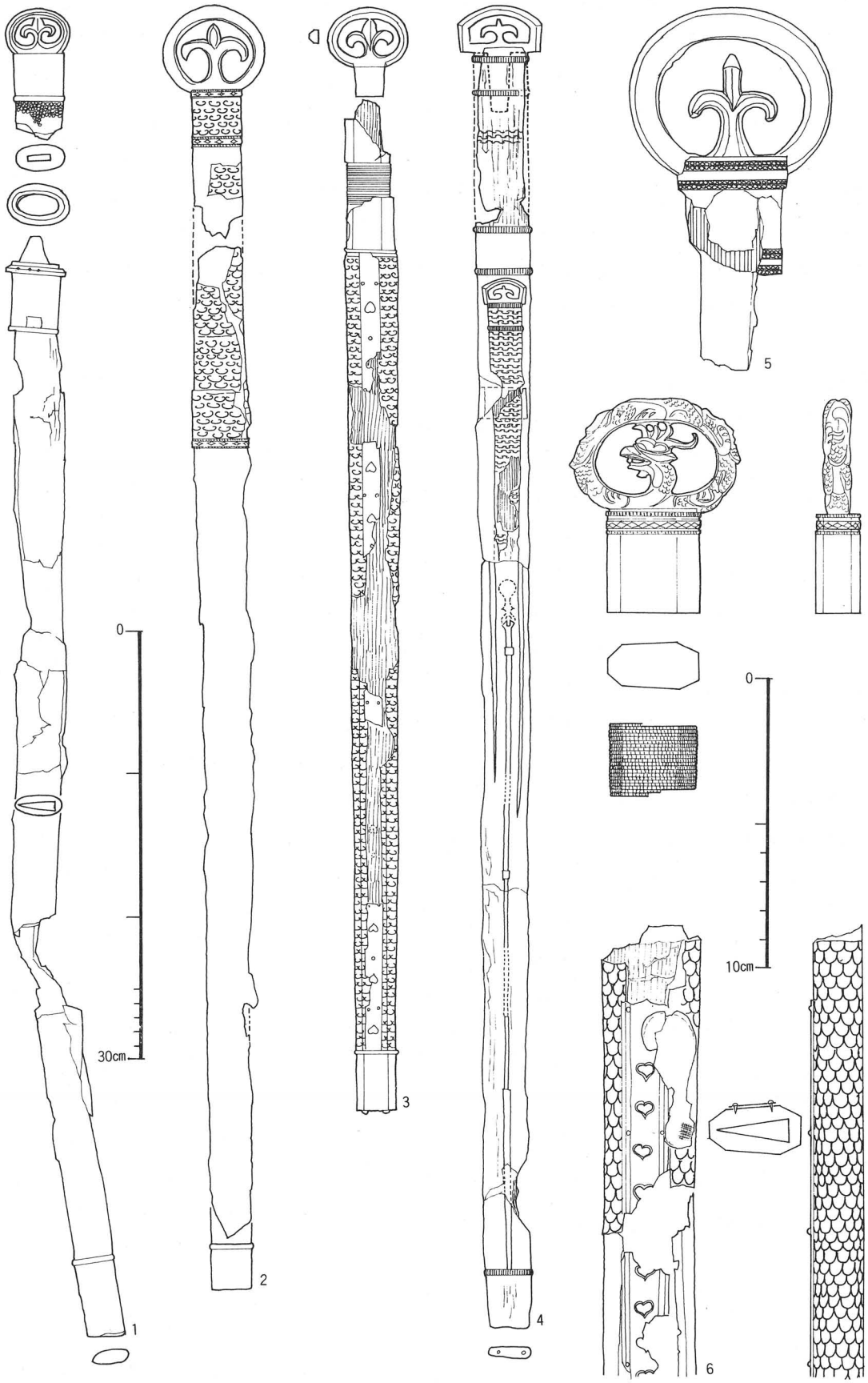
この段階でも金銅のB型柄頭をそなえた円頭大刀はなお残存するが，円頭大刀から派生した金銅装の頭椎大刀が発達し，定型化するとともに柄頭が球形状を呈する以外は，ほぼ環頭大刀と同じ外装具である。

この段階には，鉄地銀象嵌の円頭大刀，圭頭大刀，方頭大刀が盛んに作られる。それらは，環頭大刀・頭椎大刀にくらべて装飾が少なく頑丈で，なお実用性を保持している。

2　金銅装三葉環頭大刀と銀金銅装円頭大刀

(1)　金銅装三葉環大刀（第35図―3）

この呑口式大刀の特色は，パルメットの三葉をあしらった環頭，金銅板と銀線を交互に巻いた柄間，C字文を打ち出した銀板で包みその合わせ目にハート形の透彫り文（猪目）をいれた鞘飾板で飾った鞘にある。



第35図　環頭大刀実測図

パルメットの表現は立体的で，中心の芯と左右の葉とがはっきりと区別されている。その表現は朝鮮旧平壌兵器廠出土の高句麗の遺例[6]に類似し（第35図-1），韓国の新羅・伽耶地方から発見されている三葉環頭大刀とは表現がことなっている（第35図-4）。高句麗の例は柄幅に対して環頭が小さく，装着する金銅の喰出し鍔は熊本・江田船山古墳の銀製喰出し鍔に類似しており，5世紀に遡る可能性がつよい[7]。環体の形は岡田山1号墳よりも少し大きいが，パルメットの表現が似ているのが福井・丸山塚古墳[8]（第35図-5）と奈良・珠城山古墳[9]（第35図-2）の三葉環頭大刀である。伽耶・新羅の古墳からしばしば三葉環頭大刀が発見されるが，例えば慶州・皇南大塚北墳の例[10]（第35図-4）にみられるように，パルメットの中心飾りが板状を呈し，芯と左右の葉を区別する彫込みの線がみられず，左右の葉が極端に垂下している。そうした点からすれば，岡田山1号墳を始めとする日本の3例は高句麗の例に近い古式をとどめているようであり，同じ三葉文でも系統を異にしているのかもしれない。

鞘のC字文打出し銀板とハート形透彫り（猪目）の鞘飾板は，単竜環頭大刀にも見受けられる装具である。千葉・山王山古墳の単竜環頭大刀はその好例で，C字文打出し文の銀板ばかりでなく，ハート形の透彫りを縦に並べるだけで幾何学文の刻線文を省いた鞘飾板も共通している[11]。C字文は穴沢・馬目の鱗状文の分類[12]にしたがうと，B類にぞくすることになり，この点でも山王山古墳と共通していることになる。同様の鞘飾板は，鞘にA類の鱗状文を施した銀板で包む静岡・宇洞ヶ谷横穴の単鳳環頭大刀[13]にも認められるところである（第35図-6）。この点からすれば，この三葉環頭大刀は山王山古墳や宇洞ヶ谷横穴の単鳳環頭大刀とほぼ時期を同じくしてつくられたことになる。

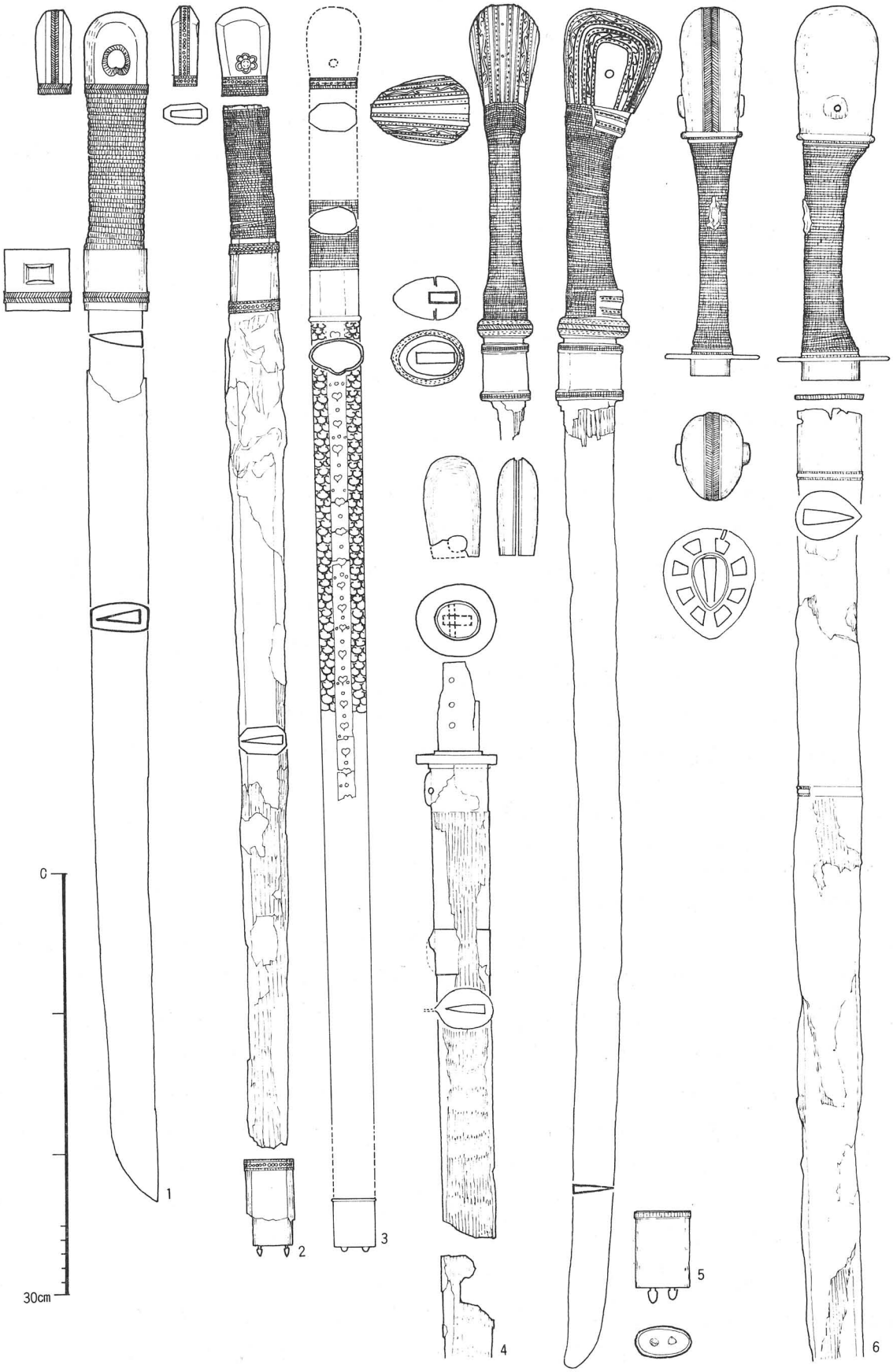
ちなみに，新納泉はこの2例の環頭大刀を単竜・単鳳環頭大刀Ⅳ式とし，6世紀後葉から末の年代を与えている。また新納の説をうけて立論する穴沢咏光・馬目順一は，単竜・単鳳環頭大刀の第3段階（550～580年）の前半においている[14]。それは筆者のいう第5段階前半の百済製の儀仗大刀にぞくし，前段階のAB型環頭大刀から変化したものである。このようなことから，岡田山1号墳の三葉環頭大刀は新羅でつくられたものではなく，6世紀中葉に百済でつくられたものと考えたい。

(2)　銀金銅装円頭大刀（第36図-2）

この大刀の円頭と鞘尻金具はすでに失われてはいるが，京都大学所蔵の写真によって銀板打ち出しの円頭が装着された呑口式の大刀であることがわかる。柄間に銀線を巻き，上下に責金具をはめた金銅の鞘口金具をつけ，鞘飾板を欠いてはいるが，さきの金銅装三葉環頭大刀と外装の作りが似ている。写真によって，円頭が2枚の匙形に打出した銀板をあわせ，その継目を銀ないしは金の文様帯で飾ったことがわかる。このような銀板2枚合わせのA型円頭大刀は，日本での出土例が少なく静岡・宇洞ヶ谷横穴[15]，奈良・鴨山古墳[16]の例があるにすぎない。韓国の例としては，昌寧校洞11号墳[17]，東萊郡連山里[18]からの出土例が有名であり，武寧王陵の刀子[19]のなかにも類似品がある。

宇洞ヶ谷横穴例（第36図-4）　鉄の喰出し鍔をつけ，鞘口とその下方につける金銅金具によって横佩きにするようだが，この場合には刃方を上に向けて佩くことになるのでおかしい。滝瀬芳之は銀・金銅装の円頭大刀を6型式にわけ宇洞ヶ谷横穴例をⅡ式とし岡田山1号墳例よりも若干時期を遅らせている。岡田山1号墳例との共通点は，銀板を打ち出してつくる柄頭と2枚合わせの柄木であり，相違点は全体が大振りで鉄の鍔と鎺をそなえそれに銀嵌文様をほどこしている点にある。類似品が韓国に例がなく倭でつくられた可能性がたかい。同じ墓から第5段階前半の単鳳環が出土しているので，それと同時期ないしは少し遅れるものであろうか。

鴨山古墳例（第36図-3）　発見当時から多数の破片になっていたため，報告書から原形をうかがうことは容易でなかったが，最近になって実物を見る機会を得たのでおよその見当をつけることができるようになった。



第36図　円頭大刀実測図 (1)

儀仗大刀の外装具としてはつぎのようなものがある。

1，柄間を巻いた銀線（コイル状に巻いた原形をとどめる破片もある）。2，柄頭と銀線巻との間にはめたらしい責金具（銀板に金貼）。3，柄元金具の銀板。4，鞘口金具の銀板。5，金銅責金具（吊手のためか1面が突起する）。6，鞘を巻いた銀板（鱗文を裏から打出す）。7，鞘飾板の金銅透彫り板（裏から銀板をあてる）。8，鞘尻金具（鉄製）。9，蟹目釘（3本のこる。8の金具にともなうことは木質の残り具合からみて確実である）。

残念ながら，報告で「圭頭式刀剣の把頭の木心と推せられる残欠」といい，円頭大刀の根拠になった柄頭の木心は残存していない。鞘口金具に当てる銀板は1木口がわずかに反りあがっており，責金具がついた痕跡はない。円と菱形の凹文をほどこした責金具は1個体分が残っているが，柄間の銀線巻に接して柄頭の木芯に重なって残ったものと考えるのが合理的である。環頭大刀の場合ならば必ず存在するはずの筒金具がない。以上のことから，円頭大刀であったと考えることに支障はない。柄頭を欠くとはいえ，鴨山古墳例の外装具は岡田山1号墳の三葉環頭大刀と銀金銅装円頭大刀によく類似しており，第5段階前半の百済ないしは伽耶の製品とすべきである。

韓国の昌寧校洞11号墳と連山里例（第36図-1）　柄頭は平面形が偏平な楕円形を半切した形をとり，武寧王陵の刀子に似ている。穴沢・馬目は昌寧校洞11号墳の年代を5世紀の末期に置いているようである。[20] 連山里の古墳から鉄製三角板鋲留短甲と鉄製縦矧板鋲留眉庇付冑が伴出していることを信じるならば，これも5世紀後期から6世紀初期にかけての遺物となる。それらにくらべると岡田山1号墳例の柄頭は，先端の幅と厚さが銀線巻に接する基端のそれよりも広く厚く若干肥大化しており，これは新しい要素とみるべきである。

以上のことから，岡田山1号墳の銀金銅装円頭大刀の年代は三葉環頭大刀と同じく儀仗大刀第5段階前半に位置づけられ，6世紀第3四半期に置かれることになる。ちなみに滝瀬芳之は岡田山1号墳の円頭大刀をⅠ式（5世紀後半から6世紀中葉）にあて，無鐔釣手佩用円頭大刀とよんでいる。[21]

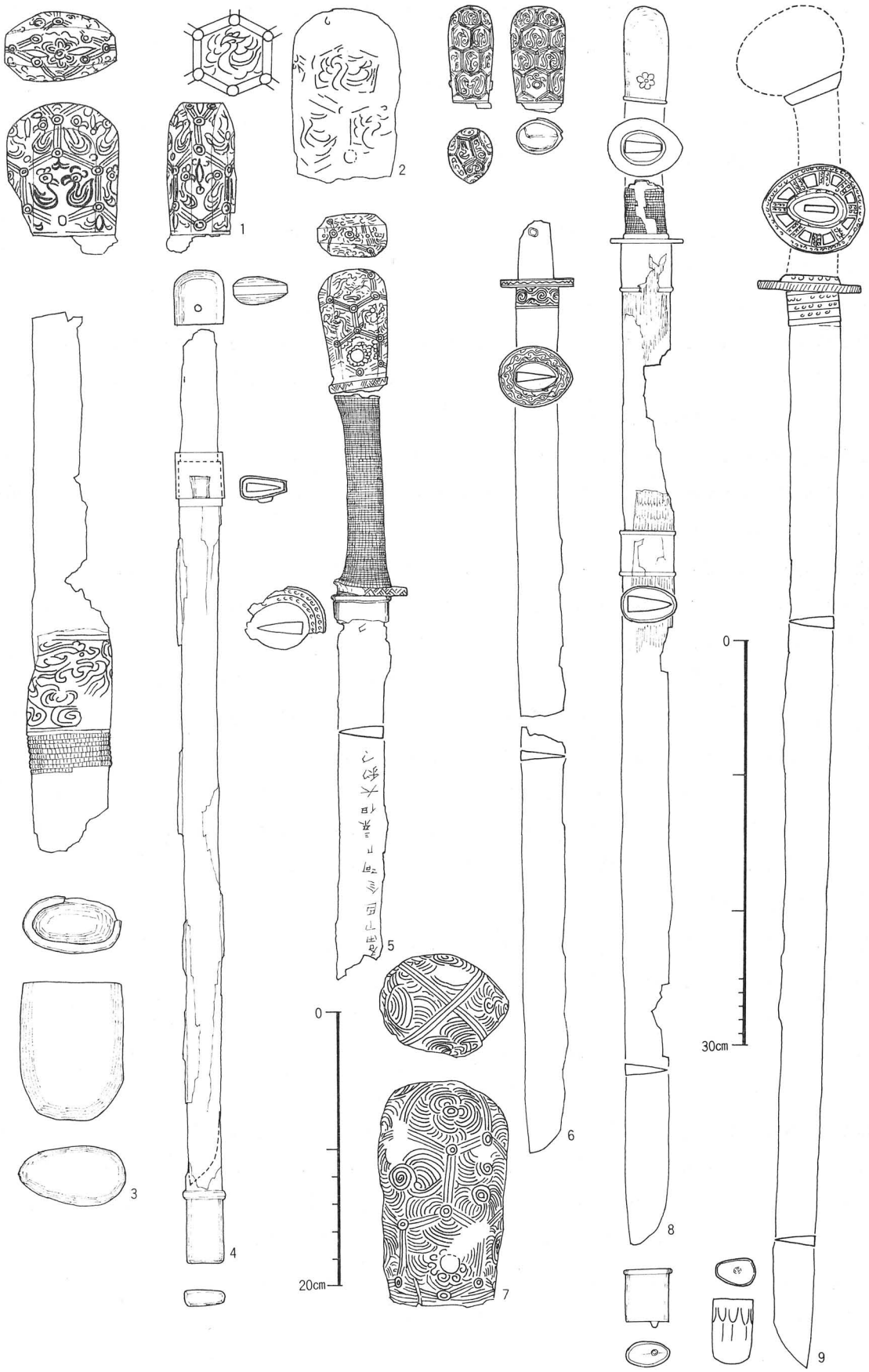
3　鉄地銀象嵌円頭大刀（「額田部臣」銘大刀）

(1)　形　状（第37図-5）

この大刀の外装具は，鞘口から柄頭までに残る。鉄の柄頭（鍛造か鋳造かは明らかでない）はかつて圭頭大刀と名づけられたことがあるように，先端の棟方よりも刃方の側面のほうがわずかながら傾斜がつよい。表裏2面の周縁には面取りがあり，横断面が八角形を呈する。長い円頭の下縁寄りに鵶目孔があり，柄頭と柄間の境に1個の責金具をはめる。柄間は棟方が直線なのに対して刃方が大きく内湾し，銀線を巻く。柄元には縁幅が余り広くない喰出し鍔をつけ，鍔と刀身との境に鉄の鎹をはめている。柄頭・鍔・鎹に銀象嵌をほどこし，刀身の佩き表に銘文を銀象嵌していることはいうまでもない。鞘口金具は銀板でその下縁らしい位置に責金具の痕跡がある。柄の折れ口の観察によれば柄木は1木から彫りだし，棟方から茎を装着した「茎落し込み法」の大刀であることがわかる。つまり，この大刀は「茎落し込み法」の倭式大刀に第4段階の円頭大刀の要素を加味した倭製の円頭大刀なのである。この大刀が，円頭大刀全体のなかでどのような位置にあるかをいうためには，煩雑ではあるが各種の円頭大刀を分析しながら考えなければならない。

(2)　円頭大刀の分類（第38図）

円頭大刀は金銅の環頭大刀にくらべて出土例が少なく，かつ鉄錆などに覆われて外装具の構造などが観察しにくいことからこれまで余り深い研究が行われてこなかった。しかし，鉄器の保存修理にX線撮影が大幅に取り入れられるようになった近年，この種の大刀を対象にする研究が盛んになってきた。さきに紹介した滝瀬芳



第37図　円頭大刀実測図(2)

之や橋本博文の研究は，近年の成果をとりいれて円頭大刀を体系的に取り扱おうとする野心的な試みである。[22] 滝瀬は外装具全体から円頭大刀を編年するのに対して，橋本は鉄製の円頭を飾った銀象嵌文様だけを取上げるので，おのずから両者の視点はことなっている。しかし，滝瀬の編年は煩雑で，橋本の編年は象嵌文様の変化のみに終始し装具の形態変化に対する検討が少ないので，私見を掲げることにした。ただし，まだ円頭大刀全体のじゅうぶんな検証をへていないので，大雑把な編年にとどまり，将来さらに細かく区分したり，改訂する必要があろう。

韓国の伽耶地方から出土するものを伽耶式円頭大刀とし，それを倭（日本）で改作したものを倭式円頭大刀とよぶことにする。さきに述べたように匙形の板を2枚合わせて円頭をかたどるものをA型とし，円頭を袋状の単体につくるものをB型とよぶことにする。そして，形式の前後関係をⅠ・Ⅱであらわすことにする。

伽耶式円頭大刀AⅠ型式（第36図-1）　円頭は2枚の銀板で，合わせ目を細い文様で飾る。柄木は2枚合わせで銀線を巻く，呑口式。柄元金具と鞘口金具は銀板。上述の昌寧校洞11号墳，連山里古墳例である。儀仗大刀第4段階，5世紀後期から6世紀初期。

伽耶式円頭大刀AⅡ型式（第36図-2・3）　外装の構造はAI型式と同じだが，装飾のある責金具がくわわる，円頭の先端が基部よりも広く厚くなる。岡田山1号墳の銀金銅装円頭大刀であり，奈良・鴨山古墳例である。儀仗大刀第5段階前半。

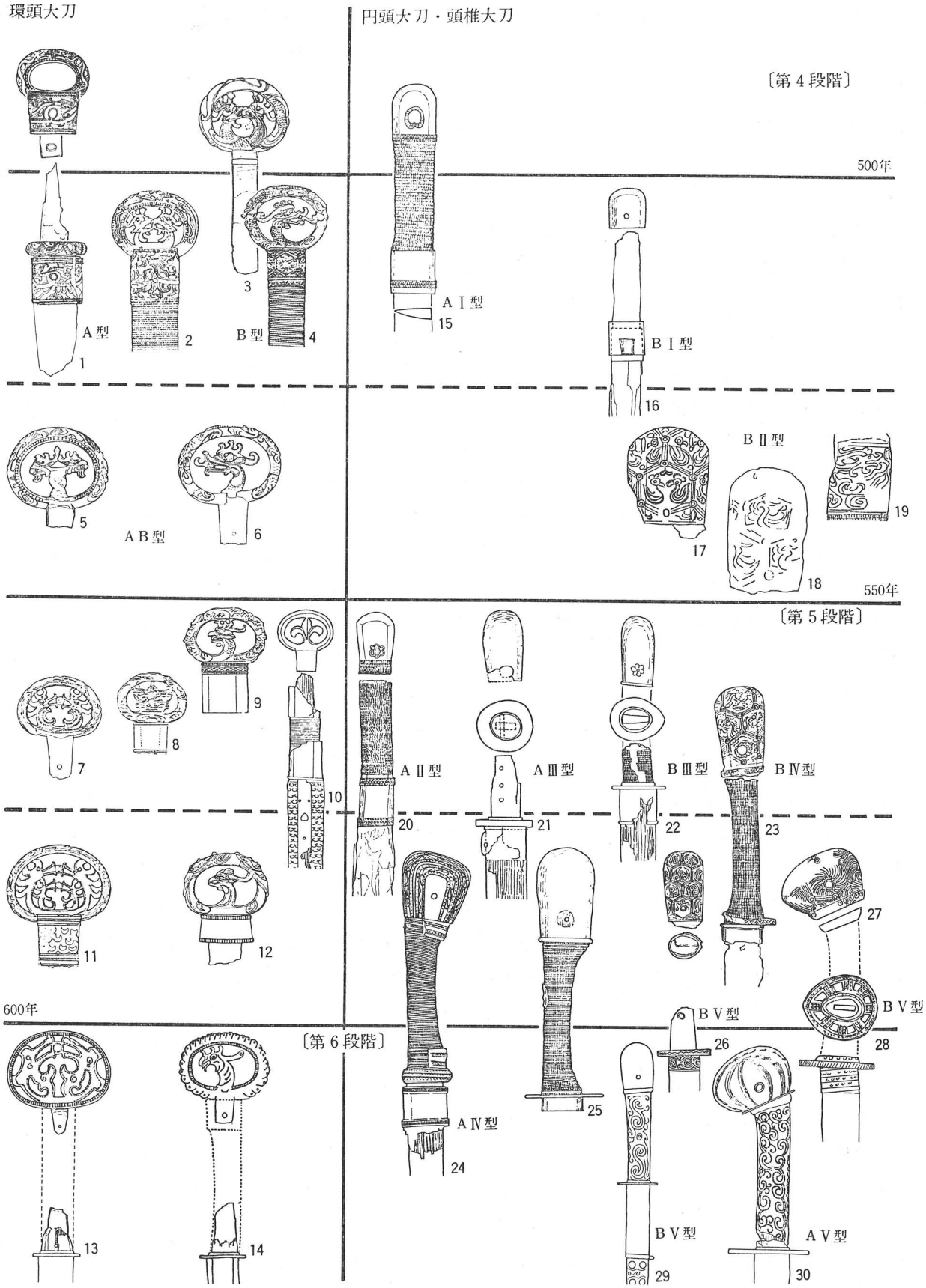
倭式円頭大刀AⅢ型式（第36図-4）　円頭は2枚の銀板。柄木は2枚合わせで，鍔と鏣をつける。宇洞ヶ谷横穴例である。いまのところ他に例がなく，とりあえず儀仗大刀第5段階前半におく。

倭式円頭大刀AⅣ型式（第36図-5・6）　柄頭は2枚の銀・金銅板。柄木は1木でつくり「茎落し込み法」で刀身を装着。柄間に銀線を巻き，喰出し鍔がつく。横佩きの足金物はつかない。栃木・台処山古墳[23]，島根・上塩冶築山古墳例[24]である。台処山古墳例は，鍔と円頭を銀板に打出し文様を飾った豪華品。上塩冶築山古墳例は，大きな鍔に窓をあけ，寸詰まりの円頭がつく。このように，それぞれ細部の細工にはかなりの相違点があり，定型化していない点が特色でもある。なお，穴沢・馬目がいうように頭椎大刀はこの型式から派生するのであろうが，群馬・観音山古墳の頭椎大刀にも台処山古墳と同じような銀板かぶせの鍔がついているので，[25] 円頭大刀から頭椎大刀への過渡期の形態とみられる。また，頭椎大刀の古いタイプもこの形式にふくめておく。儀仗大刀第5段階後半。

倭式円頭大刀AⅤ型式　定型化した頭椎大刀である。頭椎大刀は卵形に近い柄頭をつけ，大刀全体を金銅板で包み鞘口よりの2カ所に横佩き用の足金具をつけるのが特色。[26] 卵形の柄頭は打出しもしくは鋳造した2枚の半球形をした銅板を溶接してつくるが，なかには合わせ目に細板をはりつけるものもあり，円頭大刀AⅣ型から変化していることが伺える。一般に頭椎大刀は独立した形式の大刀として扱われており，本題とは直接関係しないので，深く立ち入らないことにする。儀仗大刀第6段階。

伽耶式円頭大刀BⅠ型式（第37図-4）　柄頭・柄元金具・鞘口金具・鞘尻金具の全ては銀の鍛造ないし打出しによって作ったようである。円頭の平面は半円形を呈し，表裏は凸面をなし先端に微かな面取りがある。周側面は平坦な面をなす。表裏の中央下縁よりに懸緒孔をあける。呑口式。今のところ日本からは発見されておらず，韓国・梁山夫婦塚例が唯一の遺物である。[27] 6世紀前半の古い時期におかれるのであろう。

伽耶式円頭大刀BⅡ型式（第37図-1～3）　外装の構造はBI型式と同じく呑口式の大刀。鉄地に金・銀で亀甲繋鳳凰文をいれた奈良・星塚古墳の円頭は伽耶式円頭大刀BI式とほぼ同じ形をとるが，表裏2面の基部を除く外縁を面取りするので，横断面は隅切りの長方形に近い形をとる。[28] かつて円頭をとどめていたが，現在では柄から刀身にかけての部分しかのこっていない兵庫・勝福寺古墳例では柄間に銀線を巻き，柄元金具に走



第38図　装飾大刀編年図

竜の銀象嵌を施す。走竜の文様は第4段階のA型環頭大刀にほどこした竜文に類似している[29]。この2例とBI型式との違いは少なく，時期に大きな隔たりはないものと思われるので6世紀第2四半期の古い時期に位置づけられよう。とりあえず福岡・鈴ヶ山2号墳例[30]もこの型式にいれておくが，時期的にはつぎの倭式円頭大刀BⅢ型式への過渡期の所産と考えている。というのは，鉄地の円頭に細線の亀甲繋鳳凰文を銀象嵌するが，横断面が到卵形を呈し縦長であるからである。ほかに大阪・山畑22号墳[31]の例がある。

この種の円頭大刀が韓国で出土した例をきかないが，百済・伽耶の製品であろう。儀仗大刀第4段階。

倭式円頭大刀BⅢ型式（第37図-8）　島根・古天神古墳から出土した銀金銅装の円頭大刀である[32]。全体に作りがひ弱で，柄間を銀線で巻き，小さくて薄い金銅の鍔がつく。高橋健自が「銀金具で包み」とのべている柄頭はいま残っていない。2枚合わせの円頭ならば，当然合わせ目の文様板に言及するはずであるので，鋳造ないしは打出しでつくった袋状柄頭であったと思われる。なお，円頭に銀板を用いていること，柄木が2枚合わせであることは，古い要素とみられる。鞘口とその下方に金銅の金具をはめ，鉄製の鞘尻金具をつける。このような形状はA型式の宇洞ヶ谷横穴例とよく一致し，倭で製作されたものとおもわれる。儀仗大刀第5段階の前半。

倭式円頭大刀BⅣ型式（第37図-5）　岡田山1号墳の鉄地銀象嵌円頭大刀である。その形状はすでに述べたが，特色は円頭が肥大し，「落し込み法」で刀身を装着すること，鍔がつくことである。円頭は鋳造らしい鉄地に亀甲繋鳳凰文を銀で象嵌，縦長で先端部の広さと厚みを増す。もうすこし詳しくいえば柄頭の先端は刃方に広がっており，これは柄間への接続が斜めになるためと思われる。なお，円頭の周縁を面取りしその横断面が八角形になるのは伽耶式円頭大刀 BⅡ 型式の名残。群馬・筑波山古墳，同・本郷，同・木崎8号墳，愛知・四ツ塚3号墳が類似品である[33]。第5段階の後半。ただし，岡田山1号墳例は伽耶式円頭大刀 BⅡ 型式の形態をなおとどめているので，この型式のなかでも古く位置づけられよう。筑波山古墳例および柄頭をとどめていないがこの形式の円頭大刀に想定される奈良・烏土塚古墳例[34]には，鎚本孔に連弧花文が銀象嵌され，同じ文様が倭式円頭大刀 AI 型式の上塩冶築山古墳例にみられるので，倭式円頭大刀の AI・BI 型式が同じ工房でつくられたことが想定できる。

倭式円頭大刀BⅤ型式（第37図-6・7・9）　鉄地銀象嵌のものが基本である。その外装具の基本的な構造は，倭式円頭大刀 BⅣ 型式と同じ。柄頭・鍔・鎚に銀象嵌をほどこす例が多い。柄頭の先端は平面が正円弧形に近い形，横断面は刃方の尖った円形に近い形をとり，銀象嵌は亀甲繋文が基本。鞘尻金具の先端は丸くおさまり蟹目釘を打っていない。福岡・塚花塚古墳[35]，愛知・木森1号墳例[36]などこの型式の円頭大刀は比較的多い。栃木・トトコチ山古墳例[37]も外装具をとどめる好例であり，肥大化した柄頭とその割に小さな鞘尻金具に特異なパルメット文様を銀で象嵌している。同じ構図の銀象嵌亀甲繋文をほどこした鉄地柄頭をともなう頭椎大刀も，同時期の所産と考えられる。以上の円頭大刀の円頭に比べて小型で，縁なしの帽子のような形をとる円頭がある[38]。平面形は将棋の駒に似て，ハート形や鱗文の銀象嵌をほどこす。懸緒孔の位置で目釘を通して茎に固定するものもある。形からすると伽耶式円頭大刀 AⅡ 型式の遺存形態ともみられなくはないが，倭式円頭大刀 BV 型式の終末形態とみるのが無難であろう。第5段階後半。

倭式円頭大刀BⅥ型式　金銅装のものである。柄頭を長めの袋状につくり，大刀の全体を金銅板でつつみ鞘口寄りの2カ所に横佩き用の足金具をつける。柄間・佩き表に半球状の打出し文とタガネによる列点で渦巻き文様などをほどこす。この型式では鞘尻金具の先端が丸くおさまり蟹目釘がなくなる。全体の作りは脆弱で，喰出し鍔などは金銅板を切り抜いただけのもののようにも見える。円頭であることを除くと，第6段階に盛んに作られている双鳳環頭大刀や頭椎大刀とおなじつくりである。群馬・川内天王山古墳[39]，新潟・宮口11号墳[40]の例である。

兵庫・箕谷古墳の戊辰大刀の年代は608年に比定するのが妥当な線である。[41] それに似てはいるが，一段階古い型式の外装具をともなう京都・湯舟坂2号墳の圭頭大刀，これと共伴する双鳳文環頭大刀を[42]箕谷古墳例よりも若干遡るものとするならば（報告では6世紀第3四半期に当ている），倭式円頭大刀 BⅥ 型式の年代は600年を前後する時期となる。ついでにいえば，この型式の大刀と類似する文様を鍔と鎺に銀象嵌する福岡・竹並D-18-3号横穴出土の圭頭大刀もほぼ同時期のものとなろう。儀仗大刀第6段階。

(3)　銀象嵌文様

円頭大刀の象嵌文様については，西山要一と橋本博文の研究[43]がある。西山の研究は古墳時代における刀装具の象嵌の全てを包括するので，円頭大刀の象嵌に対する記述は少ない。橋本は円頭大刀の円頭にほどこされた亀甲繋文の分析を主眼にしている。このことから，ここでは橋本の意見を中心にして検討してみよう。

橋本は円頭大刀の亀甲繋文をつぎのように分類する。

亀甲繋鳳凰文（A類）

単鳳を配するもの（A-Ⅰ類），ハート形文から火焔文へ遷移するもの（A-Ⅰ-a類）・旋毛状文へと変容するもの（A-Ⅰ-b類）

双鳳を配するもの（A-Ⅱ類）

亀甲繋花文（B類）

亀甲繋鳳凰文（A類）の出発点を百済・武寧王陵の単鳳環頭大刀，亀甲繋花文（B類）の出発点を韓国・月山里M1号墳の金銀象嵌環頭大刀[44]において，それらに後続する日本出土の円頭大刀の亀甲繋文を8段階にわけた。そして，各段階の年代については主として須恵器の編年を利用して，第1段階520年以前，第2段階6世紀第2四半期，第4段階6世紀末，第6段階6世紀期末，第7段階7世紀初頭とする。

橋本は，A-Ⅱ類の奈良・星塚古墳，福岡・鈴ヶ山2号墳例を第2段階におく。それは，双鳳の表現が写実的で，前者が金銀象嵌，後者が細線の銀象嵌であることを重視するからである。それについてはとくに異論はないが，すでに述べたように形態のうえからすると，星塚古墳が古くて鈴ヶ山2号墳が新しい。第3段階と第4段階との区分の根拠ははっきりしていないが，第2段階との違いとして，第3段階以降になると懸緒孔を亀甲の中心において亀甲繋文を配するようになるという。これは，伽耶式と倭式の違いでもある。

かれは第3段階のA-Ⅰ類の例として愛知・木森1号墳例をあげるが，その理由は単鳳が首と羽根しか表現されていないとはいえ，文様に崩れが少ないからである。しかしながら，柄頭は偏平さを失い円筒状に変形しているのである。さきに述べたように，岡田山1号墳例の円頭は形からすれば古い形をそなえており，この観点からすれば文様の崩れも木森1号墳と大差なく，双鳳は第4段階に位置づけられている他の文様の表現に比べて流動的である。つまり，かれの編年にしたがうならば岡田山1号墳例を第3段階にし，木森1号墳例を第4段階に下げるべきである。

橋本の分類にしたがうならば，現存する鉄地銀象嵌円頭が集中するのは第4段階である。そこでは一品ごとに文様が異なるといっていいほど，多様な象嵌文様が展開するのだが，その変容の起点を単鳳文だけに限定することができるのであろうか。例えば群馬・岩鼻例では，同じ亀甲繋文のなかで，崩れているとはいえ双鳳文と渦巻を中心にする旋毛状文とが共存しているのである。月山里M1号墳例の筒金具を飾る文様では，花文の横あるいは空間を爪形文のような線文で埋めており，これが旋毛文の原点に考えられなくもない。また，円頭大刀ではないが栃木・助戸古墳群出土の鞍金具[45]の銀象嵌では，亀甲繋文内の文様がパルメットの変形したものであろうということは容易に推測できる。さらに，奈良・藤の木古墳の鞍を飾った亀甲繋文[46]のなかには多種多様な文様がおさめられているではないか。

4　ま　と　め

以上，岡田山1号墳から発見された3本の儀仗大刀に対する年代を中心にして検討を行い，金銅装三葉環頭大刀と銀金銅装円頭大刀を6世紀第3四半期，鉄地銀象嵌円頭大刀を6世紀第4四半期の古い時期とした。

儀仗大刀は畿内中枢部に位置する倭政権の工房でつくられ，地方の豪族たちに配られたものとする見方については大方の意見は一致している。その動機についてはいろいろと考えられているが，少なくとも6世紀では，地方の豪族が倭政権の官人的な体制のなかに組み込まれ，かれらの身分や官職を象徴したのが儀仗大刀であったことは確かであろう。一方，鉄地銀象嵌円頭大刀について，銘文のある刀身と柄の外装具とは時期が違うとする見方がある。ありうる話である。しかし，考古学遺物の場合にはよほど明らかな証拠のない限り，外装と刀身とを同時期とみなさなければ論理は成立しない。つまり，銘文も文様と同じように倭政権の工房で象嵌されたものとするのが素直な見方であり，銘文の内容として出雲意宇の豪族にこの大刀が賜与された動機が記されていたのであろう。

島根県内でこれまでに確認されている儀仗大刀は20例[(47)]である。それらはいずれも儀仗大刀第5段階以降のもので，6世紀後半のある時期には共存した可能性がたかい。大型の石室墳では第5段階前半の三葉・獅嚙環頭大刀，伽耶式円頭大刀 AⅡ 型式，第5段階後半の倭式円頭大刀 A・BⅣ 型式が発見され，横穴を主とする小型墓からは時期の遅れる第6段階の倭製儀仗大刀が発見されている。このことは，大刀の配布の時期差を示すとともに，被配布者の身分的な序列をも示しているようである。また，大型石室墳からの出土例は意宇平野と出雲平野にまとまり，意宇平野の方に第4段階の儀仗大刀がかたよる傾向がみられるので，倭政権との関係は前者の方が一歩古かったことを物語っている。第5段階前半の三葉環頭大刀，伽耶式円頭大刀AⅡ型式，第5段階後半の倭式円頭大刀BⅣ型式が共存する岡田山1号墳の場合，大刀の副葬だけに限れば2時期の埋葬が想定されるのであるが，1時期の埋葬を考えることもなんら差支えない。というのは，幾たびか引用してきた静岡・宇洞ヶ谷横穴でも第5段階前半の単鳳環頭大刀と第5段階前半の倭式円頭大刀　AⅢ 型式が共存しているからである。

（町田　章）

註

(1)　小林行雄1986
(2)　新納泉1982，穴沢咏光・馬目順一1976，穴沢咏光・馬目順一1986
(3)　置田雅昭1985A・B
(4)　以下6段階までの分類は呼称を違えるが町田章1976・1986による
(5)　穴沢咏光・馬目順一1976
(6)　末永雅雄1943
(7)　江田船山古墳編集委員会1980
(8)　斉藤優1970
(9)　伊達宗泰・小島俊二1956
(10)　韓国文化財管理局文化財研究所1985
(11)　茂木雅博1980
(12)　穴沢咏光・馬目順一1979
(13)　向坂鋼二1971
(14)　新納泉1982，穴沢咏光・馬目順一1986
(15)　向坂鋼二1971，1982年に元興寺文化財研究所で修理したときの観察。

(16) 末永雅雄1934，1987年に勝部明生氏のお世話により橿原考古学研究所で観察した。

(17) 末永雅雄1943

(18) 小倉コレクション保存会1981，1987年に早乙女雅博氏のお世話により東京国立博物館で観察した。

(19) 大韓民国文化財管理局1974

(20) 穴沢咏光・馬目順一1975

(21) 滝瀬芳之1984

(22) 滝瀬芳之1984・1986，橋本博文1987A

(23) 1986年に栃木県河内町台処山古墳で出土，奈良国立文化財研究所で修理した柄頭と鍔の打出し文様は，永島氏の観察によればあらかじめ柄木に文様を彫刻した後に銀板をかぶせ上から打ち出したものという。

(24) 三宅博士氏の実測図による。

(25) 穴沢咏光・馬目順一1977

(26) 桜井達彦1986

(27) 馬場是一郎・小川敬吉1927，はじめこの大刀の銀製円頭は鋳造品であろうと考えていた。しかし1987年に早乙女氏のお世話で観察し，銀板の継目があることが分かり，鍛造ないしは打ち出しによって作ったらしいことが判明した。

(28) 小島俊二1955，1985年に観察。実測図は松本岩雄氏による。

(29) 梅原末治1935，川西市教育委員会が1985年に修理したときに観察した。

(30) 横田義章1985

(31) 西山要一1986

(32) 高橋健自1919，1987年本村豪章氏のお世話により東京国立博物館で観察。戦時中の疎開のときに円頭は失われたらしくいまはない。断片になった刀身をつなぎ合わせると1個体になる。ほかに2個体分の刀身断片と，蕨手文の押圧痕がある鞘木片が同じ箱にはいっているが別物のようである。

(33) 西山要一1986，橋本博文1986A，東京国立博物館1983

(34) 橿原考古学研究所付属博物館1982

(35) 横田義章1985

(36) 西山要一1981

(37) 橋本博文1986B

(38) 橋本博文1986A

(39) 滝瀬芳之1984

(40) 牧村教育委員会1976

(41) 八鹿町教育委員会1987，報告書作成中の観察。

(42) 新納泉1983

(43) 西山要一1986，橋本博文1986A

(44) 全栄来1983

(45) 金関恕・小野山節1978

(46) 橿原考古学研究所1986

(47) 島根県教育委員会1984，表12による。

参　考　文　献

穴沢咏光・馬目順一1975「昌寧校洞古墳群」『考古学雑誌』60—7

穴沢咏光・馬目順一1976「竜鳳紋環頭大刀試論」『百済研究』7

穴沢咏光・馬目順一1977「頭椎大刀試論—福島県下出土例を中心して」『福島考古』18

穴沢咏光・馬目順一1979「日本・朝鮮における鱗状紋装飾の大刀」『物質文化』33

穴沢咏光・馬目順一1986「日本における竜鳳環頭大刀の製作と配布」『月刊考古学ジャーナル』1986-8